

---

# すいみつとう

岩槻大介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

すいみつとう

### 【Nコード】

N8541F

### 【作者名】

岩槻大介

### 【あらすじ】

世界一不謹慎な話を世界一真面目に描きたい。そんな目標を掲げて僕はこの小説を書き始めました。不謹慎。いやあ、難しいです。ね。行動や言動だけではなく心が歪んでないと本物の不謹慎とは言えない。それを痛感して正直何度も挫折し掛けました。でも書き上げた今では、頑張っただけの追及したことを誇りに思っています。女性を侮蔑する冴えない中年男が容姿に自信のない妻を露出投稿写真の世界に誘う、報われない夫婦の物語。「感動した！」ではなく「軽蔑した！」との声が多く寄せられることを、僕はただただ願うばかり。

りであります。因果なものです。仕方ありません。僕が挑戦した  
い、と真剣に掲げた目標ですから。

## 第一章

とまれかくまれ人生とは実に不測なもので、結婚したらいつつも近くに挿入口があるからしてオ、オナニーなどしなくなるのだろうと思っていたのだがそんなことは微塵たりともなく、する、する、何だよするじゃん、っか結婚する前よかしてなくね？これでいいのだろうか。生きるってそういうものなのだろうか。などと人生について考え始めると朝はすぐに時間が経ってしまう。やべ。今日こそはいつもより一本前の電車に乗ろうと思っていたのに。これじゃ普段と大して変わらんじゃないか。くそう。そんでまあとりあえず行って来まあすと言ったものの革靴が埃だらけだったのでわ、わたくしは下駄箱からチューブタイプの高級靴クリームを出してキャップをくるくる、専用布の上に逆さにすると中から黒い液体がたらーんと落ちて染み込む染み込む、それを靴の表面にさっさっさ、よし、キャップをくる、あ。ばたん。べちよ。あ。わあ。とろんが垂れて下駄箱の天板にぬちゃーっと。わあ有美子、有美子。と、わたくしの人生や皮靴や下駄箱のことなど実はどうでもいいのであって、有美子だ。わたくしは、わたくしのつ、妻、有美子のことを語りたいのだ。もう有美子。わたくしより五歳年下の、白茶けた縦長曲線の「どうしたの？」

「あいや、靴のクリームがね、た、倒れちゃって」

「ああ何やってんのよ。拭くもの、あーん、もうっ」

有美子は取り乱しているわたくしを一瞥してすかさず自分のエプロンで零れた乳化性高級靴クリームを拭いた。黒く染まらずに済んだ我が家の下駄箱。黒く染まった有美子のエプロン。ぼっけに孔雀の刺繍がしてある。

「じゅめん」

謝るわたくしの鼻の辺りを有美子がちらと見る。そして溜息交じりに唇が動き掛けた時、外からスピーカーを通した中年女の声が響

く。お早うございます。今朝は旭町自治会の廃品回収日です。

「あ、いつけない忘れてた。ちよつと待ってて」

有美子、慌ててリビングのドアを開ける。そして首筋に二本の線を浮き立たせて再登場。両手には新聞、雑誌類を紐で束ねた塊二つ。

「一個持つてよ」

「ああ、はい」

床にどかつと置かれた束の一つを持ち上げわたくしは玄関ドアを開ける。我が家は再来年に建て替えが決定している団地の三階にある。向かいの棟のピロティーに雑巾でできた陽炎のような団地住民たちが見える。各家庭の廃品を持ち寄つて。回収業者がそれを乱暴にトラックの荷台へ放り投げている。慌ててサンダルを履く有美子。玄関を一步出て急に止まる。エプロンの黒く染まった部分を見る。

一瞬迷つた顔をしてから背中中の紐を解く。そして肩を竦めてするつとエプロンを剥ぎ取る。あ。プチ。あ。水色の、厚手のコットン生地だから目立ちはないが、有美子、Ｔシャツの、有美子、胸の、て、てっぺんの、てっぺんが、プチつて二つ。

「何突つ立ってんの、早く行ってよ。トラック出ちゃうでしょ」

「は、あ、ああ」

古紙の束を抱え、外廊下を二人で走る。階段を二段飛ばしで駆け降りる。隙を見て踊り場で振り返る。トントントントン、サンダル有美子。トントントントン、ノーブラ有美子。プチ、の周辺に小規模な肉の躍動が伴っている。そこには決して豊饒とは言えない隆起が存在する。わ、わたくしは、うくく、知っている。有美子はわたくしの殊更白い妻なのだから。

「すいませーん。これもお願いしまーす」

「あいよ」

眉毛と腕毛がやたらと長い小太りの回収業者。あ、お早うございます。有美子、雑巾陽炎たちに挨拶。プチ。旦那さんも何人かいる。有美子、不自然に肩を竦めちよつと前屈み。談笑。

「あ、あの」

プチ。見ていない。雑巾も小太りも、うん、見ていない、気付いていない大丈夫。

「あの、有美子」

「え？ああ、ありがとね。行ってらっしゃい」  
プチ。

「あ、ああ、行って、来るよ」

嘘だあ。絶対見たよ。少なくとも男は気付くよ。うわあ、有美子、談笑はもういいよ。あら戸村さんの御主人さん、いいわね若くて可愛い奥様で。いやあ、はははは。本当羨ましいですぞ、と初老の雑巾旦那。行ってらっしゃいませ。雑巾ばばあ。みんなでわたくしを見る。夕方の風に吹かれた猫の毛玉みたいな目でわたくしを見る。行って、来ます、ははは。やっぱ見てるよ。こいつら絶対プチを見てるよあ。うわ、うわ、有美子恥ずかしいよ、もう少し肩を竦めて立ってよ、さり気なく手で隠してよみんな見てるよほら、だめだよ恥ずかしいよ見られてるよ隠してよ隠さないでよもういつそのことどーんと突き出して、いやいや突き出さないで早くうちに帰って戻らないで見せてやりなさいほらプチプチってあー嘘やっぱだめだめ絶対にだめ、などと妄想をスクランブルさせながら結局近いうちにあのプチを思い出してオナニーするんだろうなあとわたくしいつも通勤路。あーあ。人生とは実に不測なものである。

本当、あーあ、だ。

若くて可愛い。ふん。嘘だ。知っている。有美子の顔は決して美しくない。一般的な尺度から言うと。ああ知っているとも。でもわたくしはもう十一年間も一緒にいるので、そこに一般的な美醜の定理を当て嵌めることができなくなっている。フーか見慣れた？分かっている。十一年前、見合い写真を開いた時の美しくない、とフラットな状態で意識が反応した記憶をわたくしは時折思い出す。でもそれは反応したという事実を記憶しているだけに過ぎず、落胆を呼んだディテールについては既に消去されている。とりあえず有美子は、現在では笑うと片頬だけに笑窪ができる三十五歳のプチプチ妻

だ。いいのだ。成立しているのだ。プチプチ以上のことをこのわたし  
くしがどの面下げて妻に求められようか。

## 第二章

机の上に置いておいた筈の、次の折衝に使えそうな資料のコピーが昨日の朝なくなっていた。部下の倉田くんに捨てられたのだ。課長にそのことを言ったら君が朝来るのが遅いからだ、と言われた。みんな始業時間の三十分前までには来てゴミをまとめたり掃除機掛けたりしてるんだ。なのに君はいつもギリギリの時間になって駆け込んでくる。眼鏡曇らせて。だから捨てられちゃうんだよ。

都市開発における環境対策の手引き。倉田くんが捨てられたのはそんな小冊子から抜粋した資料だった。再度コピーしながら、わたしは自分の手が6メートルくらいにまで伸びる光景を想像した。この長い手で5メートル先に座る倉田くんの後頭部をパシッ。そして課長の禿げ上がった額をペシッ。ぬはは。地球。人類。環境。世界一スケールのでかい文字をコピーしながら世界一スケールの小さい想像をしているわたくしは、こう見えても東京都のや、役人である。公共工事によって建物に損害を受けた住民に対する補償の折衝。それがわたくしの課の仕事だ。わたくしは、か、か、係長だ。

午後からは課長、倉田くん、わたくしの三人で都道環状道路建設工事の現場。杭を打った際に水枯れが発生し、周辺の地盤が微妙に沈下したらしい。近隣家屋の居住者から幾つか都に苦情が入った。実際に被害が確認され工事との因果関係が立証されたら、発注者の東京都は被害者に対し損失分を補償しなくてはならない。まあでも工事による被害など滅多に発生するものではない。中には幾許かの補償金目当てに大袈裟な瑕疵をでっち上げる住民もいる。そこで我々環境対策担当の出番。調査結果を基に正当な補償方法を導き出し、これで勘弁して下さい、と頭を下げて回るのだ。直接的な加害者ではないので謝るのはどうも腑に落ちないな、と思ったのは最初だけ。すぐにどんな理不尽なクレームにも平べったい感情で対応できるようになった。わたくしの感情は平べったいのだ。基本的に。



「シマリがねえ、悪くなつた気がするのよお」

無作為にピンクめいた桜の季節も終わり、日が大分長くなった。その反動かよ奥さん。短いよ。スカート。夫の収入だけで充分暮らしていける。子供も親より友達同士で遊ぶ方が楽しくなった。専業主婦。専業主婦。もんもんもやもや専業主婦。わたくしにも一人娘がいる。しかし琴美は、わたくしの娘・琴美十歳は、未だに有美子の布団で一緒に寝ている。週の半分は。そして何かというとき、おかーさんおかーさん状態。従つて有美子にはもんもんもやもやする暇もない。琴美は可愛いが、夜は正直、邪魔だ。うん。

もんもん主婦の家の応接間は広い。うちのリビングの3倍はある。「だから工事が始まる前はスムーズに閉じてたんですって。それがこれよ。ほら、枠に擦つてる。音が聞こえるでしょ。しゅ、って」「でもね奥さん。金属製の建具は重量があるからネジが緩みやすくなつてるんです。それを今回の道路工事のせいにされたら、役所としても敵わんですよ」

課長がもんもん主婦に説明する。自分の視線をしつかりと握り締めている。手綱だ。放つておいたらおそらくあらぬ方向へ走り出してしまふのだろう。視線が。

もんもん主婦を何とか押し伏せ、我々は次の折衝相手の家へ車に向かう。着工から十年以上の歳月を掛けてやっと開通した環状道路湯気が立つ程できたてほやほやのアスファルト。広い歩道。美しい植樹帯。素晴らしい道路の開通に周辺住民はさぞかし喜んでいてだろう。なんて甘い甘い。

「完全に補償金目当てですよ、あの奥さん。建設反対者の集会にも顔を出したことないらしいっすから」

ハンドルを握りながら、倉田くんが言う。

「いや、ああいうタイプこそ侮れんだよ。あの顔はすぐに訴訟を起こしたがる顔だ。勘違いしたプライドで武装している住民は一番手に負えんからな」

と助手席の禿げ課長。

「ホント、勘違いも甚だしいっすよ。何すかあのスカート。自分の歳分かってるんすかね。シマリが悪いのはドアだけじゃねーだろ、って言ってやりたかったすよ」

「はははは。でもまあ、それだけあったかくなっただってことだよ。最近は天気もいいし。嬉しいことじゃないか。スカートが短くなる季節。うーん。俺なんかすぐ目が行っちゃうよ」

「確かに。すげーのいますからね。あ、でも課長知ってます？最近じゃミニスカートよりもっとヤバいのがあれっすよ。この時期に薄手のコートみたいなのを羽織っているやつ」

「何だそれ、どういうことだ」

「着てないのがたまーにいるらしいっすよ。中に」

「着てないって、何にもか」

「下着くらいは着けてるかも知らないっすけど」

「なになに、よく分からんな。一体どうして。暑いからか」

「違いますよ。外でバツと広げて写真を撮れるようにです」

「写真？」

「デジカメを持ったやつがすぐ近くにいて、撮った写真をアップするんですよ」

「デジカメ？アップ？どういうことだ倉田くん」

「露出マニアの投稿サイトっす。やつらはそこで品評会みたいなことをやってて。あれ。課長、見たことありません？」

「ないない。って言うかそれって捕まるだろう」

「捕まるようなことだからスリリングなんじゃないっすか。それに撮影は誰もいない場所とか、いても完全な死角があるようなトコを選んでやるみたいだし」

「へえ。大した、というか呆れたもんだな。そこまでやるか」

「呆れちゃいますよね。あ、この家でしたっけ、次」

「え？いやもうちょっと先だったような…、そうだよな、戸村くん」

「…」

「戸村くん!」

後部座席でわ、わ、わたくしは、思いつ切り勃起していた。

### 第三章

その夜、有美子が寝静まってからわたくしは勿論パソコンの電源を入れた。勿論ろしゅつとうこうさいと。変換。検索力チツ。うお。それらしいのがズラツと。よし。この『アウトドアの館』力チツ。年齢認証。これより先はアダルトコンテンツを含みます。十八歳未満の方はご利用になれません。あなたは十八歳以上ですか？以上ですとも。物凄く、以上ですとも。力チツ。ホントだ。これ投稿形式になってるんだ。ホームページの掲示板みたいに。なんか、キャプチャー画像からして既に凄いぞ。力チツ。ぬおっ。これどっかの歩道橋じゃん。下に見えるのは、高速道路。橋の手摺に捕まって、前開きの、コート、薄手の、いや違うよ、なんつーの、ワンピース、そう、短いワンピース、ジーンズ生地。そうか、これだと服の開閉が容易にできる。開閉つてもおかしいけど。スクロール。うわ、女が尻をこちらに向けた。ローアングルで撮ってるから、あ、水色のパンツが。っか若いなあこの女。なんでまた。ギャラとか貰ってやってるんだろうか。いや違う。好きなんだ。きつと。分からないけどこの女は何かが好きなんだ。とつても、愛しているんだ。太陽の光がワンピースの色素に溶け込むように注いでいる。温度が分かる。体温が、尻の体温が分かる。愛が分かる。勘違いした光が見えていい部分を張り切って照射しているため、見えてはいけな部分がない部分にリアルな体温を流し込んでいる。花が開く。わたくしの頭の中に咲く。勃起花。スクロール。むああ、水色のパンツを半分まで下げた。アップ画像。し、尻。上半分だけの白い尻。人に見られたらどうするつもりだろう。わたくしは想像する。ああ。実際に下の高速道路には車が。この歩道橋だっていつ誰が通るか知れたもんじゃない。見られたら恥ずかしいよ。男のわたくしでも見られたら

強烈に恥ずかしいし死にたくなる。見られる。見られたい。女は恥ずかしくないのか。見られたいのか。いや恥ずかしいだろう。少女くとも有美子のような女は恥ずかしいがる。有美子、恥ずかしいよな。見られたくないよな。尻を。乳首を。服の上からでも。ぬふ。眼鏡が曇る。やっぱり違う。課長。ギリギリで来るのと眼鏡が曇るのは関係ないでしょ。例えギリギリでも間に合ってるんだからいいですよ。そう、ギリギリで。ギリギリでパンツを上げるんだ。この歩道橋。誰かが来たらギリギリでパンツを上げて、そしたら普通じゃん、普通にその、ワンピース着て立ってるだけですよ。な、何も疾しいことはしてません。ってバレないバレない大丈夫だ。でも。わあ。わたくしだったらすぐに気付くだろうか。カメラを構えているのがこのわたくしだったら。あ、誰か来た、パ、パンツを上げる、早く上げる有美子。カタン。音がする。琴美の部屋だ。ベッドから降りた音だ。トイレにでも行くんだろう。私は何も見なかった顔を作るブックマーク。新規登録。カチツ。画面を閉じる。ブックマーク名前の変更。ぎょうむしりょう。変換。

## 第四章

わたくしは断じてスケベな男ではない。対外的には。あ、でも裏では、などというミスティアスで間抜けな二面性を持っている訳でもない。ただわたくしの頭の中、というか妄想の衷心では大体においてスケベな花が開いている。壁紙になっている。でもそれはあくまでもわたくしの心の壁紙であって内なる異次元ビジョンであるから大丈夫。他人が察することはない。だからこうして両手を上げる朝の山手線。もうこれ以上無理だろ、という段階から肉たちの圧縮が始まる。後ろの、その後ろにいる乗客の鼓動まで伝播してきそうな満員電車。わたくしの前にリンスの香り。昨年の夏休みに琴美と行ったハーブガーデンでこんな匂いを嗅いだ。ような気がする。うーん。などと言ってはおれない距離にある後頭部。さつきから幾度となく鼻先が当たる。何の花だっけ。ってそもそも花などに興味の無いわたくしには、あ。リンスがわざとらしい咳払い。わたくしは何もやってませんよ。ほらこうして両手を吊革に。っーか正確には吊皮を垂らしたパイプに。コホン。近過ぎてスカートなのかズボンなのかさえも分からない。背面の表層は殆どと言っつていくくらい真後にいるわたくしの前面と圧着している。コホン。顔の表情も見えない。ただ後頭部は何かを訴願している。強烈に何かを拒んでいる。何だ、どうした。わたくしは潔白この上ない態勢。すると前から誰かの手が、彼女の前面を。前面って何。どこ。え。何してるの。彼女の前には初老のスーツのやつと茶髪ホストみたいなやつと太ったニキビ面の若者。え。何してるの。彼女の前面に。前面のどの部分に。胸。まさか、あそこ。何よ。手で、指で、あ、あれ、両手を上げた咎められることのないわたくし。の。あら。少しずつ堅固に。背面、つまりスカートだかズボンだか分からない尻に密着しているわたくしの。あれ。いかん。見えない分妄想の衷心でリンスの下半身が生肌になっている。ありゃ、わたくしの下半身も生。生のちん

ちんがリンスの下の背中の中の生尻に。ああまずい。尻。だめ、閉じる勃起花。乗客たちが見ている。高速道路が見ている。見られている。血液が躍動を始める。肥大し膨張を増幅させる。

異常なのかな、と不安に思った。中学生の頃。堪らなく女性の裸が見たかった。土手で拾った工口本を雨が避けられる秘密の場所に隠した。本の中で女はセーラー服を着たまま股を大きく広げていた。ちんちんが付いている部分に何も付いていないことが信じられない光景だった。ない、ということは、果たしてそこには何が存在し、それはどんな形をしているのか。しかしそこにはまんべんなく白いクリームが塗られていた。見せることはできないだろう。見せたら警察に捕まっちゃうだろう。白いクリーム。セーラー服の女。笑ってるよ。お父さんやお母さんに見られたらどうする気だろう。恥ずかしくないのかな。あ、きつとこの女には両親はいないんだ。

施設で育ち、今は一人でこの工口本の世界で生きてるんだ。じゃなきゃ笑えないよ。いいんだよ。いいのよ。広げたいのよ。クリームを塗りたいのよ写真に撮られたいのよいいのよ女はみんな望んでるのよお父さんやお母さんは関係ないの。うううう。そうして中学生のわたくしの頭の中は白いクリームだらけになり女の先生はみんな家に帰るとクリームを塗りクラス的女子たちもいずれクリームを塗って笑うものだと思っただ。次第に見られなくなった。まともな女子たちを見られなくなった。警察に捕まるくらいいけない謎を解いてしまったと思っただ。自分は中学生としての常軌を逸した異常者に違いない。この頭の中を誰かに覗かれたら確実に通報される。自分は異常者。異常者。男子中学生の頭の中など大抵そんなもんだ、とそれから何年も経って知った。正直ほっとしたが完全に払拭された訳でない。それは四十歳になった今でもトラウマのようにへばり付いている。私の頭の中は正常ではないんだ。

だからわたくしは逮捕されないように、満員電車の中では両手を上げるようになった。だって差し伸ばさなくても密着してくる女の胸や尻はいいのよと言っているような気がしてしまうから。声が聞

こえてしまうから。でも、それが仇となるとは。どうにも制御できない。わたくしの、堅固化。いけない。しかし聞こえてくる。いいのよ。見えてくる。笑った女。クリームを塗った女。白い。黒い。黒い高級靴クリーム。ああ。下半身に力を入れる。遠ざかるうと。尻。ああ。高速道路。乳首。有美子。水色のＴシャツ。プチプチ。逮捕されてしまう。いや、逮捕されるのは前面から何かをしている誰かだ。わ、わたくしは、不可抗力というか、その。でもさ。全部じゃないにせよちょっとくらいはリンスの女も後ろからいいのよとなっているかもしれない。有美子だって時折後ろからいいのよという顔をして四つん這いになる。この女も時折なっている筈だ。昨夜なつたばかりかも知れない。いいのよ。でへ。キミは知らないであろう。キミの背後にいるわたくし。顔色一つ変えずとも、一部分は少しずつ、いや急激にカタチが変わっているのだよ。ぬしし。いいかい。いいのよ。わたくしは頑張つて後方に移動させていた腰を少しずつ元に戻す。堅固化が最終段階にきている。リンスの尻からしてみればそれは異物化なのかも知れない。密着したわたくしの股と女の尻。そこに存在の主張を始める硬い異物。少しずつ。大丈夫。逮捕されない。大丈夫。いいかい。いいのよ。いいのよ。見られたいのよ。前開きのワンピースの中を。水色のＴシャツの上から。わたくしの頭の内側から何かが一步步つ外側へ踏み出して行く。か、壁紙を破つて。大丈夫。いいんだよ。望んでいるんだよ。女は望んでいるんだ。見られたいんだ。押し付けられたいんだ硬いちんちんを。いいんだよ。いいのよ。見られたいのよ。ち、ち、乳首を。



## 第五章

二週間に一度、わたくしは嘗ての大ヒット曲『ビューティフルサンデー』を口ずさむ。土曜日の朝だというのに。

さわつやかな日曜。

ふりっそそぐ太陽。

へーいへーいへーいッツァビューリホーデー。

出掛けよう彼方に。

うたっおうたからかに。

へーいへーいへーいッツァビューリホーデー。

は、は、は、は、ビューリホーサンデー。

今日はすば、すば、すば、すば、すばらしいサンデー。

きつと、だ、だ、だ、だ、だれかがぼくをお。

おうおう、ま、ま、ま、ま、おう待ってる。

いつからだろう。これはわたくしへの応援歌だと思つようになつたのは。今日は素晴らしいサンデー、きつと誰かが僕を待ってる。そう言いたいだけなのに。だ、だ、だ、だ、となつてしまふ。いいじゃないか。伝わればそれでいいじゃないか。

カウンターのの中には馬のように顔の長い中年女が座っている。待合室の椅子はふかふかだ。その端っこで週刊誌を読む、と言つか読む振りをしている。この時間が居たたまれない。訳も分からず座つて絵本をめくっている未就学児。何となく感じる羞恥心を駆逐させようと持参したゲームボーイを見たまま顔を上げない小学生。そして彼らを連袂してきた表情のないそれぞれの母親たち。そんな中でわたくし。どう映っているのだろう。考えると哀しくなる。椅子がふかふか過ぎて哀しくなる。本当に彼方へ出掛けたくなる。わたくしの名が呼ばれる。馬面中年女の素晴らしい発音で。気になさるな

いことですよ。吃音は病気じゃないのですから。従ってこれは治療でも何でもありません。アドヴァイスです。白髪のカウンセラーは最後に毎回同じことを言う。

## 第六章

リビングのドアを開ける。テーブルで漢字ドリルをノートに書き写している琴美が見える。ただいま。わたくしが言うのと琴美は表情を全く変えずに視線だけをこちらに向けた。おかえり。独り言のようだ。あれ、お母さんは。言った直後、わたくしの目に床の上で腹這いになったまま微妙に震える有美子の姿が映った。

「何やってるんだ」

「見りゃ分かるでしょ、美容体操よ」

そう言つて有美子は片足を天井に向けて何度も上げ下げした。そのたびに床がキュッキュツと音を立て、琴美の鉛筆を走らせる音を乱暴に掻き消した。

「それより前から言ってるじゃない」

「なに」

「帰ったらただいまくらい言つて、って」

「言つたよ」

「ここでじゃなく玄関で言つてよ」キュツ、キュツ。

「言つたさ。げ、げ、玄関でちゃんと」

琴美の鉛筆が止まる。父親の吃音については母子の間でダブルとなっているようだ。でも、琴美はダブルとする理由が完全に把握できていないらしい。特に最近ではわたくしのこういつた些細な噛みに触れた時、得体の知れないストップモーションとなり有美子を不安がらせる。有美子はできた妻なので常日頃からお父さんの吃音を絶対に嘲笑してはならぬと言い聞かせている。に決まっている。そんなに気構えなくていいのに。それにわたくしは、自分でも思う。やはり、家庭だ。家にいる時はどもる頻度が絶対的に少ない。

「そう言えば琴美」

特に娘と話す時は全くと言つていい程わたくしはどもらない。

「この間の漢字検定、どうだった」

「ダメだった。つーかこの間、って随分前の話じゃん、それ」  
「そうだった」

「そうだよ。全然聞いてないんだから、あたしの話」  
「聞いてるさ。忘れてただけだよ」

「そんなわたくしの言葉を、琴美は聞いちゃいない。」

「で、次はいつなんだ、試験」

「来月。それもこの間言ったよ」

床からは相変わらず有美子が発するきしみ音が響いている。

わたくしはテーブルの上を覗き込んだ。四角いマスの中に鉛筆書きの漢字が並び、その上に赤インクで書かれた幾つもの丸が見えた。丸が書かれていないマスもあった。原因の、因。

「琴美」

「なに」

「大、が付く名前のやつ、クラスにいるか」

「大？大西とか、大清水とか、太田。あ、太田さんは太いって字か」

「気に入らないやつじゃないか」

「誰が」

「だから、大西や大清水」

「別に。二人とも超仲いいし」

「じゃあ他に大がつくやつは」

「何なのさつきから大、大って。あ、いた。苗字じゃないけど」

「何ての」

「大介」

「そいつは、大介は、気に入らないやつか」

「うん。てかうざい。動きとかも妙に又ツタリしてマジ狸だし」

「そうか。狸なのか。よし、じゃあ明日から琴美のクラスで原因不明の事件が起きたらまずその大介を取り囲め」

「え？なんで？超イミ分かんないんですけど」

「大介を、囲む。大を四角で囲む。そうすれば原因が分かる」

そう言っただけはわたくしは鉛筆で新聞紙にその通りの字を書いた。

「あ、因だ」

その日唯一琴美がわたくしの顔を見た瞬間であった。

宿題を終えた琴美が風呂に入った。4年生。お父さん一緒に入る。とはもう言わない。生意気に。女のからだにもなっていないくせに。キュツキュツ。有美子は黙々と床を鳴らしている。ソファーに両手を乗せて、前屈みのまま下半身の屈伸運動を繰り返している。やけにフィットした黒いスウェットの上下。髪を後ろで一つに束ねてその束から洩れた数本が汗によって絡み合い、一本の太い曲線となり首筋にへばり付いている。膝をぴんと伸ばすたびに尻がぐいっとなつてつるんとして柔らかそうな塊が二つ現れる。くいつで、つるんっ。そうだよ。有美子は、有美子のからだは、細くはないが決してデブではない。おっぱいも小振りだけど、女だ。女のからだだ。4年生とは明らかに違う物体だ。オトナのからだなのだ。いえい。つるん。わたくしは水を飲もうと流し台の蛇口を捻ろうとしてそのまま何となく見入ってしまった。上下する有美子の尻。二つの有美子の塊。いいじゃん。有美子のからだ。顔を写さなければこれはちよつといけるかも。本人には絶対に言えないが、からだだけなら。こうして後姿だけなら。

「何見てんの」

尻が上下しなくなっと思ったたら、顔がこつちを見ていた。

「あ、いや、あのさ、有美子必要あるのかなと思って」

「何が」

「び、美容体操。ほら、全然デブじゃないし。イケてるし」

「やだ太ってるじゃない、私」

「太ってなんかないよ、有美子が太ってたら本当に太ってる人はどうなるんだよ。有美子は痩せてるって。痩せてる上に出るところはそれなりに出ている、なんか綺麗だからだしてると言っつか、うん」

「なに力説してんの」

「いや、だ、だ、だっつて」

「綺麗、なんて。ひよつとして喧嘩売ってる？」

「何で？だつてからだは本当に綺麗じゃん。あ、か、顔もね」

う。墓穴を掘ったか。有美子は嬉しいんだか哀しいんだかくしゃみがしたいんだか分からない表情でしばらくわたくしを見ていた。つーか基本的にそういう作りの顔なんだけど。でも、尻は逸品だ。どうして今まで意識して見たり触ったり撫でたり舐めたりしなかったのだろう。そうだよ。わ、わたくしは夫なのだからできるのだ。してもいいのだ。触ったり舐めたり。う、花が。その時、バスルームのドアが開く音。琴美が出てきた。ヤベ。花よ、ここはひとまず鎮まれ。つてわたくし不遜にも有美子の顔を見る。たはは。…ん？わたくしの思考が急停止する。罪悪感が前につんのめる。有美子の顔。勃起を鎮めるためにあるような顔。その唇の右横に控え目な、そして見事なシングル笑窪が。

「綺麗、つて…嘘でしょ」

え？まだそれについて考えてたんだ…。

## 第七章

わたくしは生まれ変わっても魚にはなりたくない。風に吹かれ汗を流し雨に打たれて日の光を浴びたい。わお。わたくし結構野性的。円形の巨大水槽の中で泳ぐ無数のカツオたちを見て、そんなことを思った。カツオたちよ、わたくしは日の光を浴びることができる。日の光の下で笑うことも怒ることもできる。カツオたちよ、カ、カツオ……。あ。カツオたちの前に水槽の強化ガラスがあつて、そこにわたくしの風体が映っている。ずんぐりむっくり。ぼさぼさ頭。眼鏡顔。ああ、野性的なパーツが全くない。ネジ一個すら見えない。

「あれ、琴美どうした」

「しっ」

わたくしがトイレから戻ると、芝生広場の中央で琴美はなんと有美子の膝に頭を乗せて横臥していた。有美子ちよっぴり困惑顔。気分でも悪くなったか。違うのよ、眠かっただけ。水族館に行くの楽しみ、って昨日遅くまで起きてたからね。何だ、寝ちゃったのか。わたくしも腰を下して琴美の顔を見る。地面に顔を近付けるとミントガムのような草の匂いがした。本当だ、軒かいてるよ。4年生になつても疲れると母親の膝の上に頭を乗せて寝ちゃうのか。まだまだ子供だなあ。有美子はそんな態勢のまま恨めしそうな顔で腕に日焼け止めクリームを塗り始めた。日の光、何を。わたくしの有美子になんてことをするのだ。この野性的変態野郎。太陽を野郎呼ばわりするのはわたくしと石原裕次郎くらいだぞ。それにしてもここ、随分と広い。人工浜が一望できる緑色の丘。同じような家族連れで賑わう休日の昼下がり。同じような家族たち。同じような妻たち。

「予想通り水族館混んでたな」

「うん」

わたくしはデジカメを出して撮ったばかりの魚たちの写真をプレビューする。当てずっぽうに撮りまくったので結構同じ魚がダブっ

ている。あ、これ要らないな。よし削除。あ、これも削除。これも、と。それにしても暑い。カレンダーの数字たちはまだまだ、と言ってそうだが、この日差しは明らかに夏だ。

「重ね着なんかしてくるんじゃないわ。暑くて耐えられないわ」

「じゃ、Ｔシャツ脱いじゃええ」

「いやよ。この下はタンクトップだもん」

「いいじゃん。おかしくない気温だよ」

「いや。だったらタンクトップの方を脱ぐわよ」

有美子、おなかの中に何やら手を入れる。

「なるほど。…ってここで脱ぐのかよ」

「だって動けないもん。琴美がこの状態じゃ」

「でも、こ、ここは…」

「肩だけ外しちゃうからさ、あなたこっちに来て衝立になってよ」

「できるのか、そ、そんなこと」

「女子は得意なの。教室で体操着に着替えられるんだから」

わたくしは有美子の背後に場所を変えて座った。モゾモゾ。Ｔシャツの中で何やら動き出す有美子の腕。膝の上に琴美の尻。起こさないように起こさないように。紺色のタンクトップの左肩が、わわ、器用にまあ、外れた。起こさないように。見えないように。続いて右肩が。うわ、こっちは難易度が高いぞ。ほら言わんこっちゃんないわあ、白いブラジャーが、薄ピンクのレースの縁取り。わあ有美子、芝生広場の真ん中で、こんなに人がいっぱい、家族連れの視線炸裂と思いきや誰も見ていない。わたくし咄嗟に、パシヤ。

「ちよつとお、何写真なんか撮ってんの。ちゃんと隠しててよっ」

「わあごめん。だって、その」

するする。両肩の外れたタンクトップが有美子のＴシャツの首元からするすると抜き出される。見事だ。マジックだ。

「その何よ。信じらんない、もう。見えてなかったでしょうね」

「ああ大丈夫大丈夫。つーか、ちよつと見えてたけど。でも全然、誰も見てる人なんかいなかったから。うん」



「そういう問題じゃないでしょ。じゃ何で写真なんか撮ったの」

「それは何つーか、有美子すつごくその、色つぽかったから」

「いろ…!」

有美子絶句。慌てて琴美の顔を見る。琴美すやすやいい寝顔。続いて周囲を見る。そんで小声。わたくしもつられて小声。

「何よそれ」

「だから、ゆ、有美子、色つばいなあと思ってたつい」

「…私が、色つばい?」

「うんうん。脱いでる時の仕草とか、表情とか、この背中がちらつと見えた感じとかがあーなんか、え、映画みたいだなあって」

色つばい。おそらく有美子の鼓膜に生まれて初めて侵入した言葉それが脳に伝わったはいいけれど、どう処理していいか分からず迷って困ってじゃん。という表情で有美子は私を睨んだ。睨むな。

「ねえ」

「ん?」

「写真、見せてよ」

わたくしは琴美の寝顔を再度確認してから恐る恐るデジカメのプレビュー画面を見せた。日の光を浴びた有美子。背中。タンクトップ。肌。脇の下の肌色。わあ、ブラジャーの白色。年季は入っているけど余分な肉は付いていない脇の下から腰にかけての生肌ライン。その周囲に芝生。日の光。外。アウトドア、アウトドアの館。わあ、有美子食い入るように、わあ、見てる、咲く。溶ける。わたくしの中で何かが溶ける。溶ける。溶けてしまえ。タンクトップも、Tシャツもブラジャーも、みんな溶けてしまえ。

「ふあ、あれ、寝ちゃった…」

ふいに琴美が起き上がる。わたくしプレビューボタン速攻オフ。隠れていた有美子の青いスカートと小さな膝が芝生の上に現れる。なぜか反射的に距離を置くわたくし。あ、琴美ちゃんおはよ。言いながら有美子も肩の辺りやスカートの裾とかを指で直す。

「どうしたの。何見てたの?」

「ああ、その、あれだ。さっきの魚。ちゃんと写ってたかな、って」  
琴美、ふーんと言いながら寝呆け状態。視線が浜風に力なく押し戻されている。その隣で有美子も、あれ、有美子の視線もだらんと垂れ下がっている。むむむ、顔が、赤いぞ有美子。どうした。赤くなってるぞ。

「お父さん、ソフトクリームが食べたい」

## 第八章

業務資料。クリック。カチツ。ぬほほほほ。もう何度目だろう。十八歳以上ですか。はいはい、その倍以上です。投稿コーナー入口。画像掲示板。うわおつ。コートみたいな前開きの服を全開にして、スクロール、ひょえー、全裸じゃん。何も着けてないじゃん。うわ、丸見えじゃん。てか見せてんのか。これか、これを言ってたんだな倉田くん。確かに、いやはや、ぬおう、凄い。それに背後に写っているのは浅草のあの橋の向こうにある有名なうんこビル、おひょー、川沿いに悠然と輝く奇怪な巨大うんこ、その対岸でそんな、ドバツと黒いコートを。そんでちよっぴりクネっと。うーむ。勇気とか大胆さとかエロさとかそんなのは後。この写真を見た男がまず最初に感じるのは、傷も溝も窪みもないツルツルの羨ましさだろう。いないーな生で見れていいーな。そんで次に男がすること。ケチを見つめる。理由は悔しいから。撮影者が羨まし過ぎて憎いから。でもさ、太ってんじゃないこの女。そうだよただのデブじゃん。そうだよ。そうだよ。そうだよ。うお、カメラがもつと近くに寄った。胸が、毛が、隅田川が。そうしてまたもスクロール。またも開花宣言。うくく。それにしても確かに太い。腹周り。太もも。幾つくらいだろこの女。あ、目の部分に黒いラインが。なるほど顔がバレないようにしてるのか。そりゃそうだよな誰が見るか分かんない訳だし。倉田くんとか課長とか。この間倉田くんに検索方法を教えて貰ってたし、あのエロ課長。いつもわたくしのことをネタに倉田くんと。待て、やつにくんなど付ける必要ない。やつはわたくしの後輩だ。倉田。バカにすんなよ。うちの有美子はな、まあ部分的にちよこつと太目だったりするけどこんなうんこデブの百万倍くらいナイスなプロポーションしているぞ。なはは。その夫がこのわたくしだ。ぬあはは。文句あるまい。ところでうんこデブ。あ、投稿者の名前がある。プリン。のほほっ。

何がプリンじゃ。グリコが聞いて呆れるわ。投稿者の名前を考えるんだっつたらもつと自分に、つーか被写体に合ったネーミングを考えろってんだ。そうだよな。ここにこうして投稿したのはおそらく写真の撮影者なんだろう。このうんこの旦那か彼氏。かー、可哀そ。でもよく投稿する気になったよ。その度胸は大したもんだ。そうか。この旦那は色っばいと思ってるのか。このうんこデブを。そうか。よし。色っばい。色っばいよ。いいよあんた。この場所で奥さんにこんな格好させて。それを撮って。ん？待てよ。ってことはこの奥さん、倉田の言うコスチュームのままここまで来たのか。あ、でも車で来たんだろうな。いいよな車だっつたらた楽勝だよこの格好でもくそう。うちには車がない。どうやってここまで行けばいいんだ。どうするよ有美子。え？何だって？電車でもいいって？電車で行きたいって？あわわ、前開きの服の前だけ閉めて、中は全裸で電車に乗って、有美子、ちつくしようそうなるじゃないか。倉田あ、貴様の言う通りだ。そういう構図になるじゃないか。わたくしは電車の中でどうすれば良いのだ。何をすれば良いのだ。有美子が前開きの吊革のボタンの中身はぬほほで例えば新宿う新宿う降りるお客様が先となります、うわあ押されるう有美子しがみ付くわたくしにしがみ付く乗って来るドバツと乗り込んで来るドア付近で立ち止まらずに中程までお進み下さい押されて押されてわたくしにしがみ付いたままの有美子接近してつーか密着してうわあボタンは掛けてあるけど中身はワンピースの服の布のななな中身はうおおお先日のリンスどころじゃないわたくし堅固どころじゃない出る絶対出る出てしまっとうしてくれる倉田。満開アズスーンナズ噴火だ。参ったか倉田。見たか課長の禿げ。わたくしの噴火ではない。そんなモン見てください。有美子だ。有美子の素晴らしいからだを目に焼き付けたか。ってうんこデブの画面に戻って。なぬなぬ、投稿者はこちらから。ぬぬ。カチツ。わ。投稿者用の画面だ。投稿者は以下の規約を遵守して下さい。その1、投稿画像は一般女性のオリジナル画像のみとさせていただきます。そりゃ男の裸は見たくないわさ。その

2、被写体となる方に必ず了承を得てから投稿して下さい。そうだよな。でも有美子はまず首を縦に振ってくれないだろうなあ。つかこんなの見せたら卒倒しかねないよ。騙しても脅しても撮るだけ撮っちゃうえばこっちのモンなのだが。あとはこっそりと投稿してわたくしだけでうしし、と。いや待て、わたくしにはどう考えても騙したり脅したりは不可能だ。従ってこんな夢のような写真を撮ることなんて所詮…でもなあ、撮ってみたいなあ。例えば一週間飲まず食わずで過ごせたら撮られてもいいわよと言われたら、わたくし絶対に頑張っちゃうだろうなあ、飲まず食わずで。よし。今のうちにとたくさん食っておこう。その3、画像は合法となるような修正を行って下さい。問題があると判断された場合は予告なく削除させていただきます。ああ、毛はいいんだよね。割れ目とか上の方に付いてるコリっとした塊が写っちゃうまずいんですよ。うう。でもわたくしがそんな状況に持つて行けるまでは軽く百年は掛かります。その4、児童ポルノを連想させる画像は投稿を禁止します。ふむふむ、社会的な倫理ってやつね。でもこんな場所でこんな格好になること自体倫理観に…はいはい分かりました。その5、当サイトはアウトドア専門です。室内及びスタジオ等で撮影した写真の投稿はなるべく遠慮下さい。なるほど。フェアプレーの精神か。外で、というリスクをみんなで共有することね。まあそれが醍醐味なんだろうな。分かる分かる。でもなるべくってどういうこと？のつびきならない理由がある場合とか？まあいいや。よっしゃ承諾力チツ。お、そこでこの参照ってトコに写真のデータを貼り付ける寸法か。スクロール。あ、投稿者名。ここか。プリンはこのにプリンって入力したんだな。くくくく。何がプリンじゃ。わたくしだったらここに、えーと何がいいかな、ってマジで考えてどうする。次。Eメール。え、メールアドレスが必要なのか。これって大丈夫なの？あ、公開する・しないが選べるんだ。勿論公開しないけど。それって何かで調べられない？適当なアドレスを入力しちゃだめなのかな。ふーむうーん。うん？そうか。そうだよ。やってみればいいんだ。実際投

稿してみれば良いのだよ。写真？あるではないか。まあうんこデブ的な写真に比べるとソフト極まりないが、屋外での写真に違いはない。条件は満たしている。何よりもこれは実験だ。下調べだ。よし。参照、カチツ。マイピクチャ、カチツ。隠しフォルダ、カチツ。Yの秘密。カチツ。おう、あの写真。タンクトップももぞ有美子アUNDERザスカイ。何度見ても花が咲く。動きそうになる右手を必死で止めてカチツ。載った。有美子のブラジャーアンダーザスカイがうんこデブのプリンちゃんと同じ枠の中に入った。んで名前。そうだ、有美子は兎年生まれだからラビット、よし、ラビットで行こう。いいじゃんラビットちゃん。そんでメールアドレスだ。よし、ダメもとだ。適当なアドレスを、えーとえーと、ええい、E E T O、@、下はそのまんまでいいや、h2ドット、ディオーン、ドットneドット.jp、と。よし。よしオツケー。投稿カチツ。

うおおおおつ。

う、うおおおおつ。

載った。が、画面に、インターネットの画面に、わ、わたくしの有美子が、有美子の白いブラジャーが、せ、せ、せ、世界に躍り出た！

落ち着け。落ち着けわたくし。えーと、何だ、行けるではないか。E T O @でも行けるではないか。何でもいいんじゃない。大丈夫じゃん。有美子が、あの日の有美子が、青空の下で背中とブラジャーを見せた有美子がこうして世界に発信されてこれをアメリカや中国やコートジボアールその他の諸国の人が見てオー、イロツポイデスと言いながら思わずパンツの中に手を突っ込んで、つてないない。こんな、顔も胸も尻も写ってない写真なんかでないない。それに顔が写ってたらヤバいどころかわたくし生きていけなくなり、うわ、そうか、顔が写ってなくても、着てる服が写っているよ。この服に見覚えのある人って結構いる筈。有美子よく着てるもん、この黄色いTシャツ。大丈夫か？大丈夫か？わたくしプチ狼狽しながらとりあえずこのTシャツを着ている人が世界に5兆人くらいいて下さい、

と本気で祈る。本気と書いてマジで祈る。マジで。でも、できた。  
できた。わたくし、と、投稿できちゃったもんね！

## 第九章

スーパーの棚に積んであるバナナ。その場で皮を剥いて食べてはいけない。なぜならレジに並んで金を払うというルールに従っていないからだ。電車の中。胸や尻がそこにあっても触ってはいけない。ルールに従っていないからだ。でもバナナは人に食われることを望んでいる。そのためにトラックに乗ってスーパーまで運ばれて来た。胸や尻も、触ったり舐められたりすることを時として望んでいる。ルールという線が繋がれば良いだけだ。人はいつだってバナナが食いたい。男はいつだって乳首や尻を舐めたい。断罪する立場の男にだって、断罪してる最中にだって頭の中を探索すれば絶対出てくる。舐めたいという願望のパーツが。満員電車の中などは特に舐めたいの巣窟だ。しかしわたくしは変わった。舐めたいと思う前に、撮りたいと思うようになった。

決して満員になりそうのない車両。窓外には青々とした稲穂の海。都心から電車で二時間弱のこの静かな町に、現在国道の建設が急ピッチで進められている。恵まれた土地の上で生活している人々は、ただでさえその環境を破壊する事業に反駁する。反駁しながら息を吸ったり吐いたり米を研いだりするようになる。要するに生活にいつも怒りがブレンドされた状態。そういう住民たちに対して行政はいかに対応すべきか。それがこの研修の意図である。あ、これは禿げ課長の受け売り。ともかくその日わたくしと倉田くんは千葉県を横断する単線電車で緑に囲まれたド田舎の駅に辿り着いた。

「戸村さん二年連続つすか。地方研修」

「うん」

一緒に改札を出た倉田くんがおもむろに煙草をくわえる。こいつ課長の前では煙草なんか吸っていないのに。

「去年は新島の道路工事だったんですってね。課長が言っていました」  
「うん」



「あれっしょ。新島なんかじゃ工事に反対してる人なんかいなかったんじゃないっすか」

「うん。少なかったね」

「いいなあ。戸村さんも伊勢海老食ったんすか」

食ったよ。食ったけど倉田くん、煙いからとりあえず無視。えーと、おかしいなあ。町役場の工事課職員が迎えに来ることになつて居るのだが。わたくしは駅前の観光案内板を見ようと歩き出して止まる。あ。あ。前から歩いてくる女。髪長い女。前開きだ。薄い迷彩柄のダボツとしたワンピース。でかいボタンが約10センチ間隔で留まって前を閉めている。裾の部分は膝まであるので見た目には全く工口的要素を感じさせない。ごく普通の女の衣装。でも前開き。結構着てるもんだな。これか。閉じてて閉じてて…一瞬だけドバツ。で、すぐ閉じるカツコアンダーゼスカイカツコ閉じ。うーむなるほど行けるじゃん。ああでもボタンをいちいち外したり留めたりするのが急な開閉を要する時は至難の業だな。そもそもドバツの中身を考えると急しか要さないぞ。いち、に…6個だ。ボタン6個それを一瞬で外し一瞬で閉じる最も効率的な方法は…。あら。すれ違いざまにその女、わたくしを凄じい目で睨んで。あら。わたくしの脳内で突如として始まった蠱惑的なプチ煩悶が見えてしまった？そ、そんな訳ない。わたくしは至極健全な東京都のお役人。眼鏡の曇っていない係長。これ程までにクリーンな風体を睨むということは、まさか。どええ、ま、ま、まさか今すれ違った女、あの服を正にその目的で着ており、中はぬほほ状態でそれをわたくしに見抜かれて困惑憔悴狼狽いやんばかん。嘘おお。あの女、どっちに行った、どこだ、どこで撮られるんだ。どのようにして、ドバツとなるのだ。見たい。知りたい。鼓膜と角膜が唸りを上げる。

「あ、来ましたね」

こんな一大事に何だ倉田。おや。顔に無数の染みが点在する太った男が我々に近付いて声を掛ける。

「あの、東京都の…？」

「はい。研修で」

言いながら倉田くんが後ろ手に持った携帯灰皿で煙草を揉み消す。「いやあ遅くなつてすいません。エンジン掛けっ放しなんで、とりあえず乗っちゃって下さい」

町役場の男は妙にへこへこしながら案内版の前に停車したライトバンを指差した。わたくしはその顔の染みの向うにさっきの女を確認した。女友達数人と駅の改札付近で合流している。超笑っている。ない。あの感じだとまず考えられない。これからドバ撮影なんて。そう思った時、なぜだろう、わたくしは死にたいくらい安心した。なぜだ。なぜ安心するのだ。手を染めさせたくないという卑懐な正義感か。娘を持つ親心か。そんなものがこのわたくしの心に内在すると言うのか。あ。男の巨大な顔の染みが女の迷彩柄と重なる。

「…あの、何か」

「い、い、いえ」

二文字しかない言葉をどもってどうするわたくし。

## 第十章

右手でハンドルを握り、左手で男は器用に名刺を差し出した。工事課主任と書かれている。まだ大分時間があるので先に現場を案内しますよ。染みデブ主任はそう言って運転席の窓を開けた。幾つもの水田を舐めた蛙臭い風が車内に入って来て、倉田くんの茶色い口ングヘアを揺らした。そう言えば倉田くんって微妙に蛙顔だよな、と思った。林を抜けると小高い山が見えてきた。牛の鳴き声も聞こえる。設置したばかりでまだ灯っていない信号機の下をくぐり、小さな川を渡った所で左折。道はぐんと細くなった。しばらく進むと山の傾斜地がストンと切り取られ、そこにコンクリートの巨大な橋梁が立っているのが見えた。50メートル置きくらいに等間隔で。その上をまだ車の通っていない新品の道路がずっと隣の山まで続いている。周囲は殆ど畑。民家らしい建物がその間にぽつぽつと散見できる。どれもみんな亜鉛鉄板屋根の古ぼけた木造平屋建て家屋。道は湾曲しながらさらに細くなり、やがて工事区域を示す高いフェンスが現れる。アスファルトは日曜日の予定を水曜日の時点で諦めるような潔さで見事に途切れている。すんませんこつからは徒歩になります、と染みデブ。車を降りて我々は畔道を歩き始める。のどかな所つすね、倉田くんが言う。そうでしょ、でもものどか過ぎちゃってかえってギャップが激しいんですよ、こんな大掛かりな工事をやっちゃうとね。へえ、こういう所でもやっぱ苦情とか出るんすか結構いますよ。工事の埃で洗濯物が干せないとか、振動で家が傾いたとか。築五十年前後なんだし、ましてこんな傾斜地に建ってるんだから最初から傾いてたんじゃないの、って感じですけどね、まあ言えませんわな、住んでる本人には。

幾つかのセーフティコーンと仮設トイレが残っているものの、工事自体は大方終了しているようだ。作業員の姿は全く見えない。あ、トイレは大丈夫ですか？染みデブが汗を拭きながら言う。いや

僕は大丈夫つす。と倉田くん。戸村さんは？ああ、う……ん。済ませ  
といた方がいんじゃないつすか、この先トイレなさそうつすよ。  
じゃ、しとこうかな。わたくしは鞆を倉田くんに預け、仮設トイレ  
のドアを開ける。狭い。しかし意外と奇麗だ。天井が半透明のアク  
リル板なので中は充分明るい。チャックを下げてちんちんを出す。  
変な気分だ。公園のトイレとは何だか微妙な違いがある。わたくし  
は放尿しながらくすぐったい違和感に支配された。理科室で水着に  
着替えているみたいだ。周りは畑。すぐ後ろは山。頭上には新品の  
道路。誰もいない。一番近い民家までも数百メートルはある。そん  
な場所にトイレ。便器。ちんちん。水着に着替えて？そうだ。こう  
いう場所なら誰にも見つからず、慌ててボタンを閉める必要もなく  
ドバツとできる。中はぬふふ状態で電車に乗るのはいやんと言われ  
たら、現場で着替えれば良いのだ。ほら、こうやってドア一枚隔て  
てちんちんを出せる夢のような場所もある。ここで着替えるんだ。  
ここでブラジャーを外しパンツも脱いで前開きワンピースを羽織つ  
てプリンちゃんと同じ状態になり、ボタンを、えー、とりあえず幾  
つ留めようか。ああ、パンツがサンダルに引っ掛かってうまく脱げ  
ない。頑張れ。頑張れ有美子。ああ、ゆ、あ、あら、すっかり尿を  
蕩尽したわたくしのちんちんの角度が、ぬわ、鋼鉄のように硬くな  
って放尿のために持っていた右手の指がその膨張圧力にびっくりし  
て有美子、有美子、パンツは脱げたかい。いつしか汗。眉毛の横を  
汗。止まらない。あれ。右手も止まらない。え？嘘だろ。どうにも  
止まらない。この状況で。倉田くんと染みデブがドア一枚隔てたそ  
こら辺にいる状態で。いいから早くしろ。え？だって。動く。動く  
右手。わたくしの膨張に対抗するわたくしの右手。全ての指でちん  
ちんを強く握る。そして皮だけをスライドさせる。大丈夫かよ。大  
丈夫だよ。速効で。バレないって。マジで？皮往復、早く、早く、  
激しく、血管が浮き出ている棒状の肉、キノコの傘みたいな三角錐  
の底端と棒との境目にある溝を赤黒い皮が、指が、激しいスピード  
で行ったり来たりスライド、うう、有美子、右手、スライド、早く、

早く、このトイレの中でワンピース一枚になった有美子ああんボタンが留まってないよ、ほら見えちゃってるよ。わあ、放尿したてのちんちん、皮部の先端が泡立っている。白くて細いクリームみたいな泡のリングができています。泡。あの時見た泡。写真。セーラー服の女。股の間に塗りたくってあった白い泡。あ、わ。わわわわわ。スライドスライド。もっと早く、往復、往復。三本の指に力を込めて傘下の段差を小刻みに往復往復往復、有美子有美子有美子有美子前開き前開き前開き前開きボタンが一つ外れて二つ外れてえーいー一気にドバツとうわあ有美子、誰もいないよ、大丈夫だよ、撮るよ、ここで撮るよ、シャッターを押すよ、それ広げる、前を、ドバツと広げるんだ！ああ、あああああつ。

「戸村さん、どうかしました？」  
「ぐえつ。倉田くん。あ。」

「何だ。大なら大つて言つて下さいよ。紙あります？」  
「う、うん。大丈夫」

その瞬間に最も聞きたくない声を聞きながら下半身に電流を走らせたわたくしは、慌てて備え付けのトイレトペーパーをカタカタ回した。小刻みにビクンとなりながらちんちんの先端を急いで拭く。その紙を4つに折り畳んで便器の縁に放出された数滴を拭う。薄黄色い水の中へポトンと捨ててレバーをジャァー。そして新たに巻き取った紙をまた4つ折りにして、消沈へと向かうちんちんの先っぽを包み、絞り出すようにぎゅっと握る。もう出ないか。よし。びりっ。あれ、破けちゃったよ。何だ何だ。先っぽ、貼り付いて剥がれない。染みデブと倉田くんの話し声が聞こえる。早く出なきゃ。お、剥がれた、ってあれ、まだ残っている。トイレトペーパーはどんなに安物でも層構造。最下層の薄い一枚分が、キノコの表面に激しく接着している。剥がそうと爪を立てる。敏感な濃いピンク色。ビクツ。いやん。えーい面倒だ。わたくしは紙が貼り着いたままのちんちんをパンツの中に慌てて押し込み、チャックを上げてドアを開けた。色の名前を一つずつ確認したくなるような新鮮なアンダーゼスカイ

が目に飛び込んで来た。

## 第十一章

これならおかしくない？と有美子ベージュの長袖シャツ。うん、そっちの方がいいよ。先程、例の黄色いＴシャツを着て出て行こうとした有美子をわたくしは慌てて阻止。わあ有美子、今夜は気温がぐぐつと下がるらしいからＴシャツじゃ帰り寒いよ、別の服にした方がいいと思うな。あらそう、じゃ着替えてくる。ふう。黄色いＴシャツは、有美子でありながらも有美子ではなくなりつつあるのだ。アメリカやコートジボアールまでワールドワイドに浸透しているラビットちゃんの正体を、東京都足立区の外れにある小学校のPTA会議室という世界一身近な場所で暴かれては元も子もない。琴美が帰って来たらすぐ宿題をやるように言つた。分かった。分かった。あと夕飯はカレー温めて。分かった。玄関ドアを閉める有美子のびたつとしたジーンズは、お尻の形がはつきりくつきりだけど、ポケットに手を突っ込むのも一苦労して程びたつとしてるから脱ぐのも履くのもそりゃもう大変な訳で、でもどうして脱ぐ方が先なんだよ。だめだめだめジーンズなんてもつての他。撮影には絶対適さない。有美子、ワンピース、買いに行こ。つて有美子今日はPTAの会合でその後居酒屋に流れるらしい。なるべく早く帰るから。分かった、行ってらっしゃい。行って来ます。大丈夫。なるべく早くという訳にはいかなくなってても有美子今日はお客さん来てるから誰かの前で苦労しながらジーンズを脱ぐようなことには絶対にならない。だから極めて大丈夫。誰にもヤラれることはない。しかるにこのわたくしも今夜はできない。女は招かれざる客を毎月相手にしてるのよ、凄いでしょ。凄い。男が最も哀求する悦び、ひいては結婚という名の申請により取得したモミモミペロペロゴールドカードを月一回のペースで無効にさせる強制力。どんな男でも敵わない最強の赤い客。もう殆どテレビは見なくなった。わたくしは本日も自室で十八歳以上です。カチツ。おお有美子。背中と芝生と白いブラジャー。こ

の写真が画像掲示板に登場して一週間経った。他の、駅のベンチでノーパンM字や観覧車で全裸緊縛や交差点でドバツと全開、に比べたらもう玄関先でひたすら謝りたくなるくらいソフトではあるが、ともかくわたくしの、いや有美子の記念すべき…おや、コメントが載っている。

綺麗な背中ですね。ラビットさん、次も期待しています。豊橋市、テリーさん。

うわわ。そうだよ。何しろここは画像掲示板だ。投稿された写真の下にそれを見た人からの感想と云うかコメントが送られる。全国から。いや正確には世界から。誰が見ても唾を飲み込んでしまうような写真にはたくさんコメントが寄せられる。反対にそうではない写真に対しては、コメント0という文字がいつまでも写真の下にへばり付くことになる。このところ每晚見えてきてわたくしは何となくその構造が解ってきた。つまりコメント量つてやつが、投稿された画像の良し悪しを計るバロメーターとなっているのだ。また投稿者の中には常連になっている人もいて（プリンちゃん含む6〜7人）彼女たちは既に固定ファンを持ち、毎回のコメント量も他の人に比べ群を抜いている。そんな中で有美子のコメント0という文字はいつも居心地悪そうに縮こまっていた。風邪もひいてないのにプールの授業を見学する赤い客同伴の女子みたいに。だから嬉しい。素直に嬉しい。豊橋市、テリーさん。何者だか知らないが、掛け値なしで嬉しい。ラビットさん、だつて。有美子はラビットさんだ。もう完全にラビットさんだ。次も期待、つて。ううう。テリーさん、本当ですか。ひよっとしてあなた、固くなったりしましたか。有美子を見て動きましたか。右手がパンツの中に入ったりしましたか。うちの有美子のブラジャーを見て出しましたか。ううう。何てことだ。なぜこんなにも嬉しいのだから。くそう、嬉しいぞ。ありがとう。テリーさん。そしてできるなら有美子にもこの身悶えるような嬉しさを伝えたい。伝えられる方法を何とか見出したい。心から、見出したい。



## 第十二章

本日は上野で例のカウンセリング。

言語障害の一種だと言う人がいます。確かに多くの学術書にもその記述されております。しかしね、私はそうは思いません。何が障害ですか。どもる人は伝えたい気持ち人をより強く持っているという事なんです。つまりそれだけ人を愛してる、と。だから説得力という点では流暢に喋る人よりもりながら喋る人の方が勝る時もあるのです。かのナポレオンも相当な吃音癖があつたと言われています。障害どころか、逆に武器となることだつてあるんですよ。いつものカウンセラーは、流暢にそう言つてわたくしに微笑んだ。説得力、か。もしもその説が真実ならば、わたくしは適任者であると言える。あの課の。しかし現実はそのではない。実感している。

「そうは言つても先生」

「何ですか」

「わたくしは今まで相手を上手に説得したなんて経験ありません。それどころか本気で何かを伝えようとすると余計言葉がく、口元でつかえて、自分でもな、何を喋っているのか、いや何を喋ろうとしていたかさえも分からなくなってしまう。それだと相手は納得するどころか、きつとわたくしのことを嫌いになつてしまいます。それが一番、こ、こ、怖いんです」

「大丈夫。嫌いになんかありませんよ。むしろ耳を傾けてくれるに違いありません。伝えたいと思う情熱がそうさせているのですから」

「そう、です。伝えたいんです。ほ、ほ、本気なんです」

「戸村さん」

「はい」

「あなたはここで半年間、みっちりとかウンセリングを受けました。だから自信を持って下さい」

「はあ。でも、じ、自信がないから、どもるんじゃないんですか」

「いいじゃありませんか。その時は武器だと思って」

「武器？」

「そうですね。その分真剣さが相手に伝わる筈です。ナポレオンのように」

支払いを済ませ、表へ。稚魚を放流させたくなくなるくらい流暢な陽光がわたくしの額に降り掛かる。全く流暢な陽気だ。夏だ。琴美は今日、漢字検定を受けるため上野の進学塾へ。送り届けた有美子とわたくし駅前で落ち合う。携帯電話つてすこぶる便利。丸井でオムライスを食べた後、服だの食器だの花の種だのを見るのに付き合う。久々に二人だけの時間。むふ。女は美人不美人に関係なく基本的にデパートが好物。有美子上機嫌。90年代のヒットメドレーを鼻歌で炸裂。あっちの売り場、こっちの店。有美子の足跡を線で結んだらきつとデパートの床にナスカの地上絵よりも神秘的な幾何学模様が浮かび上がるだろう。実に嬉しそう。わたくしも実に嬉しい。同時に申し訳なくなる。有美子は家事であり子育てでありデパートでありオムライスであり靴であり洋服であり化粧水であり食品であり体温計であり風呂の栓であることが結婚の定義だと思っている。でもわたくしにとっての結婚はただで女の裸が見られることであり、ただで女の裸に触れることであり、ただで女の裸を舐められることであり、ただで女の尻に硬くなっただんちんを押し当てられることであり、ただで女の裸の写真を撮られるかも知れないことであるのだ。そしてさらに定義の本質を紐解いたら、顔は奇麗に切り離される。朝露がつると滑り落ちるくらい瑞々しい切り口しか残らない。どんなに美人でもどんなにブスでも結婚という布団をめくれば尻は割れているモンだ。同じように二つに。例えばブスは割れていませんとなったらそりゃ一大事だ。見合い写真の有美子の顔を見た時わたくしはさぞかしリスキーな気分を味わったことだろう。でも有美子はそのなわたくしのことを風呂の栓と同じレベルで考えてくれている。それなのに、ああわたくしって何て不純。何て無慈悲。そうした分際ですら有美子にラビットちゃんを紹介できるのだ。

わたくしが妻に求めるのは風呂桶に水を貯めてくれることではなく、外でおっぱいやお尻の写真を撮らせてくれることなんだ。って、どうしたら述べ懐けるのだ。どうしたらプリンちゃんのような撮影ができるのだ。うう。むおう。計り知れない難行だ。いくらわたくしがナポレオンでも。大体部下に擲揄されて仮設トイレで汗まみれのオナニーをするナポレオンがどこにいる。畜生。どう切り出せば良いのか。どこぞに良策、得策はないものか。有美子。ラビットさん。わたくしはキミを本気で跳躍させたいと思っている。お願いだから軽蔑しないでおくれ。と、店内を兎のように跳ね回る有美子の尻を見ながらふと腕時計。あ。そろそろ琴美を迎えに行く時間じゃない？有美子、腕時計チラ。あ本当だ、じゃこれで最後にする。そう言っつて有美子が走って行った先は、うーむ、下着売り場だった。げほつ。

## 第十三章

広大な売り場面積。ブラジャーどーん。パンティーどーん。それらを装着した何体もの金髪マネキンたちがどーん。むむ。あの俺ここで待つてるから見てきな。何照れてんのよ。言い残し有美子海へ。下着の海原へ。わたくしは有美子を目で追いながら売り場の手前でうろちよろ。あーやんなっちゃうなあうちのやつときたら下着が欲しいから付き合ってくれって、でも男はさすがにこの海の中へは入って行けないしなあ、困ったなあ、うちのやつはあそこにいるんだけどほら今ピンクのブラジャーを手に取って、戻して。わたくしは、わたくしに対する全ての視線にいつでも対処できるよう準備した。遠巻きで。それにしてもむああ色とりどりのランジェリー百花繚乱今夜はシルクでエレガンス四千九百円むああ見れない見れない。超特価3枚千円コーナーひええ選べない選べない。夏を先取り見せ下着コーナーいやいやわたくしはただうちのやつに付き合ってこの場に来ただけであって別に女性の下着なんぞには。淑女向けセクシーコーナーむああ、あれを自発的に買う女はそれだけで生きている価値があるよ有美子絶対に無理絶対に買わない想像もできない、できないけど、けど、もしわたくしが着けて欲しいとせがんだら着けてくれるだろうか。なんて思ってたところへ。

「ごめん。これだけ買ったからちよつと待ってて」

と、至極普通の白いブラジャーを持って有美子レジの方へ。

「あ、有美子待って」

「え？」

「あそこの棚のやつ、あれ高いのかな」

「え？やだ、セクシーコーナー？」

「あ、そ、そう書いてあるのか。いやあ見えなかった」

有美子ツカツカと棚に歩み寄り、パンティーを一枚手に取る。

「えつとねー、ちよつと高目かな。でもこれ、なんか凄いよ。ほら」

「え？いや、ここからじゃどんなのか分からないけど」

「入ってくればいいでしょ」

「だって」

「いいじゃない。平気よ」

「でも」

「早く。時間ないんだから」

ゆ、有美子、そんな大きな声出さないでよ。いやあ参っちゃうよなあうちのやつときたらあんなモンに興味を示すなんて、亭主としてちよつぱり恥ずかしいですよははは、と有美子のせいにする準備万端のわたくしさりげなくインして棚の前へ。はたはた最低。

「うわ、本当だ」

ラベルに印刷された写真。尻のアップ写真。紫のスケスケ。うわ、こっちは赤のＴバック。むお、こっちはもはや紐でしかない。

「こっぴうの買う人、本当にいるのかな」

「ああ。でも、わ、悪くないと思うなあ。いいんじゃない」

「そりや似合う人はいいわよ。このモデルみたいに」

「ゆ、有美子だっておんなじだよ。履いたらこうなるよ」

「嘘お」

「嘘じゃないさ。もしかしたら有美子の方が色っぽいかも。ほら、毎晩美容体操してるし」

「そういうレベルじゃないでしょ。第一私、トシだもん」

「そんなの関係あるもんか。だいたい有美子は自分で気付いてないだけなんだよ。本当だよ。本当にいいお尻してるんだから。た、た、垂れてないし」

「やだ。何言ってるの」

「あ、ごめん。でもほ、本当のことだよ。ああ、キミにそれを証明したいなあ。そうだ、証明してみせるからさあ」

「うん」

「一個だけ買ってみようよ。あ、一番普通っぽいやつでいいから  
「えー？」

「分かって欲しいんだよ。有美子に。自分の色っぽさを」

「私の色っぽさ?」

「うんうんうん」

有美子の頬、スローでピンク化。眉毛苦渋。色っぽいって言葉はやはり蠱惑的に鼓膜をくすぐるらしい。

「でも、レジに持って行って笑われるのやだよ」

「だから一番普通っぽいにしようよ。あ、ほらこれなんか」

「透けてるじゃん」

「じゃ、これ。このピンクの。うわあ桃みたい。有美子のお尻そのものってカンジだよ」

「本当?」

「うん。こういう桃あるよね。なんとか桃って、地方のブランドで」

「すいみつとう、とか?」

「そうそうそう」って知らないけど。

有美子、じつと見ている。ラベルの写真を見ている。ピンク化、さらに濃く。よし、このすいみつとうにしよう、さ、早くしないと琴美待たしちゃう。わたくしはそう言っただけで有美子をレジに促す。それ一気呵成。有美子一歩前進。そして停止。ねえ、やっぱ恥ずかしいよ。何言っただよ今更。だつてこんなの店員さんに見せたらどう思われるか。何とも思われないうって、第一こっちは客だぜ、それにこれは売るために置いてあるんだろ。そうだけど、こういうのはやっぱ若い人とかスタイルのいい人が買うためのものでしょ、私なんかレジに出したら笑われるよ。そんなことないって何回言わせるんだ、いいか有美子、キミはこの下着が似合うんだ、だから買うのはと、当然のことなんだ、その白いブラジャーと一緒にレジに出したら何の違和感も感じないしセットで買うんだろうなうってくらいにしか見えないし、これがセクシーコーナーの棚にあったことさえ誰も気付かないよ。気付くよ店員は、当り前じゃない。そうか、そうだけど、とにかくこれはキミのお尻のためにあるようなパ、パンツなんだ、約束するから。何を約束するの。だからその、証明する

ことを約束する。別に証明しなくていいけど。んもついいから早く、そのブラジャーと一緒にほいってレジの台に置いちゃえばあとはピピッと数字が表示されてその金額を払って袋詰めされて渡されてありがとうございましたあつて言われてお終いだよ。ものの30秒だよ。じゃあ、あなた買って来てよ。え？

## 第十四章

ただいまあ。ただいまあ。あー、お腹すいた。はいはい、すぐ支度しちゃうから、琴美も手伝って。えー。えー、じゃない、すぐ手洗って来る。はい。よろしい。てな具合に三人で帰宅。一週間で一番ソース臭い土曜の夜の始まり。テレビと茶箆筥が矢鱈と元気な生き物に見える時間の始まり。バッグと丸井の手提げ袋を床の隅に置いて有美子エプロンを着ける。わたくしは食卓の椅子に座り、無言でテレビを付ける。続いて明日の天気、ぴっ、いいことあるぞーミスタードーナッツ、ぴっ、まずはこのVTRをご覧下さい、ぴっ、交流戦も今日から後半に突入ってことで大事な一戦を任せらてた先発の…。そうだ、お父さん。うん？出たんだよ、漢検の問題で原因の因。ほーそうか、で、書けたか？勿論だよ、大介の顔思い出したもん。なあに原因の因って。ああこの間ね…。琴美、有美子に大介を囲む件を説明。何なのその覚え方。でもそれであたし書けたんだよ、お父さんが珍しく役に立ったんだから。おい珍しくは余計だろ。茄子を薄く切りながら有美子がわたくしを見て微笑。茄子顔で微笑。使い込んだ天婦羅鍋。茄子南瓜竹輪ピーマン椎茸イン。じゅじゅじゅー。4回表の楽天の攻撃を見ながら、いや、本当は見ちゃいなかった。わたくしは気になって気になって。有美子。じゅじゅー。ねえ有美子。え？この買った物、先に仕舞って来たらどうだ。あー、悪いけど寢室に持ってつてくれる？じゅじゅー。俺が？あなた以外いないでしょ。な、何たる無関心。つーか無防備。この丸井の袋には、ピ、ピンクのすいみつとつが。わたくしは唇を尖らせて言う。俺分かんないよ、寢室のどこに置いとけばいいか。んもう、ちよつと琴美、これよろしく。有美子が菜箸を琴美に。茄子はあと1分くらいで揚げちゃっていいから。えー。えーじゃない、それくらいできなくてどうする。はい。よろしい。有美子、丸井の袋を持って寢室へ。三十秒後。あ、そう言えばあれ、とか言いながら天婦羅モ



ードの琴美に訝しがられないようにわたくしも寝室へスタスタスタ。有美子、白いブラジャーの値札を取って綺麗に畳んでいる。足元の袋をわたくしは手に取る。心地良い重量感。ああ、パンツだ。あのパンツが、はい、ぱんつでしゅ、って言いながら入っている。わたくしはそれを袋から出してラベルの写真を見る。薄ピンク。桃だ。箆笥を開ける前屈みの有美子。お尻をちよつと触ってみる。結婚だ。何すんのよ。いやこれ、えーと、すいみつとう、見たいな履いたところ、今は無理だよ。当り前でしょ、バカ。また触る。撫でる。ちよつと止めてよ、琴美が……。分かつてる、確かめただけだよ似合うことを。そんな、分かる訳ないじゃん触っただけで。分かるさ。もう絶対似合うんだ、有美子のお尻、この写真よりも桃っぽいんだから、あー見たいよ、ねえ。だから今は無理だって。ちえ。ちえじやない。はい。琴美かつ。あはは。その時、声だけがドアの隙間を擦り抜けて入る。おかーさん、椎茸も揚げちゃっていい？わたくしなぜか咄嗟にパンツをポケットへ。あー待って、今行く。有美子がドアに向かって言う。そしてわたくしのポケットの前に手を出す。仕舞っちゃうから出して。いや、これは俺が保管するよ。何で変だよ。変じゃない！それは自分でも笑っちゃうくらい真剣な口調だった。これは俺のた、た、宝物だから。有美子茄子顔フリーズ。そして唇の左端に2ミリくらいの隙間が開いたり閉じたり。おかーさんってばっ。琴美の声に怒りがマイルドブレンド。有美子、手を下げてちよつとだけ俯く。一息を吐く。寝室のドアを開ける。止まる。ドアを閉める。振り返る。そしてわたくしの目を見ずに小さな声。お風呂から上がった後に、ね。今度はわたくしがフリーズ。顔ではないパーツが茄子化。ぬおお。

## 第十五章

オレンジ色の薄い闇。ぬいぐるみばかりで一瞬分らない。どれが琴美の顔なのか分からない。小学四年生の枕の上にはたくさんの目と鼻と口がある。黄色い豚の鼻先に琴美の顔を見つける。小さな寝息を立てている。よし。よし。わたくしは音を立てないようにそつとドアを閉める。脱衣室から聞こえていたドライヤーの音が止まる。カチャ。有美子。風呂上がり。Ｔシャツに丈の短いスパッツ。わたくしソファに座り新聞を広げながら忘れてるポーズ。

「まだ起きてたの」

「ああ」忘れてる忘れてる。わたくしはすっかり忘れてる。

有美子台所で午後ティーコップ一杯。わたくしの関心はあくまでも新聞の記事。

「へえ、福島で震度４だつて」忘れてる忘れてる。

「ふーん」

「こつちでは全然揺れなかったよな」

「うん」有美子午後ティーごくつ。

わたくしはとにかく話を切り出したい。持つて行きたい。でも待つてましたぜ風呂上がり、つてあからさまなぬほ丸出しの切り出し方だと有美子履いてくれなさそうな気がして。だから忘れてる忘れてる忘れていたけど、あれ、ふつと思いつ出した…素振り。

「あ、そつだ有美子。約束を守らせてよ」

「うん、我ながらうまい切り出し方。いいぞいいぞ。」

「約束？」

「だから、有美子のお尻がどんだけ魅力的か証明してあげるよ」

言い終わらないうちにわたくしポケットの中をごそごそ。じゃーん。すい、みつ、とつ。うわあわたくしのポケット、ドラえもののそれを凌駕したぞ今一瞬。掌の中でくしゅつとなりながら出番を待っていた薄ピンク色のセクシーパンツ。セクシーと言っても見た

ところは普通よりちよつと小さ目かなつて思つてくらの、紐も羽根も刺繍も付いてない正統派。

「ああ、それ。でもなんか、やっぱ恥ずかしいよ」

「だめだめ。お風呂上がり履くつて約束したでしょ。ねー、すいちちゃん」

「すいちちゃん？」

「すいみつとうのすいちちゃんですー。早くわたしを履いてようー！」

履いて貰うためには、こうしてわたくしは腹話術師にだつてなるのだ。世にも珍しい、パンツを使った腹話術。

「どう考えても私なんか似合わないと思うんだけどなあ」

「有美子、それは殺人と同じくらい不道徳なせ、先入観だよ。まあそれが殺人と同じくらい重大な間違いだつて証明してみせるよ。ほら、それ脱いで脱いで、早く早く」

もうこうなつたら強引の二文字しかない。例えばプルトップを開けたらぷしゅーと泡が吹き出したコーラ。慌てて缶を口で塞ぐ。例え納豆を食べている最中であつたとしても。そんな納豆コーラ的な強引さで有美子のスパッツをするする。その下の白いパンツもいからいいからは脱ぎ脱ぎねえはいはいはい、で、こちらですお客様こちらがすいちちゃんでございます、はいはいはい、するする、ぱちん。さあ、何と言つて煽てようか。そうだガラスの靴を履いた直後のシンデレラでさえちえつとか舌打ちするくらいの似合い方だぜ有美子のお尻、くらい言つてやるうかぬしし。し。くわ？ぬお。あ、どうしょ。マジで、あら、どうしたものか。凄い。凄い。いや、似合つているとかそんなんじゃないやなくて、くおう。何だ、何だこの崖つ縁で体が斜めになつていようなもうどーでもいーや感、谷底ウエルカム感、うわ、これは、掌と唇をマツハ2の速さで押し付けたくなるような薄ピンク色の物体、後ろ、有美子うしろうしろうしろ向いてえ有美子をくるつと回してお尻お尻うわああマツハ5でぶちゅびたつ。やつだあ何すんのよ。あごめん。だつて、だつて、何だこりゃ。凄いぞ有美子、でかしたぞ有美子尻、ぬはっ、ぬはっ。

気持ち悪いようケモノじゃないんだから。いや、ケモノだよ有美子、これを見た男は誰だってアズスーンナスケモノになるよ。いやはや有美子の尻、完璧だった。豚のようなデブじゃないので心配はしていなかったが、正直それほど期待もしていなかった。だからどうやって持ち上げようか、人生の最終目標である前開きドバ撮影への第一歩としてどんな巧言令色をしてやるうかとそればかり考えていた。それが、なかなかどうして。薄ピンク色の大きな膨らみ二つ。すいみつとうは履いてみるとピンクが分散して色と共に繊維自体が粗く膨張、つまりスケスケ状態になって、その膨らみの下部に月のような白い肉の半円が二つ、プルンと食み出している。ぬくく、尻の中央にある割れ目の縦線が、粗くなったピンク色を恥ずかしそうに貫いている。じつと見ているとそのラインはわたくしをさらに奥へといざないまくる。奥へ。奥へ。肉を貫き台所の壁を貫く。人間の肉の一部を見てこんなに心が転げ回ったのは初めてだ。今まで感じたり学んだり教えられたりしてきたことが全部嘘だったような気がしてきた。雨は冷たく母はうるさくウンコは臭くケチャップは赤いということが信じられなくなった。世界の内装は全てフェイクでこのすいみつとうこそが真実であるように思えた。これが、世界のカタチであり、大きさであり、色であり感触なんだ。お尻。有美子尻。ラビットさん尻。ぬほほ。どうしてくれようか。この目に見えない小爆発。目に見えない。あれ、視覚と嗅覚が、やられた。わたくし先程から猛烈な匂いを目で感じている。自分の目尻が横に伸びて耳の穴と繋がっちゃうくらいニヤけているのが分かる。匂いを目で感じ、その目が耳と繋がった至極奇怪なケモノとなったわたくしを、有美子は不思議そうな顔で見ている。

「どうしたの」

「い、いや。どうしたもこうしたもない。もはや言葉で説明できぬ。ああこうしちゃおれぬ。カ、カ、カメラだ。百聞は一見にしかぬ」「ぬ、って……」

わたくし、反対側のポケットからコンパクトデジカメを出して有

美子の尻に向ける。そこら辺は実に用意周到。ちよつと止めてよ恥ずかしいつ。いいからじつとしてて、今見せてあげるから、有美子のお尻がどれだけ凄いか。いやっだあ。パシヤ。もうっ。パシヤ。ちよつとお。言いつつ有美子不動。そして無意識に、いや意識的にも、ちよつとだけ突き出してじゃん、となつてもうわたくしぬほほほほ。パシヤパシヤ。よし、約束通り証明する、見てごらん。わたくしはカメラのレビューボタンをピ。うひょう。有美子の、尻の、美しいすいみつとうと美しい二つのハーフムーンがドアップ。うひよひよひょう。あれ、有美子、有美子？

「……」  
有美子てんでんてん。カメラの液晶を見たままでんてん。壁掛け時計がカチカチカチ。冷蔵庫の後ろのモーターがゴオゴオゴオ。わたくしの花はとつくにもうカチンカチンカチン。

「有美子」  
「……」  
「分かつてくれた？」

「……」  
有美子ふつと我に返つたみたいに慌ててスパッツを履いちゃったよすいみつとうの上からあらら。わたくしはデジカメの電源を切る。「もしかして、ケーベツした？」

「……」  
ふう。ケーベツされたか。そうだよな。有美子は有美子であり、ラビットさんではないんだよやっぱ。プリンちゃんとは別の人種なんだよやっぱ。ふう。お終いか。ちゃんちゃん、だな。そう諦め掛けた時、あのね、と有美子。

「してないから」  
「へ？何が」  
「軽蔑とか別に。だから安心して」  
「ほ、本当に？」  
「でもさ」

「うん」

「なんか、だめだよ、こっぴつ」

「うん」

「おかしいよ」

「うん。そ、そっぴつね」

「そっぴつよ」

言いながら有美子、あれ？目の周りがモジモジしてはふはふしている。そっぴつよ。本当は証明するも何も、わたくしより分かつている筈だ。美容体操の成果を毎晩姿見で確認しているのだから本人は「先寝るね。おやすみ」

冷蔵庫のモーターが相変わらずゴオゴオ鳴っている。窓の外の間に巨大な耳が覆い被さり、そのずっと奥にある鼓膜が振動を伝えてくるような音で。そんな台所にわたくしは一人残され胸騒ぎの静寂。

## 第十六章

それからわたくしは自室でカメラの画像データをPCに落とし込んだ。隠しフォルダ。Yの秘密。水族館の芝生広場で撮った写真1枚だけしかない寂しいフォルダ。そこへ先程撮影した分5枚を追加。5つの尻が画面に並んだ。うう。5つのすいみつとう。撮影は一瞬だったが、わたくしついたらさすが。5回もシャッター押してるよ。少しずつ距離と角度を変えて撮ったので微妙に趣が違う。影の関係で肉の窪みや膨らみも5枚とも全部違う。ひよつとしてわたくし、カメラマンの才能開花？いやその前にいつも通り別の部分が開花。てへ。いいなあ。マジでいいお尻だよ。あー。有美子本当に軽蔑しなかっただろうか。怒ってはいないだろうか。大丈夫だよな。うん。大丈夫だよ。つーか、これ見たら誰だつて自覚するよ。でも自覚している分にはまだいいが、第三者から指摘されると途端に恥ずかしくなるものである。たぶん。そこへおかしいとか疾しいとかそういった理性が出しゃばってきたモンだから慌てて着ていたスパッツを履いたのだ。つまり、照れたのだ。猛烈に。有美子。照れることはないぞ有美子。本当は嬉しいのだろう。わたくしも嬉しいよ。キミと結婚して本当に良かった。あー畜生。なんて言えなかったんだ。思えば絶好のタイミングだったかも知れない。一気にたたみ掛けておけば良かった。有美子、キミが妻でいてくれてわたくしは本当に嬉しいんだ、だからこれを外で撮らせてくれないか、頼む、そしてアウトドアの館に……あ、そうだ。わたくしいつしか握っていた右手をちんちんから放し、お気に入り、カチツ、業務資料、カチツ、画像掲示板、カチツ、投稿用画面。例の規約が目に入る。室内で撮った写真はなるべく遠慮下さい。なるべくでしょ。いいよね？いいでしょ？大目に見てくれるよね？参照カチツ、5枚の写真の中から、うーん、この曲線の影が一番濃く出ているやつを、あ、でもやつぱこっちの下から撮ったやつの方が、待て待て、これだと尻の背

後に我が家の貧相な流し台がリアルに写り込んでいる、だめだ、キッチンハイターの剥がれ掛けたラベルがすいみつとうの美観を損ねている、ならばこのちよつと斜めから撮ったやつ、おう、これならいい、背後には白い壁しか写ってないし光の当たり具合も最高だ、よし、この写真をカチツ、よし。で、名前はラビット、と、そんでメールアドレス。えーと、そうだ、EET@云々、よっしゃあ、投稿力チツ、おお緊張する、二回目なのにわたくし緊張緊張緊張の張どおりやあ、きえー、行った、載った、ラビットさんまたまた世界へ大発進、プリンちゃんと同じ枠の中へ今夜も肩を並べてっーかいじゃんいいじゃんぬおおおおっ、プリンちゃんの弛んだ尻より有美子のラビットさんのこのつるんと突き出てぴこつと凹んでるりと滑り落ちている薄ピンク色に包まれた肉の方が数億倍いいよ、うわーお、わたくし感無量であります、深夜ではありますが、歌いたい気分であります、振りをつけておお牧場はみどりを熱唱したい、気分であります、おお牧場はみつどつりっ、よくしげったものだ、ほいつ、あ、何だこれ、画面の左下、モバイルサービスご希望の方はこちらで登録を、なぬなぬ、ほう携帯でも見れるのかこのサイト、つてことは外で、仕事の合間にアウトドア、仕事にもこつそりとラビット尻、いい、いい、それはいい、正に夢のような日々を送れるではないか、よし、カチツ、携帯電話のアドレスを入力して下さい、DAIJINAKOTOMI1968@EZWEDOTT.net、DOTT.jp、そんでパスワードを設定して下さい、ふむ面倒だな、えー、いいや、YUMIKO、と。うわ、わたくしつては何たる家庭思い、以上の内容で登録します、OKですか、OKです、カチツ。ぬお？メッセージが現れた、登録が完了しました。数分後に登録されたアドレスへ確認のメールが届きます。ほう、なかなか親切ではないか。やるなあアウトドアの館、ますます気に入った。よし、暫しこの世界が共有する液晶画面に投影された有美子の尻を見ながら指の運動でもしましょう。画面を投稿写真のページに戻す。再び有美子の薄ピンクがどーん。わたくし右手をパンツの中へイン。テ



イッシュ箱スタンバイOK。そう言えばケータイが先程から見つか  
らないが。まあいいや、鳴れば分かるってモンよ。わたくしは画面  
を見てとりあえず唾を飲み込んだ。とその時、寝室のドアが開く音  
うわ。下げたパンツを、ベルトを、ティ、ティッシュの箱を慌てて  
戻して慌ててどわっ、スタスタスタ、このスリッパの音は有美子だ、  
カチャ。いつものようにノックもせず入って来て、あわわ、ベルト  
の穴がおかしい位置にでもそんなの全く関せずと言った顔で、っー  
か恐ろしく眠そうな迷惑そうな不機嫌そうな不細工な顔でわたくし  
を見て、あ不細工なのはいつもか、おいおいそれは言わない約束で  
しよ、ってあら、有美子わたくしのケータイを持ってらっしやる。

「鳴ってたよ。うるさくて起きちゃったじゃない」

「あ、それどこに」

「脱いだワイシャツのポケット。…あ」

「…あ」

うわああっ、世界が共有する液晶画面、そのままだった！

## 第十七章

「ちよつとお。何よそれ！」

「これは、いや、そ、その」

「ホームページ、でしょこれ。あなたこんなものを作ってたの」

「いや違うんだ。これは知らない人が作ったページなんだけど」

「だってこの写真」

「だからこれはね、えーと、誰でも自由に投稿できるサイトでね、こうして女の人のしゃ、写真を」

「ただのエッチサイトじゃない。いやらしい。こんないやらしいページに載せるために私のお尻の写真を撮ったの」

「違うよ、そうじゃないんだ」

「そうじゃない。現にこうして載ってるじゃない。これ今日撮ったやつでしょ。何てことしてくれるの。恥ずかしい。誰かに見られたらどうすんのよ」

「分からないって。分かる訳ないじゃないか、こんな、お尻だけで「そういう問題じゃなくてさ。これはちよつと酷くない？夫婦にだつてプライバシーってあるでしょ」

「あるよ。分かるよ。分かるけど有美子、俺は決して面白半分でと、投稿したんじゃないんだ」

「何それ。面白半分じゃなきゃ何だつて言うの。人に恥ずかしい思いをさせて、卑怯よ。最低」

「ちよつと待つて有美子。いいから待つて。っーか声でか過ぎ。琴美起きちやうよ」

「何言つてんのバカじゃないの最低なことして。早く、ねえ、早く削除して」

「できないよ。一度投稿したモンは」

「何それ最悪。おかしいと思ったのよ。わざとらしいことばっか言つてさ、あんなパンツ履かせてさ。私に何の恨みがあんの」

「有美子に恨みなんかある訳ないだろう」

「嘘。あなた私のことバカにしてんでしょ。ブスだからってバカにしてんでしょ」

「してないよ。何言ってるんだ」

「嘘。絶対にしてる」

「してないって。よし有美子、分かった、ちゃんと話す。いいか、ちゃんと説明するから一つだけ約束してくれ。俺が何を言っても、軽蔑しないって、約束してくれ」

「もうとつくに軽蔑してるんですけど」

「えーっ、さつきはしてないって…」

「あの時までは何とかもったわよ。でももうダメ。許せない」

「じゃ、それ以上軽蔑しないって、ち、誓ってくれ」

「それ以上はないから」

「そうか。んじゃまあいいや。あのね、話と言っても実に単純なんだけど、そう、要するに俺の言いたいことは二つしかない訳で、一つはこのサイトのこと。これはたまたま見つけたんだけど、アウトドアの館って言うてね、お、女の人のからだの写真をみんなでひ、品評するサイトなんだ」

「みんなって誰よ」

「そんなの知らないよ。顔も何も分からないのがインターネットだろ。あ、でもこんなページを開く人なんてそういるもんじゃないよ。アクセスカウンターを見てても一日に30くらいしか増えてないからまず俺たちの知り合いが見ることは考えられないさ。大丈夫大丈夫。えーと、どこまで話したっけ。あ、そうそう。女の人のからだの写真がね、こうしてぜ、全国から送られてね、あ、でもいやらしくないんだよ。なぜかってそれはね、外だからだよ。外で撮った写真専門なんだよ。ほら室内だと何でもできるからそれこそ普通の工、工口画像のオンパレードになっちゃうけど、このサイトは違うんだ。外でね、ちゃんと日の光を浴びて、何っーか健康的に撮った写真ばかりを載せてるから、いいんだよ。健全なんだよ」

「私のはお勝手に撮った写真じゃない」

「ああ、そうだね。そうだけど、いいかいこれを見てくれ。ほら、ここに書いてあるけど、規約その5、室内で撮った写真はなるべくご遠慮下さい。なるべく、ってことは、そうじゃなきゃ絶対だめという意味じゃないだろ。だから」

「……（画面を凝視）」

「だ、だから、いいんだよ」

「よかないわよ。えーと、ほら書いてある。その2、被写体となる方に必ず了承を得てから投稿して下さい。私、了承した覚えはないんだけど」

「そう。それは俺も心苦しかった。そうだよ、悪かった。ごめん。それは謝る。有美子に相談もなく勝手にやっちゃって本当にごめん」  
「相談されても困るけど。絶対断るし。てかその時点で軽蔑するし」  
「そうだよな有美子は。そうだと思つたよ。だから」

「だからって勝手に送っていい訳ないでしょ。それに何よ、そうだよな有美子は、って。やっぱバカにしてるんじゃない私のこと」

「何でだよ」

「私みたいにスタイルの悪いブスはどうせ品評なんて言葉聞いただけで怖気付くだろう、って思つたんですよ」

「違うよ」

「違うわいいわよ。はっきり言つてよ。いつも私を見て心の中で笑つてたんですよ」

「笑つてないって」

「ブスがなに化粧なんかしてんだよ、って」

「何だよそれ」

「ブスがなに美容体操なんかしてんだよ、って」

「有美子」

「私だつてね、好きでこんな顔になった訳じゃないの」

「有美……」

「好きでこんなからだになつた訳じゃないのよ。それを笑いものに

して。さぞかし面白いでしょうよ。人が一番気にしていることを、  
そうやってバカにしてさ」

「気に、してる？」

「当り前じゃない。女にとってではね、これは戦争とか親の生き死に  
よりもずっとずっと重いことなの。だってどうにもできないじゃない、  
い、どうしようもないじゃない。なのに男はすぐ差別したがるんだ。  
口には出さないけどどこに行っても何をやってもみんなそう。いつ  
だってそう。顔とスタイルで優劣付けるじゃない。可愛い子には受  
け答え一つ取っても違うじゃない。頭来んのよそういうのを見ると。

どうせ私はブスですよ。気持ち悪いでしょうよ。はいはい。あーな  
んでうちのお父さんとお母さん子供なんか産んだんだろ。ブスとブ  
男のくせにさ。ブスが生まれるって分かってるじゃん。確信犯よね。  
この世の中にはさ、二通りしかいないのよ。醜いか醜くないか。そ  
うでしょ。ブスはどうあがいたってブ男にしか相手にされないし、  
それで醜い者同士妥協し合って子孫を残して、私みたいなのが生ま  
れて繰り返すのよ。その間に美人は美男と繰り返すの。ループよ。

あー笑っちゃう。ブスのループ。琴美だってブスでしょ。しょうが  
ないわよ私の子だもん。逆らえないのよ。分かってるわよ。もうや  
つてらんないわよ。やつてらんないけど、我慢しなきゃ生きていけ  
ないじゃない。耐えられなかったら死ぬしかないのよ。町とか歩い  
てて可愛い子を見ると死にたくなっちゃうの。分かる？殺したくな  
るんじゃないかって死にたくなるのよ。だって、どうせ私なんか殺し  
てもブスの逆恨みってことで結局笑われて終わりだもん。ブスはし  
ょうがないなあ、って笑われて終わりだもん。分かってるもん。だ  
からせめてうちではそんなことを忘れて普通に過ごして笑われる要  
素を少しでも減らそうと頑張ってるのに、まさか一番近くにいる人  
にまで笑われていたなんて。バカにされていたなんて。あなた私に  
死ねって言うてるの？」

「言ってるじゃないよ。てかそんなことで死ぬなよ」

「そうよ。そんなことよ。デブとブスはね、生きてる価値がないの」

「有美子はデブでもブスでもないだろ。スタイルだって、ほら、この写真の通り……」

「かーっ、まだバカにする気？そうやって人を辱めて。それってもしかしてなんとかプレイのつもり？おかしいんじゃないの。変態！」

「ちよつと待てよ。それは逆に俺のことをバ、バカにしてないか」

「ほら」

「え？」

「ほら、今、逆について言った。ってことはやっぱり私のことをバカにしてるんじゃない」

「違うよ。俺はただ……」

「はいはい、私は確かに誰かさんの口車に乗せられて、調子に乗っちゃったバカですよ。ブスでスタイル悪いくせにこんな写真を……」

「何だよさつきから自分のことをブスブスって」

「だってそうでしょ。いいのよ。分かってるわよそんなこと。あなただっていつもそう思ってるんですよ」

「思ってる訳ないだろ」

「また嘘ばっか」

「本当だよ」

「うっん、嘘。絶対思ってる」

「思っていない」

「思ってる」

「……」

「思ってた」

「……」

「そっやってた」

「……」

「いつも」

「……」

「いつも」

「……」

「私のことバカにしてるんだ！」  
パンツ。

「……！」

「あ……あ」

「……」

「有美子、ごめん、い、い、痛かった？」

## 第十八章

ゴオゴオゴオ。冷蔵庫。痛い、と言った。頬ではなく手首。有美子、ちゃんとした発音で、静かな声でしっかりと言った。滂沱が終ったことを表す口調。先程飛び出て行こうとした有美子の手首をわたくしは咄嗟に掴んだ。力いっぱい握った。行ったら二度と帰って来なくなる気がしたから。うちにじゃない。わたくしにだ。そしてたらわたくし、外で裸の写真を撮るところか二度とただで裸の女に触れなくなってしまう。結婚により男が取得できる最大の権利を喪失してしまう。そうならもう何も残らない。残せない。それが男の社会構造だ。それが男の経済構造だ。都市基盤だ。インフラストラクチャーだ。裸の女にただで触れなくなった男に社会の逃げ道は存在しない。男が世界を生き抜くというのはつまりそういうことだ。その点女はいいよ。結婚してヒトの奥さんやお母さんになるという逃げ道があるから。あらあら主婦だってそれはそれは凄まじく大変で過酷な激務に追われるハイリスクローリタリーな肉体労働者なのよ、とか言うサロンパス臭いオバハンもいるが、世界経済にとつてそれは殆ど有益な物象を産出しない存在であることは歴史の教科書が証明している。ま、そんなのはどうでもいいことであるが、問題は有美子だ。有美子がわたくしから離れて別のヒトの奥さんないしお母さんになってしまったら、世界経済どころの騒ぎではないわたくしはわたくしの人生の夢のき、き、基盤を失うことになる。ゴオゴオゴオ。わたくし、掴んだ有美子の手首、親指だけを離す。白い跡が浮かび上がっている。

「本当だごめんこれじゃ痛いよな。ああでも俺DVの気は全くないからね、分かっているとと思うけど。さつきはついどうかしちゃって。俺いつも間違ってる有美子はいつも正しいんだけど、さつきは、さつきだけは俺の方が正しいって思ったから。ほ、本当にそう思ったから。だって俺有美子のことをブスだって思ったことないし。そり



や凄い美人だとも思わないけど普通って言うかむしろ中より少し上って言うか、平均は余裕で超えてて充分にその、イ、イケてるって思うから。本当だよ。俺本心で言ってる。た、確かに俺、美人を見るとたまに目が行っちゃうけどそれは誰でもそうであって俺が特別じゃなくてそんなことにはどっちかつつーと俺興味ないし惹かれなしいし。大体女は顔やスタイルじゃないって、ちよつと考えれば分かることだし。いいかい有美子。男にとって、け、け、結婚とはそんなことじゃないんだ。有美子はいいい奥さんじゃないか。いいお母さんだし料理も上手いし、俺や琴美のことをいつも考えてくれるし。結婚ってそういうもんだろ。金とか顔とかエ、エッチの回数とかそんなことじゃないだろ。だから俺有美子の顔やスタイルをバカにしようなんて思ったことは一度もない。信じてくれ。それに有美子ちよつと自分を悪く思い過ぎてるよ。もつと、じ、自信を持ってよ。有美子が自信を持ってくれなきゃそれを結婚相手に選んだ俺が不安になるじゃん。大丈夫。俺がこんなに自信を持ってるんだ、自分の奥さんに。俺の選んだ奥さんはとびっきりの美人じゃないけど普通にイケててスタイルも良くて、特にお尻なんか最高で。あ、ごめん、また氣い悪くした？ごめん。有美子に無断で写真を投稿したことは本当に謝るよ。でもね、これだけは分かって。俺は今も言っただけで自信を持ってるんだ。自分の奥さんのスタイルに。あ、顔にも。でもどつちかって聞かれたらほんのちよつとの差でスタイルって答えるかな。だったらこうして最初から、か、顔が出せない場でスタイルだけを自慢しようって、そうだよ、俺はじ、じ、自慢したかったんだ。自分の妻を。有美子を自慢したかったんだ。さっきのキミは明らかに間違いを言ったよ。有美子はいいいスタイルしてる。それに自分が思う程ブ、ブスなんかじゃない。俺が、どもりの俺がこうしてどもりながら言っても信じられないと思うけど、キモいだけかも知れないけど、こればかりは俺の方がた、た、正しいって思うよ」「わたくしは必死だった。慎重に言葉を選び必死で喋った。とにかく伝えたかった。喋っているうちに何だか自分の人生を必死で正当

化しているような気分になった。その間有美子は一度も口を挟まなかった。かと言って聞いていなかったという訳ではない。その証拠に自信とか自慢とか、イケてるとか結婚とかそういった言葉を出すたびに、視線がちよこつとだけ跳ねた。よし伝われ、伝われ、大丈夫、ナポレオンになるんだ。そういや有美子の視線をぴくつとさせる言葉たちは全部吃音ワードだった。これが。ナポレオンはこれで王国を築き上げたのだな。

有美子、半袖の白いパジャマ。なんかダンスのレツスン服みたいでしょ、そう言って買ったパジャマ。もう何年も着ている。確かにパジャマっぽくないデザイン。ただ生地が薄いので屈んだりするとお尻の辺りが透けてしまう。何年か前、夜中にセックスした後どうしようもなくアイスクリームが食べたくなって二人ですぐ近くのコンビニに行ったことがある。待って、着替えてくるから。いいよそのまま。えー、だってパジャマよこれ。大丈夫、全然分かんないって。本当に？本当だよ、それに今ゴソゴソ着替えて琴美を起こしたら面倒だろ。それもそうね。コンビニでアイスボックスに手を突っ込む有美子を見て、あの時わたくしはわざとこう言った。ホームランバーのチョコ味ない？あるよきつと、探してみよ、きつと下の方に埋まつてるよ俺の間見たもん。えー、ないよお、と言いなから嬉しそうに有美子は下の方まで手を突っ込んだ。上半身をボックスの上に乗上げて。レジにいたアルバイトの学生がチラチラと見ていた。有美子のくいつと上がったお尻を。さつき履いたばかりのパンツが見事に透けた、白いパジャマのお尻を。あの時わたくしはそれまで味わったことのない興奮に支配されていた。心の中の平べったい何かがりズミカルに微塵切りされているような興奮だった。でも同時に、切ない覚悟もしていた。そのバイト君が落胆する覚悟だって、アイスを手に取り顔を上げた有美子を見てバイト君は思うに違いない。なんだブスじゃん、騙されたぜ。

「ねえ」突然有美子の唇が割れて、そこから声が漏れた。「離してどこにも行かないから」

「本当に行かない？」

「うん」

わたくしは手を離れた。ふーっと大きく息をする有美子。いいや。顔はどうであれ、お尻は上出来なんだから。誰が落胆しようとかわたくしはこれを手放す訳にはいかない。絶対にいかない。

「あなたも今、正しくないことを言ったよ」

「え？何だよ。まだ分かってくれないのか」

「ううん。思ってないもん。思ったことないもん私」

「何が」

「キモいなんて」

「え？」

「どもり」

有美子。動きのない白い有美子。ディスプレイにはもつすいちゃんはいない。幾重もの輪がクルクルと回るスクリーンセーバーの画面があるだけ。

「でも分かった訳じゃないから。そんなホームページ、どう考えてもおかしいから。二度と勝手に写真を送ったりしないって約束して」

「う…ん」

「分かった？」

「分かった」

分かつちゃうのかよつ。と心の中でノリツツコミ。まあとりあえずこの場は穏便に。無難に凌いでおいた方が良さそう。手首を掴んで離さないなんてテレビドラマのワンシーンみたいなことをやってのけた直後だ。雰囲気壊すな。それが大事。今は。有美子の白い手首にはわたくしが掴んだ手の跡がまだ明瞭に漏出している。

「ごめん。痛かっただろ、手首」

「痛かったわよ。あんなに強く掴まなくてもいいじゃない」

「だって、だって、俺、有美子がいなくなったら、俺…」

触ったり舐めたりができない。とは勿論言わず、とりあえずてんてんでん。そんなわたくしを見て有美子、いつものようにくしゃみ

を必死で我慢している埴輪のような顔。

「何言ってるの。バカみたい」

「バカバカ言うなよ」

「だってバカじゃない」

よし。穩便キープ。はあ。でもやっぱり難しそうだ。想像以上に有美子とプリンちゃんの距離は、耳朶と足首くらいある気がする。

どうしたらプリンちゃんになってくれるのだろう。プリンちゃんの写真を撮っている相手はどんな方法で説得したのだろう。知りたい。狂おしいまでに強く激しく知りたい。もしかしたらプリンちゃんの方にそういった先天的な願望とというか欲望があつたのか。まさか施設で育ち…と結局そこへ辿り着いてしまう。でも、やっぱり少し極端だよ有美子。自分を卑下し過ぎてるよ。自信がなさ過ぎるよ。狭量過ぎるよ。顔はどうであれ女なんだし、デブじゃないんだからそれなりの虚栄心って言つかさういふモンを少しは持てつての。あーあ。そんなこと思ってもどうにもならないか。こんなことになるんだつたら最初から施設で育つた女と結婚するんだつたなあ。って冗談だけど。4分の1くらいしかマジじゃないけど。ま、いや。気長に変わっていくことを願うしかないか。こうなつたら神頼みだ。神様、健全なお願ひ事に目を通すだけでも忙しいでしょうが、たまにはこついった不健全な願ひにも耳を傾けて下さい。

「そうだ。有美子アイス食べたいだろ。買って来てやろうか」

「えー、要らない。それにアイスだつたら箱入りのやつがまだ2本くらい冷蔵庫に残ってるし」

「そうか。じゃ、それを食おう。二人で」

「だめよ。琴美の分が」

「琴美には俺が明日、か、買って来てやる」

それからわたくしと有美子は台所に移動してお徳用サイズのガリガリ君を食べた。食卓で向かい合つて。

「ねえ」

「うん？」

「美人は三日で飽きるって言うじゃない」

「ああ」

「本当かな」

「さあ。俺は飽きないよ。だってその前に飽きる程執着しないし。か、顔になんか」

「……」

「だからどんな顔でも俺、ずーっと変わらない」

アイスを齧りながらふと見ると、有美子は瞬きもせずになくしの顔を見ていた。相変わらずくしゃみ我慢顔で。いつもと違う点は頬に涙の流れた線が付着しているということ。そしてその透き通った瞳は迂闊にも可愛いとさえ感じてしまう程黒く輝いていた。慣れつつ怖いなあ、と思った。まあ、辛うじて飽きてはいないのだから平気平気。わたくし嘘は言っていない。

「あれ。今の台詞、どもった方が良かった？」

有美子の顔から噴射したのはくしゃみではなく、ふとしたはずみで消え入りそうなくらい霞んだ微笑だった。お、やっと笑いおった。これは何か良い兆しのような気がするぞ。早速神様に届いたか。わたくしの切実なる声が。ぬおう、よし。よし。このまま行けばもしかしたら築き上げられるかも知れない。フランス帝国よりも崇高でぬほほな王国を。よし。絶体絶命のピンチに追い込まれてからの起死回生だ。頑張れわたくし。頼むぞ神様。

## 第十九章

役所の女性職員、掃除のおばちゃん、外を歩く女子高生、ミニパトの婦人警官。女を見ると自然と尻に目が行ってしまふ。どれもこれもすいみつとうに見えてしまふ。有美子。どうしたらあの尻を外に持ち出せるのだろう。あーだめだ。頭がぼーっとしている。誰と話しても何を聞いても言葉がうまく伝わってこない。きっと言葉が脳に意味を伝えに行く途中でコンビニに寄ってやがるんだ。それで呑気に光熱費とかを払ってやがるんだ。だから伝わるのが異常に遅いんだ。くそう。モタモタしやがって。ぱっぱと伝えるよ。もしくは引き落としにしるよ、光熱費。

母屋の裏側に今にも崩落しそうな物置小屋が建っていた。

「ほら、ここの基礎の部分にひびが入ってるでしょ、これは工事が始まる前にはなかったと思うんだよね」

建物の所有者は痩せた初老の男で、近寄ると風体に合わない柔軟剤の匂いがした。

折衝が終わって車に戻ると、課長がいきなり首筋を掻き始めた。

「全くあのオヤジ、あんな所で長話を始めるとは。あー痒い」

「課長、蚊ですか」

エンジンを掛けながら倉田くんが課長の首を覗き込む。

「ああ。この季節はあれだな、蚊取り線香ぶら下げて仕事したいよ」

「あの良かったらこれ、どうぞ」

「何だい」

「携帯用ムヒツツ」

「おう、さすが。気が効くねえ倉田くんは」

「とんでも。あ、戸村さんは刺されてませんか？」

くるっと振りかえった倉田くんの口元が、まるで今にも血を吸いそうな角度で尖っていたのでわたくしは思わずたじろいだ。キミはそうして周りの人間の生き血を吸いながら出世していくタイプだよ。

その日家に帰ったわたくしは居間のドアを閉め忘れるくらいの小規模な驚きに出会った。有美子、肩の下まであった髪をなんとばっさり。小さな耳朵がはつきりくつきり露出。突然の大変身。わあ、随分と思いつたな。まあね、夏だし、鬱陶しくなっちゃってさ。なかなか似合ってるよ。そう？うん、なあ琴美。うんうんお母さん若くなったよ。本当？琴美ちゃん嬉しいこと言ってくれるじゃない、もうグリーンピース一個おまけしちゃう。しょぼつ。あはは。さ、ご飯にしょ。わーい。琴美も上機嫌。漢字検定で4級の合格通知が渡されたらしい。考えてみたら久々に見た。有美子の、うなじ。

先日行った千葉の地方研修レポートが、所内でなぜか高く評価された。いやあ戸村くんさすがだねえ、国土交通省から急遽オファーが来たよ、環境アセスメントのセミナーに出席して欲しい、って。禿げ課長がいきなりわたくしの肩を叩いたと思ったらそんなことを言い出した。凄いやないっすか戸村さん、気を付けて行って来て下さいね。倉田くんも拍手をしながら。おかしい。わたくしが、凄いやない。さすがな訳がない。レポートだってわたくしは表紙の作成と写真の嵌め込みをただただ。文章を書いたのは殆ど倉田くん。それに現地ではわたくし、仮設トイレでオナニーしてただけで。…え、ちよつと待つて。気を付けて行って来て？え？宿は向こうで手配してくれたらしいから、と課長なぜか含み笑い。宿って泊まりですか？当然だろ、鳥取だもんセミナーの会場。そういうことか。嵌められた。また二人に。で、それはいつなんですか。明日朝一の新幹線に乗れば充分間に合いそうっすよ。倉田くんが首尾良くナビタイム検索。この二人、面倒な出張は必ずわたくしに押し付ける。くそう。火炎放射器で焼き殺したるか。

丁度良かった、今日あなたの運動靴を買って来たのよ、セールやっていたから。出張の件を有美子に告げるとそう返された。運動靴？うん、だって皮靴じゃ砂の上は歩きにくいでしょ。別に砂丘に行く訳じゃないから。え、砂丘じゃない所ってあるの、鳥取に。あるさ、当たり前だろ、でも新しい運動靴は確かに欲しかったんだ。そうでし

よ。わたくしは玄関の靴入れを開ける。真新しい紙袋が端っこに中を見る。スポーツメーカーのロゴが着いたランニングシューズ。それと婦人用サンダルが入っている。このサンダルも買ったのか。あ、そうそう、安かったからつい、ね。わたくしはサンダルを袋から取り出す。鼻緒が麦藁色の紐で細かく編み込まれ、上に大きな向日葵の造花が乗っている。そして踵が異常に高い。ソフトクリームを舐めながら歩行者天国を歩くギャルが履くような代物。こんなサンダル、有美子は今まで履いたことがない。衝動買いしちゃった、可愛いでしょ。う、うん、そうだね。わたくしはこれを履いた有美子を想像する。お尻の高さが10センチは違うだろう。ううう。わたくしはどうしようもなく見たくなくなった。高低差を今すぐ確認したくなった。でもこれ、有美子に似合うのかなあ。わたくしはわざと言ってみた。えー、お店で履いてみた時は別に変じゃなかったよ。本当？じゃあ履いてみてよ。何で？いいから。有美子、怪訝そうな顔付きで玄関へパタパタパタ。スリッパを脱いでエプロンをしたままサンダルを履く。

「ね、そんなに悪くないでしょ」

「う、うん」

いい。有美子のふくらはぎに対して意外とほっそりした足首。膝の裏側が反り返る程真っ直ぐに伸びて、うわ、黒のハーフパンツのお尻の位置が高い。高いぞ有美子。空中に浮いているようだ。空中でぶにゅっとしたお尻の肉が、二つの肉が、傘傾げをしているみたいに寄り添っている。精美だ。触りたい。いやここはひとまず我慢。「でも踵が随分高いな」

「そうなのよ」

「転ばないように気を付けて歩かないと」

「でも、あんまり気を付け過ぎると姿勢が悪くなっちゃう」

「そうか。それじゃ元も子もなくなるな。それで道路で転倒したら正に本末転倒」

あ、我ながらうまいこと言った。有美子爆笑。あれ、微笑さえし



てない。くそ、ここは笑いが必要だぞ。

「よし、ひーちゃんだ」

「ひーちゃん？」

「このサンダルの名前だよ。向日葵のひーちゃん」

「何それ。かわいいけど」

ここでやつと有美子微笑。つーか苦笑。ま、笑ったことに変わりはない。笑いながら有美子、ひーちゃんまで歩いて床ターン。何だかプチ有頂天。不思議とこんな有美子の表情、初めて見る気がする。どうしたんだ有美子。くいつと上がってるぞ有美子尻。ぬほほ。素晴らしい。素晴らしいじゃないか。ヘアスタイルを気にして、踵の高いサンダルを履いて、お尻の位置をきゅつと高くして。卵だ。虚栄心の卵が遂に産まれたのだ。大体女の頭の中にはファッションのことしかないもの。ファッションとは実に多様な意味がおでん鍋の底で蠢く糸こんにやくみたいに絡み合っている。可愛く見せたいが全体の45パーセント以上、綺麗に見せたいが全体の45パーセント以上、その中も更に細分化されていて、細く見せたい、鮮やかに見せたい、金持ちっぽく見せたい、とかが状況ごとに出っ張ったり引っ込んだりして、大きく見せたい、細く見せたい、はセクシーに見せたいというコンテンツに含まれる。セクシーとはつまり思わず触りたくなるくらい大きなおっぱいでしょ、思わず触りたくなるくらい長い足でしょ、今は触れないけど後で思い出してオ、オナニーしたくなるくらい魅力的なからだでしょ、思わず勃った？ねえ勃った？的な女の威嚇射撃であり、これはファッションという文化の根幹を被覆するいわば断熱材のような役割を果たしている。そして女はそれを常にピストルの中に隠蔽している。ただ、そのセクシーさを発砲できるかどうかについては個人差がある。有美子は発砲するどころか引き金にすら、いや、安全レバーにすら触れないでいた。暴発するのが怖くて。整った顔立ちの女が威嚇するから男は勃つ訳で、そうでない女の発砲は失笑と揶揄しか買わない。そう思っているんだきっと。ブスがファッションを気遣ってもそれは決してセク

シーには変換されずそれどころか偽物だと罵られて。そうそう偽物中途半端。すっごいミニスカートを履いたすっごいデブとかをたまーに見るけど、あれはある意味本物。割り切った、一本筋の入った暴発。始めから勃たせることを目的としない意思表示オナニー。有美子のようにデブではない女はその点確かに中途半端。勃ちそうになつたところへ母親から電話、みたいな究極の腰砕け事態。何だよ詐欺じゃん。苦笑いはやがて怒りに変わり、幾つもの拳が頭に振り掛かってきて痛い痛いあーイタイ女だなあ俺今日イタイ女見たよ、と嘲笑されて、男子便所でオナニーではなく談笑のネタにされケータイでカシャッと撮られてすげーイタイ女発見、などというタイトルでミクシーにアップされてうわはははこりやイタイわというコメントが溢れ返って世界中の男たちにわはははと笑われて次の日の午前中に削除されてお終いだ。と有美子は思っている。全部憶測だけ。いや、思っていた、か。それが少しづつ変わろうとしている。わたくしには分かる。有美子頑張れ。わたくしは信じている。有美子が生まれ変わるのを。わたくしは信じている。有美子がこの際偽物でもいいから魅力という名の翼を広げ、大空に羽ばたくことを。そして自分の殻を脱ぎ捨てて、ついでに服も脱ぎ捨てて、わたくしに写真を撮られることを固く、強く信じている。有美子よ変われ。レボリユーション有美子。イエイ。そしてわたくしは鳥取。

## 第二十章

東京駅を出発した途端にわたくしはどうやら爆睡モードに入っらしい。目が覚めた時にはもう既に富士山が銭湯の壁で身動きできなくなったタイトルの絵みたいになくなっていった。この二日間、有美子は明らかに変貌した。嬉しいぞ。嬉しいけどーむ、ちょっと不満。有美子ではなく、ラビット反応。あの素晴らしいお尻に対する世界の反応だ。わ、わたくしは予想していた。私物なので鼻屑目に見てしまいがちだが、それを差し引いても見事な写真である。見事な尻である。それは間違いない。なのに世界からは何の反応もない。つまりコメント欄がぜ、ぜ、ゼロのままなのだ。アップしてもう二日経っている。なぜだ。やはり室内であるということがアンフェア感を派生させているのか。実は今朝も出掛けに有美子の目を盗んで拝んできた。すいみつとうを履いたお尻。それはもうピンクでぶるんで居たたまれずぬっふおっふおっふあ。わたくしは朝からバルタン星人のような笑みを浮かべたのだが、相変わらずコメント欄は空っぽのままだった。くそう。しかしネットの世界は常にオンラインタイム。今この瞬間にもどこかからコメントが来ているかも知れぬあー。あ、そうだ。モバイル。そうだよ。忘れてた。携帯電話からあのサイトを見られるように設定したんだ。わたくしは新幹線の窓のカーテンをさっと引いた。富士山もなく、土手で拾ったビデオテープの中身をズルズルと引き出して曇天に透かして見ているような窓外風景が薄緑色のカーテンに遮断された。ポケットからケータイを取り出して、えーとあの時来たメールをピッ。そんでピッ。ピッ。パスワードは、えーとそうだYUMIKO、と。そんでピッ。うおう。アウトドアの館。やかたあん。ぬひつ。わたくしはあのお尻を携帯して全国どこへでも、鳥取にも行けるのだ。投稿画像ピッ。むむ、新しいのが二つもアップされている。プリンちゃんだ。ぐわ、踏切。遮断機の向うを電車が走っている。その前でなんといつもの

黒いコートをドバツと。ドバツと広げてくねつと全裸ですぐ後ろをカンカンカンカン、ガタンゴトン、ガタンゴトン。随分田舎の踏切らしい。道幅も狭く線路も単線。だけどすげー。電車の乗客たちはさぞかし驚愕したことだろう。踏切待ちしているのが全裸の女だ。見たいよ。わたくしもこの電車に乗っていたいよ。くそう。乗客が死ぬ程羨ましい。そう言えばあの夜わたくしは有美子にこれは健康的な写真を載せるサイトだなんてついつい流れで言ってしまったが、プリンちゃんたら何というハレンチな暴挙。これでは不健康極まりないではないか。むおう、心が無駄に騒ぐ。居ても立ってもいられない。ちんちんを大きな船の碇にして意味もなくぶるんぶるん振り廻したい心境だ。プリンちゃん、いつもながらあっぱれ。いや、でも待てよ。そうか。この場合複数の人に気付かれたとしてもその場でじーっと凝視されることはないのか。何せ相手は走行中の電車内にいるのだ。降りて来ておいおいすげえな裸の女だぜ、とジロ見されることは決してない訳だ。それに自分の生活圏内から離れた普段は絶対に乗らないような鉄道にすれば、そこに乗っかっていている乗客たちなど異星人みたいなモンだ。だったら恥ずかしさはそれ程感じないか。となると必要なのは一瞬の度胸だけじゃん。なーんだプリンちゃん大したことないよ。それにこの、に、肉の付き方じゃねえ。うちのラビットをご覧なさい。いいからだしてるよ。ほらピピピピ、ほらこのお尻。拡大ピツ。見事でしょ。ドバツとするならこんなからだじゃないと。てへへーんだ。ってあらら。まーだコメントゼロかよ。うーん、おかしいなあ。

東京都で事業損失補償の折衝業務を担当している戸村と申します。どうぞ宜しくお願い致します。16時までのセミナーでわたくしが声を発したのは結局その一言だけであった。お陰でわたくしが吃音者であることは参加者にバレずに済んだ。この後は18時から最上階の催事場で懇親会が行われ、今夜はJR鳥取駅前にあるビジネスホテル「鳥取イン」に投宿する。明日は朝からバスで道路建設のために森林を伐採している現場の視察。そして近くのコミュニティー

ホールで昼食を摂って現地で解散。いかにも省庁的なイベントだ。

鳥取インで夜を過ごす間、わたくしは何回チェックを入れただろう。ラビットさんへのコメント数。いつ見てもゼロ、ゼロ。ゼロ。充電器を持って来たので電池切れになることはないが、これではパケ代が無駄に嵩んでしまう。なぜ誰も書いてくれないのだ。あれはどうした、えーと、以前水族館の芝生広場で撮った写真にコメントをくれた、何だっけ、そうそうテリーさん。豊橋かどっかの。彼は何をやってるんだ。あの時は背中だけだったのに今回はモロお尻だぞ。しかもどアップだぞ。パンツを履いているのがいけないのか。室内なのが気に召さないのか。くそう。寂しいじゃないか。これじゃ有美子に見せられないよ。ぬぬぬ。今日アップされたばかりのプリンちゃんの写真に早くも3件のコメントが届いている。ぬおーっ。寂しさ倍増。よし、こうなったら仕方がない。自分で書いてやれ。えーと、コメントを書く、ピッ、名前、えーと何にしようかな、あ、カズヨシでいいや、倉田くん確か和義だったよな、えーそんでコメント、ラビットさん綺麗なお尻ですね、グラビアモデルも真っ青、ってカンジですよ、あ、真っ青って表現はさすがに古いかな、まあいいや、ピッ、コメント送信中しばらくお待ち…あ、載った、よし、よしオッケー。どうせならもう一つくらい、えーとそうか、カッコ良い名前にしよう。その方が有美子にも受けが良さそうだし。えーと、タクヤ。よし。ってわたくしいつしか完全にこれを有美子に見せる気である。いいじゃない。そうでもしなきゃ絶対その気にならなそうだもん。っーか見てくれるかなあ、この間見つけた時はこんなサイトもう二度と開いちやダメ的な偉い剣幕だったし…って見せる、わたくしは何としても見せる、そのためにタクヤ、コメントだタクヤ、頼むぞタクヤ、えー、なんじゃこりゃあ(ー…;)こんな美尻見たことねえ、ムチムチ感がたまらんぜよ。ピッ。はは、タクヤ言うねえ。きつと極道だな。極道タクヤ。ひえーカッコ良過ぎ。しかも顔文字を使う極道。あ待てよ、ムチムチって言葉、もしかして太ってるって印象を与えちゃうか。女はデブを匂わす言葉を

世界規模で嫌悪しているからな。止めよ止めよ。そうだな、んー、セクシーさがたまらんぜよ、に変えよう。そんでコメントを送信。ピッ、と。よっしや。よっしや行ったあ。極道タクヤ行ったあ。ラビットさんコメント2件獲得。うひよひよ。

翌日。視察が終了して広いホールで海鮮バイキングの昼食が振舞われた後、国土交通省のお偉い方による締め挨拶があつて全プログラムが終了した。そのまま新幹線に乗り込んだわたくしは、更に2件のコメントを投稿した。ラビットさん、最高のお尻です、次は是非とも外での撮影に挑戦して下さい。ピッ。どえー（絵文字）この超イケてるおヒップに今すぐ太陽の光を当ててあげて（絵文字）約束だつちや（絵文字）。送信。ピッ。

…だつちや、って、歳がバレバレだな。まいーや。

## 第二十一章

都営団地の階段を上る。出張鞆の重さは感じない。わたくしの頭の中は忙しいのだ。段取りは新幹線の中で考えた。ただいま。あ、お帰りお父さん、お土産は？お帰りなさい。おう、琴美ただいま、いい子にしてたか？してたからお土産は？

夕飯を三人で食う。テレビを見る。しばらくのんびりくつろぐ。琴美が風呂に入る。有美子洗い物をしに台所へ立つ。よし。さて俺もセミナーの資料をせ、整理しちやおうかな。どもるな、独り言なんだから。とまあ自室へ。そして1分もしないうちにわあと声を上げる。台所には届くが風呂場には届かない音量。よし。スタスタ。スリッパの音。どうかしたの？ドアを開ける有美子。手にママレモンの泡。よし。段取り通り。

「有美子大変だ。これを見る」

「なあに。あーまた見てる。何よいきなり」

「違うんだ。見て欲しいのはここ（クルクル）。ほら（クルクル）、ほらっ、有美子のお尻に、こんなにたくさんメッセージが来てる」「メッセージ、って、誰から」

「知らない人からだよ。ほら、グラビアモデルも真つ青、とか。セクシーさがたまらん、だって。こりゃ凄いな。みんな感動してるよ、有美子のお尻を見て」

「嘘お」

「嘘なもんか、こうして全国から届いてるじゃないか」

「全国から？」

「そうさ」

「全国の、知らない人から？」

「だからそうだって」

有美子、コメント欄を凝視。大丈夫。パソコンを開いてから1分も経っていない。わたくしが何らかの操作をすることは時間的に考

えてもまず不可能。と、有美子は思っている筈。

「これ、全部あの写真に対するものなの？」

「そうだよ決まってるじゃん。凄いなあ有美子のお尻、ちょっとした事件になっちゃってるよ」

「事件だなんて、そんな大袈裟な」

「事件だよ。これで分かっただろ。有美子は事件になるくらいのプロポーションしてるんだよ」

「…」

「有美子、ついにファンを抱えちゃったよ。どうする？」

「どうするも何も無いわよ。何なのこれ。おかしいんじゃないの」

「おかしくないって。この人たちは正しいよ。だってこのピンクの、すいみつとうの、ふつくらとした、ぼよつとした、あー、分かるよ。本当セクシーだよ堪らなく、これじゃファンもできちゃうよ」

「嘘でしょ」

「だから嘘じゃないって！」

有美子、世界が瞼の外側にあることを確かめるようにゆっくりと瞬きをして、再びコメント欄を凝視。そして完全に脳とは繋がっていない、先っぽが垂れ下がった言葉を唇から押し出す。

「こんなの…嘘に決まってる」

わたくしはクルクルとロールバーを下げる。他の人の写真を有美子に見せる。何日か前のプリンちゃんをやつとか、その他太った人の写真を選んで。どこにそれがあるかも新幹線の中でちゃんと把握しておいた。

「ほら見てごらん有美子。この人なんかこんなにデブだぜ。ほらこれも。これも。これなんか見るに堪えないよ。こんなんでよく投稿する気になれるよ。それに比べると有美子のお尻の何と美しいこと。雲泥の差じゃないか。うーん凄いよ有美子。嬉しいだろ。俺は凄く嬉しいよ。有美子は俺の誇りだよ。け、結婚して本当に良かったよ」

言いながらわたくしふと気付く。有美子が今日着ているTシャツ、



随分と胸の部分が開いている。こんなシャツ、前から持ってたっけ。新しく買ったのか。わお。谷間が、この角度から見ると、わお。有美子、いつの間にかこんなＴシャツ着るようになって。

「どうしたの。あなた最近、言うことがオーバーになってない？」

「本心を言ってるだけさ。俺、つくづく有美子と結婚して良かったと思うよ。こんな、みんなを感動させるプロポーションの女とさ」「本当？」

有美子ウルトラくしゃみ我慢顔。つまり超照れてそれを悟られないよう眉間に皺を寄せ、頬の筋肉を無駄に突っ張らせて。そしてマウスをわたくしの手から奪う。クルクル。自分の、すいみつとうの写真へ。しばらく見て、ゴクン。唾を飲む。つられてわたくしもゴクン。クルクル。コメント欄。綺麗なお尻ですね、セクシーさがたまらんぜよ、最高のお尻です、次は是非とも外での撮影を、外での撮影を、外での。ゴクン。有美子の白い首筋を小さな汗が流れる。祭りの喧騒が五月蠅くて受験勉強ができない中学生のような汗。だめ。静かにして。集中できない。いいじゃないお祭りの日くらい。ゴクン。だめ。やっぱりだめ。いいことや悪いことやいけないことや恥ずかしいことや我慢できることや我慢できないことを分別するラインが揺れて、乱れて、形を崩して、出っ張って引っ込んで痒さに似た胸騒ぎの中で煩悶するしかない夏の心の汗。それがつつと谷底へ消えて浸透し、潤してゆく。胸を。からだを。その光景を惜し気もなく曝け出している有美子のＴシャツ。有美子の心は、今はつきりと汗を流している。決してしょっぱくはない汗を。わたくしには分かる。分かるよ有美子。カチヤツ。

「…あ」

風呂場のドアが開く音。おかーさん、バスタオルないよーっ。わたくしは慌てて画面を閉じる。有美子、小動物のように目をくりくりさせて、顔をニユートラルモードに変換させる。あ、ごめーん、今持ってたからちょっと待ってて。言い終わらないうちにわたくしの声が有美子の足を引っ掛ける。

「このままじゃまずいよ有美子」

「え？」

「この人たち、有美子の、ラビットさんのファン、裏切る訳にはい  
かないだろ」

「そんな、知らないわよ。だって勝手に、そんな」

「撮ろう有美子。外で」

ずわあ。言ってしまった。言ってしまったわたくしの口。唾を飛ばして。結果を予想することもできずに。つーか結果なんてものに辿り着くことさえ予想できずにわたくしはスリッパのまま走り出してしまった。同じくスリッパの足を引つ掛けられて前につんのめつたままの有美子は斜めに汗を走らせながら砂っぽい埴輪顔。

「じよ、冗談でしょ」

「真剣だよ。有美子期待されてるんだよ。もう有美子ひとりの問題じゃないんだよ。見ず知らずの人たちにこんなにまで期待されて、裏切れないじゃん、このご好意に対して。だから彼らの期待にこたえてあげることがその一番のお礼と言うか、人としての最低限の礼儀と言うか、そう思わない？な、応えてあげようよ。それにさ、有美子チャンスだよ。変わるよ。いい機会だよ。これを逃したり無視したりしたらきつと後悔するよ。それよか失礼だよ。有美子はいいい女なんだよファンが付いてるんだよもう後には引けないんだよ」

何一つ説明になっていないことは百も承知だ。わたくしは唾を飛ばしながら有美子の目を見てどもりもせずにかくし立てた。あれ、マジでもってなかった。

おかーさーん、まだあ？はいはい今持っていく。埴輪を解いて有美子はわたくしの部屋を出て行く。ベランダの扉に手を掛ける。

「なあ有美子。分かってる？」

有美子、わたくしの目を見ない。干してあったバスタオルを掴んで慌てて風呂場の方へ。

「なあ！」

「分かってるわよ。ちょっと考えるから」

「今考えてよ」

「だからちよつと待つてよ」

お母さん何を考えるの？浴室のドアが開いている。琴美、隙間から顔だけ出して。はいはいお待たせ。琴美にバスタオルを渡しながら有美子、何かのついでのような気怠い速度で振り返る。

「はいOK、って訳にはいかないでしょ。そんなこと」

最後のしょ、の部分で有美子はわたくしの目を見た。

有美子の目、あんなにでかかったっけ。あんなに濡れてたっけ。

## 第二十二章

その日以来、有美子は鏡を見る時間が長くなった。ような気がする。そのためか以前程小まめに弁当を作ってくれなくなった。まあ先週から仕事に行き出したからつてもあるんだろうが、朝食を終えると真つ先にドレスサーに向かう。仕事と言っても友人が経営するピアノ教室の臨時講師だ。週に3〜4回、小学生相手にピアノを教えている。教えられる程の技量があるつて素晴らしい。わたくしには何一つない。他人に教えることのできる特技。でもぎゃほほ。そこには夏のおでん鍋みたいにロマンの欠片もない暇で退屈な脳味噌を頭に擦り付けた夏休み中の小学生しかいない。職場で誰かに言い寄られたり服の下や中身を想像されたりすることはないのだ。それにしても有美子は最近入念に化粧をする。くどいが有美子の顔はそこに彩りを加えて変化を楽しむような形状はしていない。それは本人が一番よく分かっている。それなのに化粧して、ちょっと胸の開いたTシャツを着て、お尻の位置をファンタスティックに嵩上げするサンダル（ひまわりのひーちゃん）を履いて出掛ける。お陰で今日もわたくしの昼食はコンビ二のイカフライ弁当だ。お待ちのお客様、こちらのレジへどうぞ。ほーい。わたくし開いたばかりの隣のレジに移ろうとして。あ。老女の乗った車椅子を押しながら介護ヘルパーらしき女性がソイジョイととるる昆布入り春雨ヌードルをレジ台に。何だよわたくしの方が先に並んでいたのに。まあいいかわたくしは心の広い係長。とさり気ない優しさを持つ自分の姿を鏡で見たいなと思った時、介護の女性が何かを思い出したように慌て振り返りわたくしに言った。あ、すいません、先に並ばれていましたよね。ああ、いやいいんですよ、どうぞどうぞ。そうですか、すみません。車椅子の老女もちょっと遅れてわたくしに頭を下げた心が洗われるような二人連れだ。こんな美しい心を持った人でないと介護ヘルパーは務まらないのだろう。うん、美しい。年齢は有美

子よりちよつと若いくらいか。それにわたくし、なんて親切ガイ。この昼時に何とも美しい人間交流。何とも美しい、白いズボンの、尻。割れ方。お会計392円になります。はい…あ、2円あります。美しい。1円玉を重ねて挟んだ指先も美しい。ソイジョイと春雨ヌードルがなんだか世界一美しい食べ物に思えてきた。春雨ヌードル、春雨ヌードル、ヌードでヌードルはるさめぬーどるはるさめなつまめあきはだめ、だめ、だめよこんな所で、この白いズボンの中、こんなに近くにありながら世界の果てにあるように思える。見たい。まあそれを見たいと思うのは男にとって空に星があること以上に普通で当然で普遍的で伝統的で教科書に載せてもいいくらいスタンダードな願望であつて、同時に生きる上での本質的な指針となつていゝる。でも本物の教科書を書いている人がどこかにいるように、この美しい人の美しい白いズボンの中のパンツの中の二つのつるんとした隆起を生で見ることができる人も世界のどこかにいる筈である。その人は知っている。伝統的なまでに美しいこの尻が裸になつた時の最も美しくそこに存在する、もうそれを見たら死んでもいいとさえ思えちゃう瞬間の色と大きさと形状とそれに、だ、だ、弾力性を例えばたくさん白い泡。隠れている。尻が。割れ目が。ぼんやりと滲んだ肌色がメロンソーダの中に落ちた月みたいに時々見える。キユツ。シャワーの栓を捻る。ジャー。髪の毛から背中へ水が伝つて、あ、泡が、月が、割れ目がぷるん、泡の下からぷるんと飛び出したよ、などといった光景。くそう。何て羨ましいんだ、そいつは生ぬるい湯船に浸かりながらなおも観察を続ける。わあ、わあ、お尻だよ、教えてあげるよこれがお尻だよ、まあく膨らんでぶよぶよと凹んですすーっと落ちてるよ、眩しいよ、眩しいよ、教えてあげるよこれがお尻だよ果物じゃないよお尻だよ食べ物じゃないよでも食べたいよ食べたくなくなっちゃうよ、ぷるん、シャワーの水が弾けて肌色が空気の中に弾け飛んで行くよ、ぷるん、濡れてるよ、所々に水滴が付いてつつーって、つつーって、下の方から見てみるよ、割れ目の真ん中の一番奥に黒くて短いものが見えるよ、毛だよ、その

毛の先つばに雫がつつーって先つばに、何本か束になった先つばに、あ、落ちたよ、落ちたよ、二つのぷるんとした膨らみの奥から雫が落ちたよ黒い毛の先つば先つば、可愛いくて短くて黒い毛の、け、毛の、これが本当のとろろ昆布入り春雨ヌードルだよ、ってわあ、なんだよおっさん、割り込むんじゃねーよ。ぐわ、いつしかわたくしを差し置いて新規の列が。

レジの行列という昼時に最もふさわしい光景の中で最もふさわしくないとろろ昆布を連想してしまったわたくしの脳味噌はなかなか元の位置に帰ることが困難であった。畜生。イカフライ弁当。畜生。美味いではないか。ひよつとしたら有美子が作る弁当より。くそう。尻に見える。イカフライでさえ尻に見える。有美子も大好きイカフライ。そうだ。これはわたくしと有美子の共通の好物。そう思ったらわたくしと有美子はこの瞬間も同じことを考えているような気がしてきた。俺撮りたいよ、外で。私も、私も。よし。わたくしはイカを咀嚼しながらケータイを取り出した。メール。有美子先生、頑張ってますか。小学生にその魅力的なお尻を触られていませんか。ついてはそろそろ行きませう。撮影に。ファンがお待ちかねでっせ。日曜日なんかどう？（ハートマーク）。送信ぼち。よし。夫婦は大抵同じことを考えている。もしかしたら有美子も今イカフライを咀嚼しているかも。わあ私も今丁度同じことを考えていたのよでも私からはなかなか言い出せなくてだって私春雨ヌードルじゃなくてイカフライだし。そんなこと関係ないだろ第一俺は春雨ヌードルよりイカフライの方が好きだよ好きに決まってるじゃん春雨ヌードルになど最初から興味ないよ。わあ嬉しいじゃすいみつとうを履いた私のイカフライを…。あ、返信来た。妄想遮断。日曜日は学校。PTA主催の図画工作展の打ち合わせがあるの。残念でした（舌をペロツと出した顔）。わたくしは咀嚼を止めて飲み込む。イカフライを。結局イカフライはイカフライだよ。けつ。

## 第二十三章

何となく違う。パソコンの位置。じゃない。マウスパッドの位置。違う。いつもように出掛けのすいちゃん拌みをしようとしてわたくしふと気付いた。有美子わたくしのいない時にパソコンを開いたのか。まさかアウトドアの館を。いやいや、それはない。だってあのサイトはそう簡単に……って簡単だよ検索したらすぐ引っ掛かるし履歴をクリックしたら一発だ。もし有美子が見ていたらどうしよう。ラビットさんの写真。くそう、あと3つ4つ絶賛コメントを捏造しとくんだった。でも待てよ。最近の投稿欄は凄いぞ。凄いや、写真ばかりだぞ。プリンちゃんを筆頭にどんどんエスカレートしてからに。あれらを見たら有美子びびるどころか引いちゃうよ。うーん、まずいな。まずいよ。ってまだ見たかどうか分かんない訳だし机の上を掃除してくれてそん時にちよつとマウスパッドを移動しただけかも知らないし。まあいいや。考えるのよそ。わたくし本日は拌まずに出勤します。卑屈な退屈が鬱屈した窮屈な邪屈の巣窟へ。屈、いや靴クリームを塗って。

さて、もはや容赦なく真夏。朝から玄関の外にはうししと笑いながら太陽が待ち構えている。扉に挟まれて落ちるのを待っている黒板消しみたいに。わたくしドアノブを回しながら瞼を押さえる。

「行って来ます」

「あ、ちよつと待って」有美子、古新聞の束を両手に持ってパラパラと玄関へ。「これ一つ持ってよ」

わぁデジャヴだぁ。わたくし慌てて見る。確認する。有美子の胸……。今日はしてるんだね」

「何を」

「ブラジャー」

「やだ、当たり前じゃない」

ブラジャーどころか、化粧まで完璧にして。もう有美子ったら。

わたくし束を一つひよいと持ち上げ再びドアを開ける。

「この間はしてなかったよ。これ下に持って行く時」

「そうだった？よく覚えてるね。てかよく見てたわね、そんなトコ見てたさ。その、先っぽがさ、プチプチってなってる可愛かったなあ。あれみんな気付いてたと思うよ」

「やったあ。言つてよ恥ずかしい」

「えー？有美子、意外と平気なんだなあって感心してたのに」

「何が」

「だから平気でその、ノーブラで外に出てさ」

「平気じゃないわよ。あの時は急いでたの。もうっ」

有美子ほっぺフグ。

「ははは。いいじゃん。セクシー妻。ちよいエロカッコ良いごみ出し風景。わ、なんか色っぽい記事のタイトルになりそ」

「なーに言つてんだか」

「だからさあ」

「やだ」

「え？」

「外で写真を、つて言いたいんでしょ」

「あれ。いや、その、そうだけど」

「だめ」

「うん。PTAがあるのは分かったから。じゃあさ、いつだったら大丈夫？有美子の都合に合わせるよ」

「そうじゃなくて、やつぱりやだ。外でなんかその、出せないよ。

どう考えてもヘンじゃない。それにさ、琴美はどうするのよ。何て言つて出掛けるのよ二人だけで」

「そ、それは、何とでもなるだろ。塾に行つてる時にするとか」

「そんな短時間で行つて帰つて来れる訳ないでしょ」

「じゃあ松戸のばあちゃんちに預けて」

「いやよそんなの。心苦しいったらありゃしない」

「だって。じゃ、前の日から松戸に泊めて」



「だめ。はいありがと。行ってらっしゃーい」

回収業者の小太りの男がわたくしに向かって会釈をする。わたくし会釈を返しながら有美子を見る。まだ言いたいことがいっぱいあるのに。有美子、やけに白い笑顔。手を振る。頑張つてねー。う、うん行って来ます。まっ平らな胸の先端。まっ平らな夏の朝。

今日は本庁で補償審査会の講習。禿げ課長は眠くなりそうなテーマの講習会は必ずわたくしを指名する。都庁の建物も太陽にすつかり洗脳され、入口の自動ドアもうししという紫外線臭い軋み音を発生させていた。この暑い中、展望台エレベーターの前には人の行列。地方から来た修学旅行の女子高生たち。トウキョウにキヤーキヤー言うたくさんのミニスカート。なんか全国的に短くなったなあ。などとわたくしついたら実に歳相応の感想。面白いモンだ。都会でも田舎でも主婦でも女子高生でも尻は割れている。しかもあんなに短かったり、あんな、先日の白い春雨ヌードルだったり、最近じゃ尻が安売りされてるような気がする。昔はここまで割れていなかった。いや、当然割れていたんだろうけどここまで表出していなかった。尻がそんなに市民権を得ていなかった。ヴェールに隠された存在だった。あ。あのエスカレーターで登って行くジーンズのお尻なんか見事に突き出ている。後方に。ああいうのを見ると、う、嬉しくなっちゃう。スカートにしるズボンにしる、とにかく如実になった。お尻のカタチが。果たしてこの衣服を作っている人たちは分かっているのだろうか。実際に履いた時、ああしてぶるるとなることをちゃんと想定した上で製造しているのだろうか。そりゃプロだもんしてるわさ、当然じゃん。ああ、そうですか、それは失礼。やはりあれですか、女の尻は世界的にぶるるとしているべきだとお考えですか。勿論さ、ぶるるとさせるために俺たちはデザインから生地を選別、加工まで全精力を費やして研究してるんだ、この星のぶるるん化計画のために残業し休日出勤しているんだよ、もう分かつたらう、我々の正体は地球を侵略しにやって来たぶるるん星人なのだよわっはっは。しまった。もの凄く短時間の間にいつしかわたく

し見えない人（アパレル関係勤務で実は異星人）と話をしていた。ええと、講習会って何階でやるんだ？

予想通り講習会は睡魔との闘いであった。

チャプター2にあるように、損失補償の説明で最も重要なのは公正さと公平さを工事被害者にどれだけ理解して頂くかなのです。そのため我々渉外担当者は自発的にアセスメントデータを収集し…。

自発的。この言葉でわたくしの臉は少しだけ広がった。ぶるるんも自発的な応力が加わらないと生成も維持もできない。のだよ。ぶるるん星人の残業時間が全て無駄になってしまふ。のだよ。分かっているのだろうか。どこまで意識しているのだろうか女の人って。ジーンズの人もミニスカートの人も、どこまで理解しているのだろうか。今自分がぶるるんになっていくか、いないか。神聖な鑑賞物あるいは男の崇高な想像力を喚起させる尊いエネルギーになっているか、はたまた焦げ目の付いた巨大餃子の裏面を思わせる醜悪で平べったいただの肉板になっているか。ねえ。ねえ。分かっている？分かっていなかったらわたくしが教えて回ってあげようか。キミはぶるるんだよ。キミは餃子だよ。キミはぶるるんになったつもりでいる勘違いした餃子だよ。キミはぶるるんだけどそのスカートがせつかくのぶるるんを台無しにしてるよ。キミは随分と未練がましい餃子だよ。キミは見事な隆起でしかもそれを助長させるスカートを履いてちゃんと意識的に左右に振りながら歩いている最高級のぶるるんだよ。キミは健闘及ばずって感じの横に広がり過ぎな餃子だよ。キミは思わず触りたくなるぶるるんだよ。キミは手の平って訳にはいかないけど手の甲でなら触ってあげてもいいプチぶるるんだよ。キミは明日から性別の欄に女と書くのを辞めるべき餃子だよ。キミはみかんの皮を剥くようにしてぺろんとパンツを脱がしてから唾液でよくく湿らせた舌でゆつくりと十文字に舐めてあげたくなるくらい秀逸なぶるるんだよ。十文字。どっちからいく？横線？それとも縦線？ぐげんげ、キミは思わず尖端に犬のウンコが付着した棒でぶつ叩いてやりたくなる餃子だな。あーあ、可哀相に。棒で叩かれた

ら痛いよそして臭いよ。あーあ。全ての女の尻が餃子の裏側でできていたら良かったのにね。そして世界中の悩みの半分以上はなくなるのに。だけどそうは問屋が卸さないんだなあ男という生き物が存在する限り。残念だったね。くふふ。まあでも棒で叩くのは勘弁してあげよう。幾ら何でも酷い仕打ちだ。これからは自発的にちよつとくらしいの餃子でも大目に見てやろう。それに餃子だって条件やタイミングが整ったらぶるんに変貌する可能性だって充分考えられる訳だし。だからこの世の餃子ども、これからはぶるんになる条件と…。条件？んん？そうか。有美子。キミは条件とタイミングを既に考え始めてくれてたんだ。そうだよ。撮影に行くとなったら都心じゃ無理。郊外へ電車で移動する必要がある。となると短時間ではなく長時間のミッション。そこでネックとなるのが琴美の存在だ。そうか。琴美にはなんて言っておけるのが一番自然か。確かにもう、一人で留守番させておける年齢ではあるが。下手なことを言っただけで訝しがられたり、不自然な理由を近隣住民に伝えられ、後でややこしいことになってはまずい。まずいぞ。そうか有美子。躊躇している理由はそこにあつたのか。

## 第二十四章

汗を掻きながら必死の形相で鼻糞を穿るわたくしの顔がアルタの巨大液晶画面に映し出されてひえーっと叫んだつもりがなぜか、みみーんと言う声であらわたくしいつの間にか蝉。という夢をリアル蝉音で遮断されて目覚めた。じゃ私先に行くね、あ、ハムエッグをレンジに入れといたからチンして食べて。と有美子。あら埴輪顔の化粧完璧妻。行ってらっしゃい。ってどこ行くの。やだ昨日言っただじゃない、図画工作展やるから来てねって。あ、そうか、えーと、小学校の体育館だったっけ。そうよ、琴美の作品見たいでしょ。

心臓まで日焼けして薄い皮がぴろっと捲れてしまいそうな土曜日の午前中。入口で来賓用のスリッパに履き替える。体育館の扉は全開になっている。長テーブルが置いてありそこに全学年のクラス名簿が添付してある。お子さんの名前の横に丸印を書いて下さあい。あ。てへ。化粧有美子は、受付嬢有美子になっていた。

木材を使用したシュールな工作や花だの鳥だのを描いた絵など、実に大らかで瑞々しい作品が展示された場内を一人で歩きながら、わたくしは次第に心が研磨されていくような気分になった。うーん。子供たちの頭の中は素晴らしい。おお。4年2組戸村こと美。なんだあいつ、絵もなかなかどうしてではないか。この鳥の羽根の付け根。微妙な色具合。おお。うまいぞ琴美。わたくし思わず声が出そうになり慌てて口に蓋。周囲にはたくさんの父兄。お母さんたち百花繚乱。こんな所で独り言を呟いていたら変に思われるしそれがどもっていたりしたら尚更恥ずかしい。何せ蝉になってもどもるくらいだ。要注意要注意。てか、さすがに全学年だけあってお母さん方の年齢も幅が広い。第一子が今年一年生ですう、と言うお母さんと、三男が六年生におりましてねうふ、というお母さんとはその間にオリンピックが何回開催されただろうと思わせて数えたくなくなるくらいの年齢幅を感じる。そして当然だが、一年生ですう的なお母

さんのお尻の餃子率は極めて低い。わ。あのお母さんなんか本当に股広げて凄い形相で人体をひねり出しておっぱいだオムツだ夜泣きだ百日咳だなどという何もかもがだらーんと伸び切っちゃうような日々を過ごしたのかと疑わしくなるくらい絵画的なぶるんを付着させている。あんなのがわたくしの妻だったら、そりやもう毎日がでれんとなつちやって虚心坦懐に日常生活を送ることが至極困難になりそうだ。歯磨きして尻。ご飯食べて尻。行ってきますで尻。みつつ飛ばしておっぱいと尻。にゅはは。それに比べてあの六年生の展示コーナーに集っている餃子ども。ここは中国でも宇都宮でもないぞ。しかしそんな中にもぽつりぽつりとぶるんが。はて。女の尻のスペックにはこうして年齢で峻別できないケースがあるからややこしい。うーん、ややこしい。

「何がややこしいの」

「うわ、有美子。」

「確かに複雑なタッチの絵を描く子もいるわよね」

「う、うん、そうだね。あほら、これなんか」

「それ琴美の絵じゃない」

「え」

いつからだ。いつから漏れていたのだわたくしの独り言。歯磨きからだとしたらやばい。つーか、まさかどもってなかったよな。

「あ、悪いんだけどちょっと手伝ってくんない」

「な、何を」

「お茶が大量に必要なになったの。だから一緒に運んで欲しいのよ」

「いいけど、誰が飲むんだよ」

「午後ね、区の教育委員会の人たちが来るんだって」

「ふーん。PTAって大変なんだなあ。どこに買いに行くの」

「坂下の信号渡った所にあるセブンイレブン。私サンダル取って来るから先に出て外で待つてくれる？」

鉄棒に寄り掛かりながら待つこと3分。財布と携帯を尻のポケットに突っ込みながら有美子が体育館から出てきた。お待たせ、えー

と、全部で十一本だつて。ごめんね、他に頼める人いなくてさ。ひーちゃんを履いて幾分身長が高くなつた有美子。早口でそんなことを喋りながらグラウンドを横切り校門の外へ。後を追うわたくしの前に尻。ラビット尻。これも最近買った股上の浅いスリムジーンズ。あ、戸村さんこんにちは。坂の途中で擦れ違うお母さんたち。みんな有美子に挨拶。こんにちはあ。有美子、意外と顔が広いで驚き。餃子PTAの中では。ってあれ。ジーンズは新しいがベルトは前から同じ物を巻いている。のはいいんだが、あれ。柄が、ベルトの柄が違つような。いや違つ。長い。長くなつた。留め金から先の重なり部分が。つまり穴の位置がずれて、うわ、有美子つたらずげー痩せおつて。考えてみりゃこの太もも。以前では考えられない。てか、こんなジーンズを履くことさえ考えられないちよいぶ下半身妻だつた筈なのに。ぬおお、変化した。リニューアル有美子だ。自覚だ。これは自覚に違いない。自覚して、自発的な応力が加わつた珠玉の実例だ。よし。よし。辿り着こうとしている。堅実に、着実に、到達しようとしている。有美子がラビットさんに。あとちょっとだ。頑張れ。頑張れ有美子。わたくしも頑張れ。ファイトファイト。

「ねえ有美子。なんか最近、からだの形変わったよね」  
「そう？ 痩せたからかな」

「うん。すつごくスタイル良くなつたよ。モ、モデル並みじゃん」  
「な訳ないでしょ」

「あるつて。他のお母さんたち見ただろ。格段の差だよ、有美子のスタイルと」

「そんなことないわよ。みんな痩せてるじゃない、私なんかより」

「細さじゃないんだよ、男が感じる魅力的なからだつて」

「まあでも65パーセント以上は細さだけど。確かに。」

「魅力：ねえ」

坂を降りながら有美子、何度も幽かに首を振る仕草。迷っている。揺れている。そして猛烈に照れている。心の隙間からぴこつと飛び出しそうな何かを必死で抑制している。いいんだよ。いいんだよ有

美子。我慢しないでよ。辿り着いてよ。くしゃみが出ちゃっても誰も笑わないから。その気になっても誰も笑わないから。よし、ここはひとつ畳み掛けてみるか。

「展覧会に来たお父さんたちもみんな思ってる筈だよ、有美子を見てあーいいお尻してるなあ、って。こんなヒトがお、奥さんだったらなあって。ちなみに俺はそんなこと一度も思ったことないけど」「本当?」

「本当さ。だってこうしてうちにいるんだもん。そんな理想が実際」「私って、あなたの理想なの?」

「そりゃそうさ決まってるだろ。それに今は俺だけじゃない。あのファンの人たちの理想にもなってるんだ、有美子は」

「ファン、って……」

「待ってるんだよ。有美子、いや、ラビットさんの登場をみんなで」

「……」

「応えてあげようよ」

「……」

坂の終点。歩行者信号が赤になる。

「来週。来週の日曜日はPTAも何もないだろ。よし、決めよう有美子。来週の日曜日にひーちゃんとすいちゃんを履いて……」

「無理よ」

「どうしてっ。何の予定があるって言うんだ。あ、琴美だったら大丈夫。昨日も久々におばあちゃんちに行きたいーって言ってたし」

「違うの」

「何が違うの」

「考えたのよ」

「だから何を」

「……やっぱ私、無理だわ。できない。あんなこと。あんな、外で裸になって。うん。無理。無理です。どうもすいません、って感じ」  
やはり見た。有美子、私がない隙に絶対見た。アウトドアの館。  
「待ってよ。待ってよ有美子。じゃどうなるんだ。有美子のことを」

心待ちにしている人たちは。彼らはちゃんとした批評家なんだぞ。単なる変態オタクじゃなくてしっかりしたり、り、理念を持って有美子を、有美子のお尻を批評して下さってるんだ。他の、エグさで勝負しているような低能なデブブスたちとは違うって分かってらっしゃるんだよ。実際違う訳だし。そうだろ。あの素晴らしいお尻の写真は、ラビットさんは、すいみつとうは、すいちゃんは、うう、どこへ出したって恥ずかしくない、みんなを幸せな気分にする……」

「だから、無理だつて」

信号青。とーりゃんせとーりゃんせ、のメロディ。

「どうして無理なんだよ」

「だって、ないもん。あのパンツ、捨てちゃったもん」

「え」

渡る。横断歩道。有美子。尻。残る。動けない。わたくし。街路樹。道路の白いライン。太くなる太くなる太くなる太くなるわたくしの心の中のなんかぶつといラインが爆音を轟かせて全身の毛穴という毛穴から噴出する。夏が、静かに、噴出する。



## 第二十五章

倉田くんが結婚することになった。らしい。週初めの定例会議が  
終わった席で、本人からではなく禿げ課長の口がそれを公表した。

課長、何もこんな所で。なーを言っておる、こういうみんなが集  
まった所で言っちゃえば気が楽になるってモンだろう。そうですね  
ど……。へえ倉田が結婚かあ、そりやおめでとう。あ、ありがとうす。  
倉田さんおめでとうございます。ありがと。へえ彼女いたんだあ。

そりやいますよ、失礼だなあ。あはは。ははははは。倉田、まさか  
所内結婚じゃないだろうな。違いますって。誰なんだ、相手は。う  
わあ知りたい知りたい、どこで知り合っただんですかあ。勘弁してよ  
相沢さん。いや、それは俺も聞いてないぞ、倉田くん、あの美人の  
彼女とはどこで知り合っただ？あれ、課長には言いませんでした  
つけ、ジムですよ、スポーツジム。キャ、おっしゃれー。と言うか  
そんなに美人なのか相手は。美人だよ、それも相当な。課長、会っ  
たことあるんですか。いや写真でしか見とらんけど、驚いたよ余り  
にべっぴんなんで。へー、見たい見たい、倉田さん私たちにも見せ  
て下さいっ。ええーっ？いいじゃないか倉田くん、見せてやったら  
ほら、課長のお許しも出たことだし。課長お。ほら早く。んもう、  
じゃちよつとだけっすよ。カチャ。わあ待ち受けにしてるんだあ。  
あだめ返して、ちよつとお。わー超可愛いつ。っーかセレブ系じゃ  
ん。本当だ。ほら、戸村さんも見て下さいよお。

わたくし渋谷液晶を覗く。若い女の顔。言葉を喋って顔と肉体が  
ちゃんとそこに存在するということをまず疑いたくなるくらい、圧  
倒的な美人の顔。ほれ戸村くん、君からも何か言っておらないか。

あ……ああ、お、お、おめでとう。あ、あ、ありがとう、ございます  
戸村係長っ。あはははははははははははは。

よし、今夜は前祝いといこうか。17時。業務終了のベルが鳴り  
止むのを待って、禿げ課長がそんなことを言い出した。賛成っ。部

署内みんなの手が上がる。え、本当ですか、いいんですか。倉田くんもしきりにロングヘアを掻きながら顎を小刻みに上下させる。蛙だ。横から見ると本当に蛙そのものだ。居酒屋大納言。わたくしアルコールは飲めないことはないが、酔って醜態を晒すのが怖くてこういった場ではいつもビール2杯くらいに留めている。なので今夜もそろそろ。まま戸村くん、空けて空けて。あ、あ、あ、すいません課長。戸村さあ、飲んでますう。飲んでますう、ははは。んげ、よく見たら相沢さん、前開きワンピース。しかも白。丸眼鏡のおかつぱへアで、こんな、串刺しされて店頭に並んでいるような体型しているのに。くそう。ぴっちぴちじゃん。ボタンが発砲しそうになっているじゃん。ぬわ。屈んだりすると時々ボタンとボタンの間に隙間が開いて、菱形の肌色が。そして、黒が。黒かよ。白に黒ブラかよ。こつ見えて中身は逆よ、いつも街路課のデスクに座ってきのこの山を食べているだけじゃないのよ、私だつて時にはこつやつて前開きでぴっちぴちで菱形になつてそのうちドバツて。うわ、見たいんだか見たくないんだか分かんない。相沢さん。くそう。もういい。相沢さん、君でいい、撮らせてくれ。君は串刺しだけど人前でそうやつてぴっちぴちになれる。菱形になれる。それだけで君は勝者だ。存在理由を獲得した生き物だ。くそう。有美子の存在理由って何なんだ。くそう。ゴクツゴクツ。戸村さん、いやあ、いつつもありがつおっほござーす、はは、飲んでくらさあいつ。ぬお。倉田くんめ早くも口が回つてないじゃないか。ゴクツ、ゴクツ。こんな、こんな蛙顔の奴にあんな美人が、いや、こんな蛙とあんな存在理由の塊のような美人はどうやつて、あんな美人の裸つて、ぬおお、くそう。ゴクツ、ゴクツ。あんな美人は、あんなに顔が美しくても、いや、あんなに美しかったとしたら、それを手にした男は果たして尻に興味が行くだろうか。あんな顔していつもそばにいるんだ、くほほ、行かないよお、顔だけで存在理由度90%越えてるもん。まして外で裸にして写真を撮ろうなんて思わないよ絶対。絶対絶対。くそお。有美子整形しないかな。してくんないかな。くそお。そしたらあ

なごとお願いしなくてもいいのに。すいちゃん、捨てられることも  
なかったのに。ゴクッゴクッ。あ、ちよっと戸村さん大丈夫ですか、  
二次会行けますう？

## 第二十六章

途中記憶が寸断してはいるが、二次会が行われた店を出ると外は大粒の雨。何時だ。わたくしは腕時計を見ようとしてなぜか鞆のフアスナーを開いてしまった。あー戸村さん鞆の中が濡れちゃいますよ、ほら早く閉めないよ。分かってる、今あれだ、このけ、携帯電話を取ろうと開けただけだ。珍しく、と言うか初めてわたくしの荒げた口調を聞いた倉田くんは一瞬リアクションに困った顔をしたが、すぐまたいつもの蛙顔に戻り、あ電話つすか、電話ね、で、どこ掛けるんすかこんな時間に。女房だよ。あ、もしかしてカエルコール？あはは古過ぎ。違う、駅まで傘を持って来い、と頼むんだ。ひえー格好良い。戸村さんって意外と亭主関白なんすねえ課長。そうだよ、倉田くんも見習わなくちゃな。はいっ。ってな展開になった以上マジで電話をしなくてはならなくなり、わたくしメモリーゴーランドでフラフラプをしている頭をなんとか落ち着かせ自宅へ電話。あもしもし有美子、悪いけどさあ駅まで傘を持って来てくれる？。有美子、如実にトーンダウン。だって、降ると思わなかつたんだもんもう、しょうがないわねえ。…のやり取りは少し離れた場所に移動して。ピ。電話を切ったのを見て倉田くんが足早に近寄る。いいですなえ戸村さんの奥さん、優しくて。何だ、あの美人の彼女は優しいくないのか。課長が突っ込む。いや優しいですよ、特に…。ん？ん？特に何だ。かー、言えませんつ。何だよおい。うわー、倉田さん今すっごいエッチっぽい顔してましたよお。やだなあしてませんつて。してたしてた。もう、エロエロアザラクなんだからあ。何すかそれ。

死ね。

やっと一人になったわたくし。川を渡る。この時間に乗るとまるで銀河鉄道だ。昨年開通したばかりのこの路線。高架にするにも程がある。第三セクターのビッグプロジェクトとして都が事業を立ち

上げた時にはそんな声が上がっていた。しかし、これはいい。窗外風景から全ての電力エネルギーが排斥される。本当に天まで昇りそうだ。本当にメートルが乗っていきそうだ。酔いと怒りの狭間で軋む安寧。雲と雲の狭間でたゆたう星たち。神秘だ。絶景だ。やるじゃん東京都。やるじゃんわたくし。って、星？駅に着く。まだ新しさが残るドアが開く。まだ新しさが残る改札を抜ける。まだ新しさが残る雨の跡。跡。だけ。止んでんじゃんっ。わたくしは空を見上げてひとりごちた。ああ、有美子に余計なこと頼んじやったなあ。有美子の姿はない。団地から駅まではどんなに早歩きしても13分。まだ到着していないようだ。待っててやるか。あ、そうだ。無理やり電話で呼び出したお詫びにガリガリ君でも買っておいでやろう。わたくし駅前にできた真新しいコンビ二へ。よし、今日は奮発してチョコ味だ。ってきゆるきゆるきゆる、時間を早送り。10分経過。来ないじゃん。20分経過。来ないじゃん。ガリガリ君を指で押してみる。くにゅ。溶けてる。んが。星空。夜のしじまのなんと饒舌なことでしょう。むおう。有美子どうした、まさか急いで横断歩道を渡ってあの安定性に乏しいサンダルでコケて怪我してそこへ猛スピードの軽トラックが。うわあ、大変だ有美子。で、電話。ピ、ポ。ピ。トゥルルル、はい。あ、有美子どうした？何が。何がって、どうして来てないんだ駅に。だって止んじやったじゃない雨。ぬお。生ぬるい深夜の風がわたくしの耳の後ろを吹き逃げてゆく。嘲笑するように。左手に持ったコンビ二の袋が揺れて、赤ん坊の歯軋りみたいな小さな音を立てる。ガリガリ君買ったのに。買って待ったのに。ぴん、と何かが触れる。わたくしにだってあった逆鱗に。

「あの俺、待ってたんだけど」

「そうなの？遅いなあって私も待ってたのよ」

「じゃどうして電話くれないんだ」

「いつ駅に着くかも分からないのにどうやって電話できるのよ」

「じゃ、せめて来いよ。や、約束したんだから」

「約束？あなたが一方的に命令しただけじゃない」

「お、お、俺はめ、命令なんかしてない」

「したわよ。あなたっていつもそう。一方的に約束したがるの。私の気持ちや都合も考えずに。それって約束とは言いませんから」

「待てよ。何のこ言ってる」

「別に。ただそう感じただけ」

ぴん。また触れた。わたくし、電話を肩と耳の間に挟み、コンビニの袋を右手に持ち替えた。

「嘘つけ。あのことを言ってるんだろ」

「あのことって？」

ぴん。言わすかコラ。わたくし、振りかぶる。袋。区画整理用地と書かれたフェンスに向かってアンダースロー。ぐしゃ。飛び出るガリガリ君チヨコ味二つ。

「有美子、変わったな」

「何言ってるの。訳分かんない。ひよっとして相当酔ってる?」

「もういいよ」「ピ」。

## 第二十七章

足が勝手に踊り出すので真っ直ぐ歩けない。赤信号を渡る。交通量がまばらな交差点。遠くでサイレンの音。蛙の声は聞こえない。昼間の空が道路に寝そべってケツをボリボリ搔いているような夜。くたばっちまえセニョリータ。歩道橋の階段を駆け登る。何だか物凄い速度で登れそうな気がする。階段登りという種目でオリンピックに出場するわたくし。二段飛ばし。降りる時は三段飛ばし。階段登り日本代表。日の丸を背負った足立区の星。ぜへ、ぜへ。ひよっとしてわたくし相当酔ってる？歩道橋のコンクリート基礎に座る。落ち着け。わたくしはちっとも酔ってない。酔ってなんかいない。あ、目の前。小綺麗なマンシヨンの一階ベランダ。日の丸を背負っていない足立区の物干し。水色。ピンク。水色。白。眼鏡が曇っている。パンツなのかブラジャーなのか手拭いなのかふんどしなのか全く見分けはつかないが、その色彩に誘われてわたくし立ち上がり、ふらふらと近寄ろうとしてガクン。左足が側溝に嵌り、バランスを崩した上半身が思いつ切り地軸の左側へ傾いて眼前に世界中の壁と電柱が一気に押し寄せ、気付いたら眼鏡が割れて額に小規模なたんこぶと切り傷が。くそう。いてえ。倒れ込んだ花壇から見上げると本物の星。この世界のどこにも繋がっていない星。星。いてえ。

「何してるんですか」

ふいに背後から言葉が突き刺さる。振り返る。コンビ二袋をぶら下げたけばけばしいメイクの小太りブス。水割り一杯二千円からのお勤め帰り。そんな感じの高カロリーな匂い。

「そこ、私の部屋なんですけど」

あら。わたくしついたらいつの間にもベランダの手摺に手を掛けて。何だか面倒なことになる予感がわたくしのフラフラプ再回転頭を旋回したのでとりあえずここは湯気の立ち上る記憶を消去。ということとでわたくしは何も見えていないし何もしようとしていないし誰とも

会っていない。ので立ち去る。失敬。

「ちよつとお、待ちなさいよ」

「ピ、ピ、ピ。何をしてる。この小太りブス。携帯電話を出して。盗むつもりだったんでしょ。今警察呼ぶから」

「け、警察って、待って。違う。わたくしは、その」

「何が違うの。こちら辺の女の子みんな迷惑してんのよ」

「だから違うんだって」

そう言っつてついわたくし、小太りの電話を持った右手を掴もうとして再び側溝に嵌り、今度は前方に体ごと傾いてそのふくよかな。

「キヤーツ、何すんのよ変態っ」

べしゃ。小太りつたらコンビニ二袋をわたくしの顔面に思いっ切りぶっつけてよく見たらそれはわたくしが先程アンダースローした袋と同じ店の物で、しかし中にはガリガリ君ではなく温めたオムライス弁当が入っつていてこんな夜中にこんな高カロリーなケチャップとデミグラスソースの一撃。しかも相当強くぶつけたのだろう、パッケージが破れて中身が飛散してわたくしの額にデミグラスの暖流。いてえ。さっきのたんこぶモロ直撃すげーいてえ凄まじくいてえ。血だかケチャップだか分かんない液体が眼鏡を喪失した瞳の中にジワリと滲入。深夜の磁器質タイル貼りベランダ手摺壁が赤く染まっつて絶望的にいてえいてえ。と、そこへまた別の声。

「あなた、何やってるのこんな所で」

有美子お。来てくれたんだあ。うおう。

「やだ。なにその顔」

「この人が俺を下着泥棒と、か、勘違いして」

「勘違いじゃないでしょ。実際に盗もうとしましたよね洗濯物。

しかもどさくさに紛れて私の胸…てかあなた誰。この人の奥さん？」

「そう、ですけど」

「丁度良かった。何とかして下さいよお宅のご主人。ってショックだろっけど。でも通報するよりはマシでしょ」

「だから俺は何もしていないって。有美子、信じてくれるよな」



「信じる信じないじゃなくて、私はこの目で確かに見たの。ちゃん  
と証言できるの。本当よ。奥さん、何ならこれから警察行きます？」  
「でも主人はやってないって言ってますんで」  
「そりゃ言うわよ何とでも。つーか信じたくない気持は分かるけど、  
これって奥さんにも責任あるんじゃない？旦那がこんななんつちや  
うって」

「どついう意味ですか」

「えへ、だからさあ、その何つーかさあ」

「黙れブス」

わたくしは思わず口に出してしまつてから、すこぶる安心した。

その一言が、どもらなかつたことを。

「はああ？」

小太りが素つ頓狂な声を上げた時、マンションの室内灯が続けざ  
まに三つ点灯した。ザツとカーテンが開く音。

「俺のことはいいよ。この際何言つても。でも、女房のことは悪く  
言うな。か、か、関係ないだろ」

くわー、最後の最後までどもつてしまったあ。

小太り、わたくしと有美子の顔を交互に見て口をモゴモゴ。

「すみません」有美子が突然頭を下げる。

「何だよ。有美子がなんで謝るんだよ」

「いいからっ。あ、すいません。主人には帰つてからちゃんと聞いて  
みます。なので今日のところはすいません。すいません」

有美子何度も頭を下げながらそう言つてわたくしのワイシャツの  
袖を引つ張る。この場は退散。圧倒的な眼力でそう指示する。そし  
て激高ケチャッパーなわたくしをドウダンツツジが細々と並ぶ花壇  
から引き摺り出す。覚えてるよこのふくよかブス。今度わたくしの  
ことを下着泥棒呼ばわりしたら、その口を世界中の壁と電柱で蓋し  
てやる。つーかその前にこの側溝に蓋してやる。東京都の街路課を  
総動員させて蓋してやる。と、自分にも聞こえない独り言。

## 第二十八章

いくら深夜だと言ってもこのデミグラスな顔面で町を歩いたら、それだけで通報される。との理由で一番近くの児童公園。わたくしは水道でばしゃばしゃ顔を洗った。額の切り傷がちよつと沁みものを我慢しながら頭も綺麗さっぱり洗い流した時、公園の向かいにあるコンビニから有美子が出てくるのが見えた。闇に浮かぶ冗談のよくな明かりに照らされた有美子の全身。何かマジですげえ痩せたよ、と再確認。ふう。あ、綺麗になったじゃん、まだ少し匂いは残ってるけど。言いながら有美子、青い新品のタオル。新品の匂い。コンビニで買うとやっぱり高いわ、これで三百円だつてさ、ぼったくりよね。顔と頭の水分を拭き取る。公園のベンチに座る。誰もいない。車も通らない。コンビニには客もいない。熱帯夜の空には毛も生えていない。ねえこつち向いて。有美子、途中まで剥がしたバンドエイドを両手で持って。あ、動かないで。先程まで赤い液体が流出していた額にペタ。ちよびつと、いて。

「有美子、疑ってないのか、俺のこと」

「ないよ」

「本当に？」

「本当だよ」

「本当に本当に？」

「本当に本当だつて」

「じゃ、なんで謝ったんだよ、あのデブブスに」

「そんな風に言っちゃだめでしょ」

「いいんだよ。実際デブでブスで有美子の十万分の一の魅力もない被害妄想女なんだから。あれは」

「だから、だめ。謝らなくちゃだめなの」

「なんでよ」

「だつて…私つてさ、理想だつて言ったよね、あなたこの間」

「あ、ああ」

「私の理想って、理想の旦那像ってどんなだか知ってる？」

「さあ、そう言えば分からないな」

「考えたこともないな、でしょ」

「う、まあ、うん」

「いいの。あのね、私の理想は、守ってくれる人。あ、危険からとかそういんじゃないかってね、何て言うか私以外のこの世の全てから」

「この世の全て？随分とでかいな」

「そうなの。三歳の子供も百歳の老人もみんなが赤だって言っただけ青って言ったら、例えそれが赤に見えたとしても、自分に嘘をついてでも、いやこれは青ですよ、と言い張ってくれる人。って、訳分かんないか」

「いや、分かるよ」分かんねーよ。

ミニスカートの子を乗せたバイクが猛スピードでコンビニの前を通過する。彼女が降り降りする瞬間をスローで見たい、とわたくし妄想炸裂。よし。すっかり酔いが醒めた。

「ありがとう」

「へ？」

有美子、人差し指で自分を指してその向きをゆっくりとわたくしに移動させて言う。

「理想があ、叶ったのよ」

人差し指、今度は逆の動き。わたくしから有美子へ。

「そんでそつちも、理想が叶ったんでしょ」

「う…ん」

「これって凄いことだよきつと。だからさ、理想が叶ってそうにない人にはとりあえず謝つとかなきゃ、罰が当たっちゃうよ」

そう言っって有美子、角砂糖の角がほんの少し崩れるくらいの小さな笑みを浮かべた。なんか、すげえ。有美子ってこんな顔して超優しいんだか、超エゴイストなんだか分かんない。女ってお尻も形而上だが頭の中も形而上。男にはきつと解明できないメタフィジカル

な肉と水分でできてるんだ。その点男は単純。どこまで求めて、どこまで叶えられるか。男の一生なんてそれで終始する。突っ込む技術。諦める技術。その二つを磨くバランスのことを、面倒臭いので人生と呼んでいる。それだけだ。青でも赤でもどっちでもいいよ。つーか青いよこのタオル。視界がケチャップカラーに染まるのは、もうこりこりだ。それだけだ。

琴美が眠る我が家の団地までは歩いて5分。黙って歩く。風が生ぬるい。熱帯夜は何だかあらゆる人種が水に沈みそうな気がする。黒人も、白人も、黄色人種も。根拠はまるでないが。浮かんでいようものなら誰かに無理やり沈められるんだ。手を掴まれ、深海の奥底へ。そんなことを考えている時、ふいに左手を掴まれた。悲鳴を上げそうになった。有美子。コマ送りの埴輪笑顔。手を繋いで歩くなんて何年振りだ？それも有美子から差し出すなんて。

最後にしよう。つーかこれで最後になるだろう。わたくしは覚悟を決めた。あとは今日まで磨いてきた諦める技術を存分に発揮して

「有美子」

「なあに」

「分かったから」

「何が」

「分かっているつもりだから」

「だから何を」

「他の誰かとか、もう関係ないから」

「…？」

「俺のために、俺だけのために、俺の最後の理想を叶えてくれないかな」

「…」

「もう言わないから」

「…」

「俺、本当に、心の底から本当に、有美子の写真を撮りたいって思ってる。有美子の、いや、俺の理想を残したいって思ってる。でき



わたくしは半泣きする蟬のように上体を起こした。

「うん。手を離しちゃ、いや」

有美子、再びわたくしの手を握り立ち上がらせる。

「私、実はもう一つ理想があつてね。これはとっても単純なことなんだけど」

有美子、握ったわたくしの左手の指を顔の近くへ。

「あのね、昔から手の指にすごいこだわりがあったのよ。結婚するなら絶対理想の指を持った人と、って決めてたの。高校生くらいの時からずっと。でね、あなたの指はその理想にほぼ完璧に近かった」

「俺の、指が」

「うん」

団地の巨大な影がもう目の前に見えている。

「帰ろ。琴美が起きてたら大変だし」

「うん。そうだね」

なんか、終わりだ。これで終われるんだ。不思議と軟らかな安堵感。諦める技術。やがて階段の下に辿り着く。静かに音を消して三階まで昇る。そーっと入らなくちゃね、我が家なのに。うん。あ、電気点けちゃだめよ。玄関はいいだろ。だめ、私が先に入るからあなたは玄関で待ってて。何で。いいからそうして。かちゃ。解錠音。ききー。ぱたん。すたすたすた。あ、有美子お。待ってて。電気は？だめ。何だよ、真っ暗で何にも見えないし。寝室のドアが開く音。しばらくして閉じる音。すたすたすた。いいよ玄関の電気点けても何だよ信用ないなあ、俺だって琴美を起こさずに部屋に入るくらい…ずわっ。わたくし思わず声が出る。しっ。有美子、慌てて人差し指を唇の前に立てる。オレンジ色のダウンライトに浮かび上がる、狂おしいまでにぶるんとしたすいみつとうを履いた姿で。

「くわ、くおれ、すいちゃん、捨てた、って」

「捨てる訳ないでしょ。あなたがあんなに顔を真っ赤にして買ってくれたプレゼントだもん。捨てたりしたらそれこそ」

「当たるよ。そうだよ、罰が。はははは。って、これって有美子、

もしかして俺の願いを…」

「だって、あなたは結果的に私の理想を二つとも叶えてくれた訳だし。だから私もあと一つ叶えてあげなきゃ、この先何言われるか」

「ぐふつ。ぬおふおふお」

「何その笑い」

「くわ、げほ、げほ」

「笑いでもなくなっちゃったし」

「くわ、つお、ふおつ、ふお」

その夜は当然眠れませんでした。となぜ敬語？だって、かー、言えませんが、言えませんがよお禿げ課長。

## 第二十九章

課長、自分があとはやっておきますから。お、珍しいこと言うねえ。ほら倉田くんも色々と忙しいんだろ、たまには早く帰りなよ。えー、本当っすか、何か申し訳ないっすねえ課長。あ、ああ、でも戸村くんがそう言うなら、今日はお言葉に甘えて。そうっすね、んじゃ、お先に失礼しまーす。お疲れさま。

そういうモンである。早く帰りたい。帰りたくて仕方ない。午前中から帰れたかった。帰って、計画を立てたい。今のわたくしはおそらく式を控えた倉田くんより、政策を立て直そうと頑張っている。どこぞの党首よりも重要な計画を立てなければならぬのだ。仕事などしている場合ではないのだ。にもかかわらずわたくしつたら本日は仕事の鬼。あつちの報告書に目を通してこつちの打ち合わせの議事録を書いてあそことあそこの現場を梯子して帰ったら資料室の段ボール整理までやっちゃって。そういうモンだ。角を曲がった所に究極の楽しみが落ちてしていると知って歩いてる時ってなぜか遠回りしてみたりスキップしてみたりラーメン屋のバイト募集の張り紙をくまなく読んで誤字を見つけたり歩きながらちんちんの裏側を手を使わずに搔く方法を模索してみたりと、要するにじらしたくなるのだ。もったい付けなくなるのだ。リスクを乗り越え困難に打ち勝ってワクワクに辿り着きたいのだ。つーか少しでもワクワクしている時間を延長させたくて、でも早く角を曲がりたくて。そういうモンだ。あー働いた。お疲れさま。いつもの銀河鉄道、いつもよりちょっと遅めの自動改札、駅前ではぱつとジーンズやスカートの餃子判定を済ませてその後本当にスキップを交えながら小太りマンシヨンを大幅に回避するルートをルンルン歩きしてコンビニでガリガリ君子ヨコ味を3本買ってたがいまあ、琴美ほーらお土産だぞう。うわ、どしたの気色わる。って何だその言い草はっ。

相変わらずどれが自分の娘の鼻だか口だか分からない暗闇の中の



ベッド。琴美の枕の4分の3以上はぬいぐるみの物となっている。まあでも気持良さそうな寝息が聞こえるのでわたくしは娘の爆睡を何とか確認。おやすみのキスは…まあいいや、とりあえずこのタヌキで。

ぼちゃん、と遠くの方で。有美子風呂。入浴有美子。うおりやつとユニットバスの扉を押し開けて尻にダイレクトタッチしたいのを抑えてわたくし、リビング略して台所で滝川クリステル。んぬぬ。でもいいのである。夫婦は滝川クリステルを振り切ってダイレクトタッチできるから夫婦と呼べるのであってそれは免罪符であってダイレクトタッチのためだけに男は結婚するのであってなぜなら滝川には所詮ダイレクトできない訳でだから結婚するのよ、だから生きるのよ、と月曜日の夜にこんなハイテンションになったのは初めてなのでなんか緊張。意味もなく冷蔵庫の扉を布巾で拭いちやったりして何だこれは。様々な紙片を磁石で貼ってそれがぴらぴらとどこんちの家庭でもそうなのか冷蔵庫の扉は紙片がぴらぴらなのか。PTA連絡網、4年2組時間割表、PTA年間行事表、児童館年間行事表、プールの前の検温シート。くおう、真夏だと言うのに有美子多忙。琴美も多忙。琴美、か。児童館年間行事表。イモ掘り大会、お花見遠足、ハゼ釣り大会、お化け屋敷。ハゼを釣るのか、小学生の分際で生意気な。8月30日、こんな夏休みの最後の最後にビッグイベント開催か。児童館。生意気な。って30日。来週の日曜。かちゃ。あーいい湯だったあ。蓋開けといたよ。誰だあんた、って感じのすっぴん有美子。ではニュースフラッシュです、と滝川の顔う、うとう。とりあえず目と口と鼻の穴の数は一緒だ、よし。何がよしなんだ。そういうモンだ。

ねえ有美子。このハゼ釣り大会って琴美行くの。ああ、申込みしてたみたいよ。みたいて、有美子は。私は行かないわよ、だってこれ児童館が主催だもん。有美子シヨートヘアをバスタオルでごしごし拭きながら冷蔵庫を開けて午後ティー炸裂。ハゼ釣りってどこまで行くんだろ。あーなんか多摩川の上流の方だって言ってたよ。

多摩川？じゃ、一日掛かりか。そうなの、おかげでこっちは日曜日だつてのに早く起きてお弁当作りよ、やんなっちゃうなあ。わたくし有美子の声を聞きながら自ずと思考が時速二百キロでいるは坂爆走。そしてこれまた冷蔵庫の扉に貼ってある、ファミリースターの付録で付いていたドナルドのミニミニカレンダーを凝視して。

「嫌なことばかりでもなさそうだよ」

「何が」

「絶好の日じゃん」

「だから、何の…あ」

「琴美が一日お出掛けつて日、滅多にないんだろ。行けるじゃん。」

この日しかないよ。この日に行こう有美子。すいちゃん履いて」

わたくしは思わず指で30という数字の上をばんばん叩いてしまった。有美子の理想の指で。

「えー」

「えーじゃない。行かつて決めたんだろ。よし」

赤ボールペンでカレンダーに丸印。よし。

「ちょっと。琴美が見たらこれ何の印？つてなっちゃうじゃない」

「ならないよ。この日を逃したらもう俺たちにチャンスは訪れないぞ。8月30日。うーんいい日取りだ」

有美子、丸印から数字を逆方向に指で数えて何やら煩悶する仕草。

「えー、あと5日しかないじゃん。待つてよ。急過ぎ」

「急なことあるか。俺はただだけ待ったと思ってるんだ。いいから有美子、この日に行こ。お願いだよ。あそうだ終わったら帰りに美味しい物でも食べよ。とにかく最高の日にするから八ゼを十万匹釣るより楽しいから。だって俺は俺だけが楽しむんじゃなくて有美子にも楽しんで欲しいんだもん有美子にもっともつと自分のことを好きになつて貰つてもっともつと自分のからだを…、あー晴れたらいいね。でも雨は雨でもいいか。雨の中のすいちゃん。水も滴るいいお尻。つーか雨だったら八ゼはどうなるんだ？あ、有美子、有美子、化粧しなくても可愛いよ。だからさ、ね、ね、30日、ね」

「あのさ」

「うん」

「血管盛り上がってるよ、額に」

「あーん、血管はどうでもいいんだよ。でもキモかったら沈めるよ、写真が撮れるとなっっちゃ幾らでも血管沈めるよ、あー俺何言ってるんだ、だってまた行かないって言われそうな気がして怖いんだもん」

「分かったから」

「え、え、分かった？行く？行く？行くく？」

「行くから」

「ど」

「来週の日曜、ね」

「ずん」

「頑張ってみるから」

「ぐ」

「5日間で」

「ひゃ、ひゃったあーっ。うおーっしゃあっ」

もうわたくし、細胞の一つ一つがマジンガーZになってそいつらが全員一斉に無軌道な方角へロケットパンチを乱射している状態となった。血管どころの騒ぎではない。今だったらわたくしの鼻息で軽自動車くらいは動かせる。そう思った。この日を何度夢見たことか。この日を迎えるためにわたくしは生きてきたのだ。これで日曜日になって本当に外でカメラを構えて目の前で有美子がドバツとなったらわたくしのからだはどのようなのだろう。うっ、待てない。乱射しそうだ。うぬぬ。日曜日。あと5日。ぬうう。どうしてくれる。耐えねば。このロケットパンチ感を。頑張れわたくし。ファイトファイト。しかし5日間で何を頑張ると言っただ有美子は。

## 第三十章

火曜日もわたくし仕事の鬼状態で家屋調査会社との打ち合わせ、特記仕様書の作成、折衝記録簿の作成、補償金積算書のチェック、とイカフライ弁当も食べずに圧倒的な労働力の中に頭脳とからだを埋没させた。禿げ課長は目を丸くしてわたくしの働きっぷりを称賛し、倉田くんは辟易した顔で戸村さんボク何かしました？と意味不明の質問をした。水曜日も更にハイペースで仕事をこなしたわたくし。いかん、このままだと東京都に表彰されてしまう。帰って夜。パソコンを点けてお気に入り、業務資料、アウトドアの館、とクリックした所にドアがカチャツと開いてパジャマ姿の有美子が入って来た。汗を掻いている。時計を見たら0時3分。つーか有美子一時間以上も風呂に入ってたのか。何をやっていたのだ。凄い汗だよ。うん、ちよつとクールダウンさせて。悲しいかな我が家のリビングのエアコンが今年は猛暑でとうとうイカレてしまい、素直に作動するのはこのわたくしの部屋にあるエアコンだけとなっているのだ。あー涼しい。有美子が喜んでいいのか悲しんでいるのか分からない表情で、四角い箱がのべつ幕なしに噴出させる冷風を全身で浴びる。まあ構造的に悲哀が分かりにくい顔なのは前からなのだが、最近その埒輪的テイストに守って欲しい感が漂うようになった。勿論あの夜、赤だの青だのといった有美子の理想を聞いたからなんだろうが、どういふ訳かその表情を見るとあー守ってやらねば、と思えてしまう。これも一種の慣れってやつだ。と半ば無理やり嚙下させてみるのだが、どしたのわたくし、と違和感を感じずにはいられない時もある。守って欲しい。この世の全てから守って欲しい。有美子は言った。守ってくれたら私何でも言うこと聞くわ。そんなことは言っていないがそう聞こえなくもない。有美子。こう見えて本当はマゾ？わたくし、パジャマの胸の辺りがひらひらと冷風に靡くのを見ながらピンク色の心で問い掛けた。

あーまた見てる、本当に好きなのねそのサイト。見てない、見ようとしてただけだよ。同じじゃん。有美子、パソコンラックの前に移動。ねえ、一つ聞いていい？なに？あなたって、まさか変態さんじゃないよね。な、何を言い出すんだ、俺は、へ、変態なんかじゃない、何だよいきなり、びっくりしたなあもう、びっくりして思わずどもつちやっただじゃないか。びっくりして、ね。何だよ、何か文句ある？ないない。有美子の短い髪の毛からリンスの香り。そう言えば最近病院行ってないね。上野の？うん。何か気が滅入っちゃうんだあそこ行くと。そう。俺がどもってるの、恥ずかしい？あなたは？俺？恥ずかしいって思う？いや、俺自身は思わないけど、そのせいで有美子や琴美が他の人から変に思われたら嫌だな、お前のお父さんへん、とか、どもり亭主の女房だ、とか言われたら俺、自殺したくなるよきつと。あーそれは大丈夫、そんなこと言われたいし、もし言われても私たちなーんにも感じないし。本当？本当よ、だからあなたが気にする必要全然なし、それより本物の変態だったら私そっちの方が恥ずかしいよ。そう言ってる有美子ちらっとパソコンの画面を見る。そうか、そうだよ、安心して、俺は絶対に変態なんかじゃないから、これだつてさ、この、アトドアの館、これを今開いたのも日曜日のためにその、撮影場所とか、上手く撮るテクニクとか、何か参考になるものはないかと思ってるだけだもん、あ、有美子マジでどうしようか、場所。任せるわよ、任せるけどせーったいに誰もいない場所にしてよ。ああ、それはそうだね。あと、いやらしいポーズは私、死んでもしないから。分かってる、俺もして欲しくないよ、有美子にそんなポーズ。そう？良かった、あとね、脱ぐのは絶対にイヤ。ええっ？あああれよ、つまりブラとかパンツを脱いで。ちよつと待って、そこまではいいんだよね。いいわよ。良かったあ、そうだよ、だってそうしないとすいちゃんを履く意味がなくなっちゃうじゃん。分かってる、だからパンツまではOK、それ以上はNG。よし分かった、それ以上は求めないよ。有美子はすすーと猫の背中が抜けるような軽い笑顔を見せて、再び視

線をパソコンに移した。ありそうなの？何が？だから、写真技術の参考事例。あ、ああ、あるかな、ありそうじゃん、そうだ、見てみようか二人で。うん、いいよ。カチツ。おお、これいいじゃない、この肌の色、芸術的じゃん。そうね、でも明る過ぎじゃない？これじゃ後ろの壁と色が被っちゃってからだの線が見えにくくなってるよ。そうか、言われてみるとそうだな、んじゃこっちは？カチツ。うわ船の上じゃん。かあ、いいなあ、卑怯だよこんな絶好の場所できつと金持ちなんだろうね。そうだな、マイ・クルーザーなんてどつかの社長とかしか持ってないもんな。でもこの人、結構歳いつてそうよね。本当だ、頑張ってるな、ノーパン赤ミニ赤ハイヒールなんてこの設定撮ってる方も相当のオヤジだよ。そうなの？分かんないけど。カチツ。あつ、これどこだあ。すごい、駅のホームじゃない、後ろに人写ってるよ。本当だ、よく撮ったな、つーかよく脱いだなここで。こういうの私イヤよ。分かってる、有美子にはさせないよ。カチツ。何これ、凄くない？この水着、透けちゃってるじゃん思いつ切り。うん、これどつかの高級ホテルのプールだなきつと。何だ、これも金持ちかあ。金持ちに多いんだよこういう趣味はそうなの？そうだよ、金持ちはこうして自慢したがるんだ、俺はこんな場所で女にこんな恰好させられるんだぞ、つて。あなただつて自慢したいんでしょ。そう、俺も自慢したい。いいなあこのヒト、こんなに痩せてて、私じゃ自慢にならないね。そんなことないよ、有美子の方がこのヒトよりずっといいさ。本当？本当だよ、こんなペチャパイでこんな線みたいなのがビキニ着たって痛々しいだけだよ、おっぱいはこうしてまあ膨らんでなくちゃ。やだ、どこ触ってるの。だつてえ。カチツ。わっ、デパートの屋上だ。くわー、こんなに人がいっぱいいる所で全裸かよ、チャレンジャーだなあ。これつて、いいの？通報されたら捕まるわよね。うん、だから一瞬でドバツと脱いで撮って速攻で退散するんだろうな。でもほら、3枚もあるよ、後ろからの写真も。本当だ、よく撮ったな。ひえーヤバイよーみんな見てるしほら。有美子が興奮してどうすんの。あ、そうか、

てかさつきからどこ触ってんの。え、いやその、この写真のお尻とかもさ、こうして見ると大したことないじゃん、と思って、垂れてるし。そう？そうだよ、このさあ、お尻の、何っーの、ここ。やーだ指で押さないで。あ、ごめんごめん、この付け根の部分がさ、微妙に凹んでいるのが何か貧相に見えるじゃんこの人。そうかなあ、影になつてるからそう見えるんじゃない？うん、確かにこれが曇りの日だったらまた違うんだろうね。日曜日、天気はどうなのかな。晴れるみたいだよMSNの予報だと、でもどんな天気だって有美子のお尻の方がこの人のよりいいに決まってるよ。そうかなあ。そうだよ。ねえ、じゃ、あれ見せて、私のその、すいみつとうの写真。ああ、ラビットさんね、ちよつと待って。カチツ、クルクルクル、カチツ。あつた、これでしょ。うん。ほらあ、有美子の方がいい形してる、分かるでしょ。うーん。分かんない？じゃさっきのデパートのに戻すよ。カチツ。クルクル、カチツ。これだぜ、このへつぴり腰。うーん。ね？すいちちゃんとは比べ物にならないでしょ。……っーかさ。うん。これって恥ずかしいよね、やっぱ。何その初心に戻る的な発言。だつてえ、こんな、お外でさ、太陽の下でさ。だからいいんじゃない、太陽の下だからいいんじゃない。だつて、お外で、服着てなくて、こんな。有美子も日曜日にそうなるんでは。そうだけど、こんな見てるし、いっぱい。有美子はちゃんとだーれもない所で撮るから平気だよ、約束しただろ。本当？本当さ、大丈夫だよ。こんな、こんな……。有美子は大丈夫。こんな、だつてこんなだよ、恥ずかしいよ。大丈夫、有美子には恥ずかしくさせないから。本当？平気？平気だよ、恥ずかしくさないよ。だつて……。有美子、安心しろ、誰も見ていないから平気だ。だつて、本当？ねえ恥ずかしい？大丈夫、俺に任せろ。本当？私、人に見られたらやーよ、こんな……。こんな……。んねえ、どこ触ってんの、何触ってんのよあ。

### 第三十一章

木曜日は朝から雨。佃煮のような雨。日暮里で乗り換えのため駅の階段を上っていたら、大群衆の中にとびつきりのぶるんな尻を見つけた。黒のぴたつとしたスリムパンツ。そこに内部からもわつと膨らんだ、できたてホヤホヤなピザまんって感じのぶるんが二つ。ぐひゃあ。堪ないぜ今日は朝から。山手線のホームに立つぶるん。うづぐじい。そんな、朝焼けの光の中に立つ影はミラーマンミラーマン的なわたくしの胸の躍動とは裏腹に、ホームの反対側で雨粒が激しく擁壁を叩いている。やがて肉と水分をすし詰めにした電車が到着する。電車も激しく叩かれて激しく濡れている。何キ口もの肉が降りて別の何キ口もの肉が同じドアから乗り込む。わたくし、勿論ぶるん尻と同じ扉から濡れた電車へイン。わあ、押される押されるうと大袈裟に肉どもを押し退けて払いよけてぶるんの背後になんとかピタ。後から後から肉どもが乗り込んで来て、押されて押されて呼吸は全て鼻息に変わり。発車しまーす。ぐらつ。うわーお。傘を持った手はさすがに吊皮には持つて行けないなあ、うーん、と下に置いたままぶるんの位置に高さを微調整。ぐらつ。わわ。密着肉の集団重力移動。危ないしかし捕まる所がない。ので押されて押されて掌ではなく手の甲が、傘を握った手の甲が白いぶるんにぺちや。指は伸ばしちやだめだあくまでも傘を持ったままの状態で今わたくしの右手の使命は傘をしつかりと離さず持つていること。わたくしは紛失しないように持つていただけだ。傘を。なのでこの手の甲のぺちや、は不可抗力。ぬわあ。ぺちや、の後にぼよん、となつて、ぶるん。ぶるん。何なんだこの尻は。この柔らかさは。この温かさは。圧倒的な存在感は。こういう尻を持つた女性はそれだけで存在の意味がある。この尻があるだけで、世界どこへでも渡つて行ける。凄い物体だ。この星で最も有益且つ貴重な財宝だ。劣悪な餃子が横溢するこの世界でこの尻はどういう



育て方をされたのだろう。どうしたらこんな見事なピザまんぷるるんが仕上がるのだろう。この角度の隆起は昨日今日の努力で作れるものではない。両親は素晴らしいよ。さぞかし立派な親なのだろう。施設育ちじゃクリームは塗れるがこのピザまんの生成は無理だ。そうか。琴美、将来はこうならなくちゃだめだ。俺と有美子はこうなるように育てなきゃだめなんだ。娘を持つ親はみんな、そこに全力投球しなきゃいけないんだ。それが親の使命なんだ。

その夜、琴美とテレビを見ながら有美子特製豆腐ハンバーグ。琴美は相変わらずわたくしが何を言っても視線はテレビとハンバーグの往復のみ。まあ父親離れが始まるのが丁度この年代だと聞いているのでそれ程へこみはしないが、正直微妙にム力つく。ちよっと前まではおとーしゃん、おとーしゃんって甘ったれてきたのに。琴美、塾は忙しいか。別に。ハンバーグ。今、週に何回行ってるんだっけえー、3回だけど。ハンバーグ、ご飯。他にやってみたい習い事ってあるか。別に、あーピアノなら習ってもいいかなー。味噌汁。ピアノはお母さんに教えて貰えるだろ。そうだけど、フーカフツーにもう教えて貰ってるけど。じゃあいいじゃないか、こうして先生がうちにいるっていいなあ。琴美、得してるなあ。違うよ、マリポンとかユリコちゃんとかと一緒に習いたい。何だそれ。何だって何よ、友達だし、てかユリコちゃんはバレエが重なった曜日は無理だし。ハンバーグ立て続けに3口。そうか、バレエか、琴美はやってみたって思わないのか、バレエは。別に。何で？いいじゃないか、お父さん月謝出すぞ。だって塾と思いつ切り曜日重なってるし。じゃ塾の日をズラせばいい、何なら塾を一日削っても。だめよそんなのと有美子が口を挟む。今の時期に遅れを取ったら後で取り返しのつかないことになるのよ。そうか。わたくし、お茶ズビズビ。じゃあお母さんと一緒に美容体操を始めろ。何それ、超イミ分かんないし。いや、勉強ばかりじゃなくて運動もした方がいいってことだよ。だからって体操？そうだ。なんか、イタくない、それ。ちよっと琴美、どういう意味よ。ぬわっ、有美子マジ怒りの埴輪ビーム炸裂。いか

ん、わたくしが振った話題によって親子の絆に亀裂発生。あはは、琴美にはまだ早いか、お母さんの体操は、よし分かった、じゃお父さんがダンスを教えてやろう。えー、お父さんダンスできるの？できるさ。へえ、何ダンス？まあお父さんが一番得意なのはあれだな、茶箒筥。そして長い長い無音状態が続いた後、豆腐ハンバーグと我が家の団欒は静かに自然消滅した。

風呂後、髪を拭きながら有美子が今夜もわたくしの部屋に入ってきた。ねえ、場所決まった？撮影の？そう。うん、今日もずっと仕事中に考えてたんだけど。何よまだ決まってないの。いや、候補が幾つか挙がって今絞り込みをしてるトコなんだ。絶対に人が来ない所よ。わ、分かっているさ。ちなみにどの辺り。ああ、やっぱり近場の山の方とか、あと萎びた海岸とか、あるいはでっかい工場や倉庫の裏とか、ほら日曜は休みで人がいないだろ。いやよ、建物があるってだけで人の気配を感じちゃうもん。そうか、やっぱり建物がない所がいいか。うん、それでいざという時の隠れる場所がある所。ほうほう、じゃあ海はまずいな、隠れる場所がない。そうね。それとさあ有美子、角度つても重要だと思うんだ。角度？うん、つまり高いか低いかの問題、人間の視線つて高い所と低い所があったら、なぜか低い所へ最初に向くモンなんだよ、そう思わない？んーそうか、そうだね言われてみれば。だろ、きつとさ、人間はみんないつも見下ろしたがつてるんだよ、だから例えば掘り鉢状の土地の底の部分なんて絶対にだめだよ、なんか視界が塞がれる分隠れたような気になっちゃうけど、それってどこからでも見下ろせるってことじゃん。当然じゃない、自分の視界が塞がれてどうすんのよ。その通り、だからそう考えるとね、絶好の場所つて小山の頂上なんだ。えー、頂上なんてやだ、注目的じゃない。逆だよ、いいか、さっきの掘り鉢状の土地をひっくり返してみて。ひっくり返すの？そう、プッチンプリンみたいに、そしたら人の視線つてまずその傾斜の部分に目が行くよね、それで次に登り口を探す、その時はまだ頂上なんて視界に入らない。うん。やがて登り口を見つけてゆっくりと登

つて来る、俺たちは頂上にいる、先に気付くのはどう考えても俺たちだ、俺たちは頂上で見下ろせる位置にいる訳だから。そうか、そうだね。人が来ても先に気付くから慌てずにボタンが留められる。ボタン？ワンピースのボタンだよ、前開きの。衣装までもう決まってるの。当然さ、俺はこれでも仕事のできる係長なんだよ。はいはい、で、何、ワンピースを着るの、私。そうさ、前開きのね、これは撮影には絶対不可欠なんだ、ぱっと広げてぱっと閉じられるからなるほど、って私持ってないよ前開きのワンピースなんか。持ってなかったつけ。ないよお、あるのはみんな横とか後ろとかでしかもファスナーだし。そうか、じゃ土曜日に二人で買いに行こう。えー、やだよう間に合わないよう今すぐ欲しいよう、買って来て。何を言い出すんだ、こんな時間にやってる店なんかないだろ。やだやだ、今すぐじゃないとやだ、私行かないもん。ど、どしたの有美子。だつてえ。どーでもいいけど足ばたばたさせてやだやだ言うの、琴美でもさすがにやらなくなつたぞ。やるのっ、女は幾つになつてもばたばたするのっ。えー、初めて見たよ有美子のそういうトコ。いーから、じゃあさ、じゃあさ、明日買いに行ける？ワンピースを？うん。い、いいけど、仕事終わったらでいい？うん。電話するよ。何時くらい？んー、じゃ明日は定時で上がるから、6時くらい。分かつた、上野まで行つとくから。えー、琴美には何て言つて出掛けるんだ。明日琴美8時まで塾だもん。そうか、しかし何でまたそんなに急ぐんだ。だって、あと2日しかないんだよ。そうだけど、有美子がそんなに焦らなくてもさあ。焦つてなんかないもん私。そ、そうか、そうだね、でもちよつと何て言うかびっくりしたよ。あら、どうして？だって、いきなり足をばたばたさせて、口をへの字にするんだもん。してないよ。してたよ。してませんっ。してました。うるさいわね。かわい。え？何でもない。

本心だつた。迂闊にも。

## 第三十二章

金曜日。もうわたくし朝から胸が高鳴って、やばいこのままだとあばら骨の隙間から心臓がするつと飛び出してしまっ、と左手で胸を押さえて右手でクルクル。そんな訳で、昨日までとは一転。本日はわたくし、一切仕事をしておりまへん。とりあえず席には座っている。で何となく仕事をしているように見えている筈。だけど実は朝からずーっとグーグルマップの航空写真クルクル。山、山、でも本格的な登山にならないような小山、東京の小山と言ったらやっぱり高尾？いや待て、メジャー過ぎる、高尾なんつったらキングオブ小山人が多いに決まってる、クルクル、じゃ奥多摩の方、待てよ、琴美のハゼが奥多摩って言った、カチ合ったりしたらそれこそ惨劇、だめだめ、じゃあぐるつと方向を変えて千葉方面、クルクル、あ、あるじゃん小山、あ、この地名覚えてるぞ、二箇月前に倉田くんと研修で行った、仮設トイレのあそこだ。って研修で行って覚えてるのがトイレかよ。とほほ。そうか。そうだ。そうだった。わたくしはなぜあのトイレであんなことになってしまったのか。思い出した。あそこで初めてリアルな想像をしたんだ。そんであんなことにあの晩は風呂で石鹸付けてごしごし洗ってもなかなか剥がれなかったんだ。トイレトペーパー。そうだ。わたくしはあの時確かに夢に描いたんだ。有美子がドバツとなることを。そんでドピュ。ぬふふ。ドリームスカムツルーじゃん。そう言えばあそこ、近くに山が見えたよな。体格のいい町役場の男が運転する車から確かに見えた。あそこ、えーと、クルクル、あ、こちら辺だ、ここにすげえ道路を造ってて、ここ、こちら辺からずつと山だった。小山だった。あそこだったら行き方覚えてるぞ。モロあの駅じゃ仕事で行った手前なんとなく気が引けるのでこの隣の駅とかにしよう。2時間くらいだったな確か都心から。よし決めた。決まった。よし早く5時になれ。ワクワク。ワクワク。ぬひよひよ。

### 第三十三章

早足で階段を降りる。降りながらケータイをもぞもぞと取り出す。逸る。気持ちが逸る。よし一階だ。あ、まだここは二階か。とんとんとん、駆け降りる。踊り場ターン。遠心力。アラレちゃんだったらキーンって言ってるところ。キーン。あ、言っちゃったよ本当に一階到着。ディーゼル車規制のポスター。東京オリンピックの実現を。緑の森再生事業。覚せい剤撲滅。玄関までの廊下ってこんなに長かったつけ。っかこの掲示板、無駄に長くね？まいーや、よし電話、電話。玄関。自動ドア。ピ。アドレス帳。ピ。有美子。ピ。発。あ。開いた自動ドアから入ってきた倉田くん。今まで現場にいたのか。知らなかった。あ、戸村さん。ああ、お、お、お疲れさま。お疲れさまじゃないっすよ戸村さん、激ヤバっすよ、田端のグラウンドハイツ、今行って来たんすけど、あれ全然だめじゃないっすか、島本って人、管理組合の理事長でしょ、何すかあいつ。うわ、わたくしが先月折衝に行ったマンションだ。工事振動被害の示談交渉でわたくしが行った時は管理会社の担当者が出て来ただけだったので話はすんなりと運び、あとは補償契約書に判子貰ってお終い、の筈だった。共同住宅の共有部にちよろつと亀裂が入ったくらいでまさか理事長までしゃしゃり出て来るとは。戸村さん内諾書貰ったんじやなかったんすか？あいや、口約束と言うか、ほら相手は管理会社だったから。だめっすよ、あくまでも補償対象は管理組合な訳だし、今すぐ行って説明して来なきやまずいっすよ。いや、今日はちよつと。えーっ、だってボクまた行くのイヤっすよ。あの、ら、ら、来週必ず行くから。後ろ髪を毛穴ごと引かれる形で玄関を出て行くわたくし。ちよつと待ってよ戸村さん、何らららって、大黒摩季かよ。うわ倉田くんとうとうタメ口しかもネタ古過ぎ。っか今確かにあいつわたくしの吃音を如実に揶揄した。くそ、バカにしゃがって。とちよっぴり感じたものの実は全然腹も立ってなくてむしる倉

田くんごめんよお状態の心を引き摺ったままわたくし携帯電話をピ。  
駅までの道は約十分。

「もしもし、あ、有美子今どこにいる」

「ああ、うち」

「え、どした、何かあった？」

「うん。琴美がね、熱を出しちゃったみたいなの」

「ええーっ、じゃ今日は無理か」

「うん無理。塾も休ませたし、今晚様子見て下がらないようだった  
ら明日病院連れてく」

わたくしの中のアラレちゃんが、固いぬかるみの中へ音を立てて  
崩れ落ちる。きいん。

「何度なんだ、熱って」

「37度4分。微妙でしょ」

「微妙だな。明日も下がらなかつたら日曜日のハゼ釣りは」

「明日1日で下げるって言ってる、本人は。相当行きたいみたい」

「わたくしだって相当行きたい」

「え」

「あいや、何でも…」

「…ねえ」

「分かってるよ。そう、琴美の方が、だ、大事だよ。分かってるよ  
そんなこと、あ、当たり前だろ」

「違うの」

「え？」

「頼んでいい？」

「何を」

「ワンピース」

「へ？」

「あなたが選んで買って来て」

「ええっ、俺が？ひ、一人で、買うの？」

「そう」

「明日じゃだめなの？」

「だめ。今日欲しいの。今すぐ欲しいの」

「どうして」

「どうしてだっていいでしょ。私はこんなだから準備の時間がいっぱい要るのよ」

「こんな、って、どんなだよ」

「こんなよ。いいでしょ放つといてよ。ねえお願いだから。買って来てよ今日」

「うん。分かったよ有美子がそこまで言うなら」

「ありがと。サイズは9号。色やデザインは任せるけど、分かってるわよね、丈が短いのは私絶対やーよ。あとは文句言わないから」

「分かった。絶対だぞ。文句言うなよ」

「あと透けるような素材もイヤ。それにデブちゃんに見えるやつも」  
「言ってるじゃん、買う前から」

女物の服屋などわたくしにとってはボルネオ島のジャングルくらい生活圏から逸脱した領域である。ってことでとりあえず上野の丸井到着。ここなら有美子と先日来たばかりで何となく迷わなそう。

金曜の夜は、うは、若者だらけ。確か四階だった。あの時有美子が兎みたいに跳ね回っていたフロア。チン。エレベーターの扉が開きぞろぞろと出て行く人の中に男はわたくし一人だけ。嘘お。店内、女の園。嘘お。シチュエーション自体の恥ずかしさに加え、わたくしの脳裏を席卷している事柄がそこに罪悪感をばらばらと散布して行く。もう大変。これは大変な作業だ。軽く眩暈。わたくしここでこれから前開きのワンピースを探し、物色し、品定めし、むほほ的な計算と連想とリスク回避策の検討、ボタンの数と間隔の測定、シミュレーション、わっ誰か来たって時のボタンの嵌め方、高速テクニック、よし大丈夫いいよ外して、有美子ボタンを外していいよ、あ、まだ閉じてて、前を重ねて閉じてて、はい、今だ、広げて、あ、やっぱ閉じて、OK、はい広げて、撮るよ、撮るよ、ってうとうと、出る、心臓がバクバクしてニョロニョロと変形しながら肋骨の隙間

からつるつと外へ出ちゃう、あー店頭に並ぶ全ての服の前面がボタン留めになってるように見えちゃう、あー、Ｔシャツも、タンクトップも、ワンピースも、ってわあ、ワンピースだあ、これだあ、これだあどうしよう。売場には女性客しかない。わたくしのような中年眼鏡男が入って行き前開きワンピース下さいなんて言ったら店員は訝しがらないだろうか。お客様、これは女性用の洋服ですよ。分かっていきます。誰が着るんですか。わたくしの妻です。奥様は着て何をなさるおつもりですか。何って…。これは前面ボタンの開閉のみで着脱できる服ですよ。はあ…。つまりコートのようにぱつと開いてぱつと閉じることができるんです。そうです。ね。それを知ってご購入されると言うことはお客様、相当な工口い企みがあると思いませんか。そ、そんな、ないですよ滅相もない。本当ですか。本当です。本当に本当ですか？…ううう、すいません嘘ですわたくしの頭の中には工口い企みしかありません、という展開にはならぬだろうか。

まあでもそういうモンで下着売り場に比べたら恥ずかしいと思うのは最初だけであった。あとはスイッチさえ入れちゃえば一人だと結構入って行って手に取れるモンであーすいませんこれの9号つてありますかなんて店員に尋ねた時も別に聞かれてもないのいやあ妻へのプレゼントでしてねはははなんて言っつてそうすつと店員も何だか美談を聞いているような顔付きになってまあそれは決して嘘じやないのでわたくし変に威風堂々。心臓とか鼻息とか諸々の液体類とか、とにかくからだ中の出ちやいそいなものを必死で抑えながら丸井の中のあらゆるショップを見て回り最高の一着を選んで購入。よし。それから駅前の薬屋の店頭で携帯用虫除けスプレー大特価なるポップが目に入り、そこに書かれたアウトドア必携！との文字に心惹かれ購入。そうだよ蚊だよ。蚊に刺されて痒そうなミニ隆起が点在した尻なんて魅力が半減する。なので事前にこれをワンピースの中へシュツシュ。うわあ、このシュツシュはわたくしがやってあげよう。ぬふ。あ。携帯用ムヒ。くそう、倉田くんめ。課長に重宝



がらおって。何だか悔しいがこれも購入。よし。よしよし。

## 第三十四章

帰ったら琴美は自室のベッドですやすや眠っていた。

「お、意外と顔色良さそうじゃん」

「それはプーさんでしょ」

「冗談だよ」

有美子もう少し笑うと思っただが、埴輪のままの突っ込みでわたくし撃沈。それより有美子、買って来たよワンピース、見てよ見てよわたくし有美子の袖をクイクイ引いて部屋の外へ。もうしようがないわねえ的な有美子の表情。何だよ、頼んだの有美子の方だろ。かちや。琴美の部屋のドアを静かに閉めてリビングに移動。わたくし早速丸井の袋を開けてこそごとと戦利品を有美子に差し出した。

「うわ、ちよつと派手じゃない？」

「そんなことないさ。有美子好きだろ、レモン色」

「好きだけど。このさあ、うわ最初のボタンまでがこんなにあるよ。これって胸のところ結構開いてるってことじゃない」

「いや、それがそうでもないんだな実際。マネキンが着てたのを見たら全然気にならなかったよ。普通だよ、うん」

「本当？」

「本当さ。それに丈はほら、こんなに長いから膝までかるーく隠れちやうし」

「でも、スリットが入ってる」

「それくらい入ってなくちゃカッコ悪いだろ」

「何でここにだけフリルが付いてるの」

「もう。文句言わないって約束じゃん」

わたくしが言う和有美子は小さな唇を尖らせて眉間に皺を寄せた。蛍光灯の電球が切れ掛かっている。じいーという幽かな音を発して、顔のない焦りや色のない肌や温度のない溜息などがココナッツパウダーになって築三十年の天井からばら落ちてくる。

「ねえ有美子、着てみてよ」

「えー？今？」

「うん。だってせっかく買って来たんだよ」

「そうだけど」

「もうさ、俺さ、どれがいいかなくて店中歩き回ってさ、恥ずかしいの堪えて必死で店員にいろんな事聞いて、一生懸命頑張ってさ、サンダルのひーちゃんと合うのはどの色かな、パンツのすいちゃんとか合うのはどの色かな、ボタンの開閉が容易なのはどれかな、有美子の好きな色は何だったかな、有美子が、ラビットさんが楽しいなって思えるのは、ひーちゃんとすいちゃんも楽しいよーって笑えるやつはどれかな、って一生懸命選んでさ、俺、俺、頑張ったんだよ」

「うん。頑張ったね、よしよし」

「もしかして、やんなっちゃった？行くの」

「やんなってない」

「じゃあ、どうして着てくんないの」

「……」

「琴美が心配？」

「心配よ、そりゃ。でも」

「でも何」

「うーん」

「何だよ」

「……分かんない」

何だかんだ言っても、今までは常識的に隠しているからだのパンツを外で曝け出して写真に収めるといふ行為は幻想でしかなかった。わたくしにとっても、勿論有美子にとっても、液晶画面の中で自分以外の誰かが行なっているもしかしたら全部フェイクかも知れない事象であった。でも実際、こうしてその行為のために着用する衣服を眼前にすると、うーむ、手が震える。怖さと恥ずかしさに板挟みされて暴発寸前になっているワクワク感。むず痒い高揚感。怖いよ。確かに怖いよね、有美子。分かるよ。

「あ、そうだ、俺ファインプレーしたよ。ラビットさんの大敵から身を守るアイテムをちゃんとゲットしておいたんだ」

「何よ、大敵って」

「蚊だよ」

「蚊？」

「そう。せつかくの魅力的なお尻も蚊に刺されてぷくぷく膨らんでたら絵にならないじゃん。だからね、パララッパラ、虫除けスプレー。そして携帯用ムヒ」

わたくしのドラえもんサプライズに有美子は感激してむせび泣くこともなく特にカモメはかもめ、埴輪は埴輪のサマーナイトシティ。スプレーとムヒに有美子は一瞥をくれただけで、ワンピースのボタンの辺りをしきりに触っている。

「そう言えば有美子、大事なこと言うの忘れてた。肝心の場所だけど、決まったよ。最高の所が」

「どこ」

「千葉の真ん中辺りにある山」

「千葉？近いの？」

「バスとかも全部入れて大体2時間半くらいかな。ほら、俺6月に研修で行ったじゃん、千葉。あの近く。いい山があるんだよ」

「誰もいない？」

「いないさきつと、あんなトコ。実際俺が行った時も人っ子一人歩いてなかったもん」

「本当？」

「うん。大丈夫。だから有美子が心配することは全然ないよ。あ、琴美のことは心配だけど。俺もすっごく。ほら、あいつ何だかんだ言っただけにしてみたらじゃん。ハゼ釣り」

「そうだよね。一応、一緒に行く児童館の先生と携帯番号を交換しといたよ。何かあったら連絡できるように」

「なるほど。賢明だ」

「あの、もう一回聞いていい？」

「なあに」

「本当に、誰も来ない？」

「来ないさ。保証する」きつとね。

「分かった。寝るね、おやすみ」

「えーっ、着てくれないのお？」

「今日は…やっぱやめとく」

「じゃ、えーと、見ようよ、アウトドアの館。見てこの間みたいにいると研究しようよ」

「ごめん。一人で研究して」

有美子の語尾が蛍光灯のじいっくに重なって消える。かちや。有美子のからだもパジャマのお尻も寝室へと消える。何も残らないサマーナイトリビング略して台所。何だよ有美子。今まで見せたことのないような甘えん坊埴輪になったり、いつもの冷静沈着ニュートラル埴輪になったり、エクボレスな笑顔をとりあえず貼り付けただけの妙にへこんだローテンション埴輪になったり。コロコロ変わってばっか。てか基本が埴輪なので見た目は大差ないのだが、それにしてもここへきて変動が激し過ぎ。どしたの。月のお客さん来るにはちょっと早過ぎだし。って何気にサイクル把握。

## 第三十五章

翌朝、食卓の上に置かれた新聞を読んでいたら、琴美が部屋から出て来た。おはよ。おはよ。後から有美子も続く。あ、ごめんレンジの中の物適当にチンして食べて、私ちよつと病院連れてって来る。何だ、熱下がらなかったのか。上がりもしないけど下がりもしないでもやっぱ心配でしょ。大丈夫よお母さん。だめ、明日行けなくなっちゃうよ。そうだ、とわたくし。そうだよ琴美、明日行けなくなったら大変だぞ、だから病院行つときなさい、有美子、土曜日も病院行ってやってるのか。午前中ならやってる。そうか、じゃ早く行って来なさい。どしたのお父さん、と琴美。何が。喋り方が松岡修造になってるよ。

混んでいたらしく、二人が帰宅したのは昼を回った頃だった。ごめんね遅くなっちゃって、今日中に熱を下げたいんですって言ったらじゃあ点滴しときましようってことになっちゃって。そうか。わたくしは琴美の額に手を当てる。ちよつぴりあったかい。ねえお父さん聞いてよ、お母さんたらへんだつたんだよ病院で、私笑い堪えるの必死だつたんだから。あら失礼ね、私の何がへんだつたつて言うの。だって、どうしても今日中に、とか明日はずつと前から楽しみにしていた用事が、とか先生に超熱く語っちゃってさ、なんか女松岡修造みたいなの、松岡修子、みたいな、あははウケる。琴美つ、私は心配して言っただけじゃない、それにあんたハゼ釣り楽しみだつて前から言つてたでしょ、本当のことじゃない。そうだけどさあ、その言い方が。うるさいわね、いいから自分の部屋に行って寝なさい、ゼリー買って来てあげないわよ。やだ、買って来て、寝るからおやすみ。はいおやすみ、ってちよつとその前に薬飲みなさいつ。お母さんが寝ろつて言うから。つべこべ言わないつ。そして何だか分からないが有美子つたら無駄に狭い歩幅で台所を右往左往して、カリカリしたままソフト般若顔で買物に出掛けてしまった。琴美

とわたくし、4つの目が点。

「お母さん、今日機嫌悪いな」

「昨日からずっとだよ」

「そうなのか」

「うん」

「琴美、何かやらかしたか」

「知らないよ。つーか最近お母さんおかしいよ。おとといなんか、まだ洗っていない洗濯物をベランダに干してんのよ。私が帰って来て言うまで全然気付かなかったんだから。有り得ないっしょ。さっきも帰りのバス思いつ切り逆方向に乗ろうとしてたし」

「へえ。どうしたんだろ」

「さあ。分かんないけど、なんかすっごい焦ってるの。それで私に当たるんだもん、もう超ムカつく」

「そうか。ほらお母さん、ちよつと心配性なところあるから」

「でも熱出したの初めてじゃないし、正直八ゼ釣りも行きたいけど微妙、みたいな、そんなにまでして、みたいな」

「そんなってどんな」

「だから、マツオカってまで行きたい訳じゃないし、みたいな」

言いながら琴美、薬をオレンジジュースで流し込む。そうか。有美子どうした。もしかして写真撮りに行くことを凄く負担に感じているのかな。あるいはわたくし以上にドキドキワクワクして心臓がもう既にあばら骨から出ちゃってて。ないない。それはない。昨日だってワンピース着てくんなかったし。ひよつとして寸前になつてからやつぱり止めた、ってことにならないだろうか。こうなったら少しでも止めなくなる要素を刈り取らなくては、今のうちに。まずは何と言っても琴美の熱だ。熱なんか出してんじゃねーよこのタイミングで。出すんだったら別の日に出せ。

「琴美、薬飲んだら寝るんだぞ」

「分かってるよ」

「それとあれだ、ちゃんと布団掛けてな」

「やだ暑い」

「だめだよ。しっかり汗を掻かなきゃ下がらないぞ。パジャマがびしょびしょになったらお父さん着替えさせてやるから」

「いいよ、自分で着替えられるし」

「そうか。じゃあ早く寝ろ。あ、それと薬は水で飲め。ジュースで飲むな。その方が早く効くんだ。あとは気合だ。気合があれば熱なんか吹っ飛んじやうから」

「何このマツオカ家族」



## 第三十六章

何だかんだ言っただけでちゃんとタオルケットを掛けて眠る琴美を見ながら、わたくしは生まれて初めて手を合わせて祈った。どうかこの子を今日中に元気にして下さい。神様だか仏様だか分からないが、この、父親が病床に伏す娘を看病する絵だけ見たらなんか同情して願いを叶えてくれそうじゃん、そう思った。結局3時を回った頃に有美子、いろんな色のビニール袋を抱えて帰宅。

「外はサウナよ。琴美は」

「薬飲んで寝たよ。大分顔色良くなったみたい」

「下がるかな、熱」

「下がるよきつと」

琴美の部屋をそーっと開ける有美子。寝顔を覗き込む。うつすらと掻いている額の汗をタオルで拭う。心配そうな有美子の横顔を見てわたくしは野菜みたいだな、と思う。土に埋まっているかいなかの位置にありそうな白っぽい野菜。

「ねえ有美子、俺いいこと思い付いたんだ」

リビングに戻ってからわたくしはとりあえずそう切り出してみた。何か不安になるような話題が有美子から振られそうな気がしたから。「なあに」

「あのさ、すいちゃん撮影だけど、もしふいに人の姿が見えたら、例えば凄く近くに、そんな時の伝達方法なんだけど」

「待ってよ。誰も来ない場所でやるんじゃないか。誰も来ない、保証する、ってあなた言ったよね」

「そうだけど、でも何か突発的なことがあつてさ」

「話が違っじゃない。その突発的なことが起きない場所にしてよ」

「そんなこと言ったら、どんな山奥だつて誰かが突発的に現れる確率はゼロじゃないじゃん。だから俺はその確率が低い所を選んださ。でね、聞いてよ。その万が一来た時の、で、で、伝達方法だけどね」

「そんなの言えはいじやない。来た、って」

「おかしいよ」

「おかしい？何が」

「想像してみてよ。有美子が脱いでる。俺がカメラ構えてる。そんなにすぐ近くに人が現れた」

「いや！」

「だめ。そんな声出しちゃだめ。まだ気付いてないかも知れないじやんその人。なのにいやあとかヤバいとか着るとか隠せとか叫んだら、それこそ変に思われるよ。あー何かやってたなこの二人、ってバレバレ状態になっちゃうよ」

「やだよそんなの。絶対にやだよ」

「だから、考えたんだ。そうなたらまず声を出さないこと」

「じゃ、どうやってあなたは私に教えてくれるの」

「暗号」

「暗号？」

「正確に言うなら、指信号。いいかい、誰か来た、すぐ前を閉じる、という時は5本の指でこうやってこの形を作る」

「C？」

「クローズ」

「閉じる」

「そう。で、いなくなったらもう平気になったら指をこうする」

「…OKサイン」

「オープンサイン」

「どこが違うの」

「同じだけど」

「じゃOKにしてよ。オープンなんてなんかやだよ。やらしいよ、つか、やだよだ、誰も来ちゃだめだよ。私そんなサイン出されたって絶対モタモタしちゃうし、見られちゃうよ。あー恥ずかしいよ、だめだめ、できないよ私には」

「大丈夫。やるって言っただろ」

「できないってその前に言ったじゃない」

「何だよ今更。俺のくく、苦労も少しは分かってよ」

「勝手に苦労してるだけじゃない。てかあなたはいいわよね、恥ずかしいカツコしないし。私はさ、あなたのために死ぬ程恥ずかしい思いをするのよ」

「分かってる。だから、何かあつたら俺が守るから」

「…本当？」

「本当だよ有美子。だからごめん、人が来たらなんてもう言わない。そつだよ。楽しもう。きつとやり始めたら楽しいよ。すいちゃん、ひーちゃんと、レモン君と」

「待つて。最後のは誰」

「レモン色のワンピースに決まってんじゃん」

「あれにも名前付けたの。っーか何で男かな」

「その方が楽しいかなと思って。だめ？」

「いいけど」

「ひーちゃんとすいちゃんを履いて、レモン君をドバツてね有美子、ドバツて、たははは」

「…あなた、本当いい気なモンね」

「あ、ブラジャーにも名前付けてあげようか。でも、あ、そつだ、有美子ブラジャーだけどさ」

「うん」

「あれ持つてたよね、前ですぐ外せるやつ。あれにしようよ、当日着けてくの」

「何だよ。ブラジャーなんかいつものでいいじゃない。あ、まさか胸出してなんて言うんじゃないでしょうね」

「いや言わないけど、もしテンションが上がっちゃったら、あ、俺のじゃなくて有美子のね、有美子のテンションが上がっちゃったらそしたらどーんと、おっぱいアンダーザスカイ、なーんて」

「ならないから」

「なるかも知れないじゃん。っーか、なって欲しいなあ。ついでに

すいちゃんもつるんって」

「だからなりませんって」

「だってさ、だってさ、ほら、桃って食べる時皮を剥くじゃん。だからいつちばん美味しそうな状態を撮るためにはやっぱ、か、皮をつるんとむむ、剥いてさ」

「いい加減にしてよ！」

「い……！」

「ブラとパンツまで、それ以上はNGって約束したじゃない。何言ってるの。そこまでだって私どれだけ覚悟決めてると思ってるの。全然分かってないじゃない。私この顔よ。このからだよ。誇れる物なんて何も持ってないの。いいの分かってる。でもあなたが魅力的だって言うから、理想だって言うから、あー私より悪い人も確かにいるんだろうなあ、その人たちに比べたら、からただけだったら、もしかしたら私だって頑張れば何とかなる、って、それにそうならあなたが好き、って、それで、それで、だから、なのに、なのに何よ、すぐ外せるブラとか、蚊に刺された跡があったら絵にならないとか。あのね、蚊に刺されて膨らんだってパンツ履いてるから見えないじゃない。何よ、最初から脱がす気なんですよ。あの掲示板の人たちみたいに外で全部脱いで凄いポーズで写真を撮りたいだけなんですよ。それってただの変態じゃない。私は綺麗に撮って欲しいだけなのに。卑怯よ。あなたって卑怯よ！」

いや違う、とか待てよ、とかそうじゃないんだ、とか、とにかくたくさんのわたくしの言葉をタンクローリーで轢き潰すように抹殺しながら有美子はそのままで一気に喋ると、ボタンという大きなドアの音とともに寝室へと消えた。風圧で小さな紙片がテーブルからパタリと舞い上がり、ゆっくりと床に落ちた。琴美が飲んだ粉薬の紙だった。ちゃんと捨てとけよ。バ、バ、バカ。

## 第三十七章

そうだよわたくしは卑怯者ですよその通り、と開き直すことでしか誤魔化せない。そうでもしないと腫れ上がった後悔の念に押し潰されてわたくしは呼吸が止まってしまふ。あー何で言っちゃったんだ、あんなこと。そうだよ確かにわたくしの最終目標は太陽の下ですいちゃんを脱がせることであつてもつと言うならプリンちゃんのよつにコートを広げたら中には下着も何も着けていないからただがあつてそれが普通の外の風景にあつて普通の外の風景であるから誰が来るか誰が見てるか分かんなくて家の中には絶対にならないようなアスファルトとかコンクリートとか土とか草とか空とか太陽とかその中で生のおっぱいをうわあ四つん這いになつて生のお尻を突き出してあんな角度からこんな角度から女のナマのおっぱいとお尻が普段は絶対に存在しない風景に重なつてヤバイよ誰が見てるよ誰か来ちゃうよ、となることであつた。考えてみたらそれを有美子に願ひすること自体が稀代の難行であつたのだ。何せ有美子だ。超ネガティブ超常識人超引つ込み思索超コンプレックス抱え人間の有美子だ。でもさ、まあプリンちゃんまではいかないにしてもちよつと、チラつと、いいじゃん女なんだから、その特権活かせよ、とりあえずは丸いおっぱいとお尻を持つてる特権をさ。てな具合に軽く妄想をスキップさせて、それが結構いいところまで行っちゃったモンだから、いや、軽くなんかない、わたくし必死だつた。一生懸命だつた。残りの命を全て賭けるくらい。でも、くそう、わたくしつたら最後の最後で調子に乗ってしまった。やっぱ無理だつたんだ、最初から。ヒラメを水面に浮かせてさあバタフライで泳いでごらん、と優しく言つてもそれは所詮無理な話だ。そういうことだ。ごめんよ有美子。機嫌直してくれよ有美子。この通りだよ。わたくしは床にへたり込んで寝室のドアに向かつてそう呟いた。泣きそうになつた。実際、ドアの木目が滲んできたのでわたくしは立ち上がり、慌てて

自室に入っただけかパソコンでアウトドアの館を開いた。後悔の涙にはきつと塩酸が配合されている。机や床に落ちたらじゅわつと煙が上がって溶けるんだ。投稿掲示板力チツ。踏ん張れわたくし。涙なんか落とすんじゃない。カチツ。あ、プリンちゃんだ。あ、なくなっている。滲んだわたくしの角膜が液晶画面に張り付く。プリンちゃんの最新写真に張り付く。歩道橋の階段でドバツとなったプリンちゃんの、黒い毛が全くなかった股の部分に張り付く。ひえー。次の写真クルクル。屈んだ。M字。つるつる。ひえー。剃った。剃った。プリンちゃん、やった。剃った。つるつるだあ。次クル。うわっ、う、後ろ、犬を連れなおじさんが、すぐ後ろに、プリンちゃんその前でつるつるをドバツと。次。ぎよほほっ、コートを完全に脱いじゃったあ。犬のおっさん真横で驚愕。赤塚不二夫が描いたら絶対目玉が飛び出して。すげ。すげすげ。あっぱれプリンちゃん。反対側では普通に車の往来。わたくしがこの車のドライバーだったら確実に急ブレーキ急ハンドル玉突き事故発生。ああ、本当マジすげ。気付いたらわたくしパンツに右手を突っ込み急ハンドル急発進うわあ、見てるよ、プリンちゃん見られてるよドライバーにもおっさんにも犬にもわたくしにも、うわあ、うわあ、うわあ、こんな、どこにでもある歩道橋の階段で毛のないつるつるをうわあ、堅固化したちんちんに手で摩擦を加えるには窮屈。パンツの中だけで俺の動きを制限させないでくれ、とわたくしの右手が糾弾している。うおう、躍動する右手くんの動きを止めぬまわたくしは左手でもぞもぞとズボンとパンツをズラそうと、椅子に座ったままのケツをちよつと上げてズリズリ、目は液晶、つるつる、右手躍動、左手ズリズリ、つるつる、ズリズリ、つるズリ、おっぱい、お尻、躍動、毛のないあそこ、毛だらけの犬、摩擦、あわわ、ケツを僅かに浮かせていた太腿の筋肉痙攣、プルプル、躍動停止、とりあえずケツを椅子の上に降ろそう、あら、椅子がなぜか変な位置に、からだの重心がとんでもない方向に、この応力を支えるべき両方の手首はあるうことが揃ってインザパンツ。ぬわっ、だめだ踏ん張れない、だわわわっ。

どたっ。がしゃっ。あうっ。目ではない所から涙がドピュ。  
もろどろにでもなっちまえこの世の中。わたくしはもう、死ぬま  
で喋らない。よって死ぬまでどもらない。

## 第三十八章

ってのは嘘で、何とか有美子に機嫌を直して貰いたくてわたくしは必死に冷蔵庫からマヨネーズを取ってあげたり、ああ有美子マ、マ、マスタードの方がいいか、んいや俺が取ってくるから有美子は座ってて、はい、あ、有美子ウーロン茶お代わりする？いやいや俺がやるから、あ、琴美おかゆ食べたかな、見て来ようか、食べてあったら下げて来るね、いやいや、有美子は食べてよほら洗い物も俺がやるから、あ、ふ、風呂洗つといたよ、もうス、スイツチ入れちゃっていいかな、あーもう有美子ったらほつぺにごごご、ご飯粒付いてるよ、ってうっそーあははははは。はは。ハイ、どもりまくりで為す術もなく惨敗有美子ノーリアクションわたくし空回りフル回転のトリプルループな晚餐。テレビでは天気予報、有美子箸を持ったままチラッと画面。明日は全国的に晴れでしょう。くそう。死にたい。すべからく死にたい。追いつきを掛ける有美子の一言。私今夜は琴美の部屋で寝るから。くそう。琴美のやつこのくそ暑いのに毛布なんぞ掛けて寝腐って。なもんだから有美子さつきから何度もタオル交換したりパジャマ交換したり琴美の部屋に入り浸り。くそう。汗を掻けば治るなんて言ったのはどこのどいつだ。くそう。神様、琴美の熱はいいから有美子の機嫌を直して下さい。あ、やっぱ琴美の熱も直してくんないと困る。両方直して。明日は晴れなんだから。絶好のすいちゃん、いや、ハゼ日和なんだから。ほら月があんな綺麗に。うわ、マジだ。わたくし窓の外を見てまた泣きそうになる。満月小唄が聞こえる。



### 第三十九章

おしっこ。と目が覚めた午前三時。キュツ、キュツ。薄らオレンジに被覆された視界。起き上がるの面倒臭え。あーでもおしっこ。あー、ゆつくらひよつと。ふらつく足元。キュツキュツ。いつもは有美子の布団が敷いてある位置になぜかわたくしのベトついた枕。カーペット剥き出しの上に枕。キュツ、キュツ。一步、また一步、布団から這い出て枕を蹴飛ばしわたくしおしっこを我慢するマジンガー。有美子。やつぱりやんなつちやつた？明日行くのやんなつちやつた？いやだよ。恥ずかしいよね。琴美が心配だよ。キュツ。でも約束したじゃない、行ってくたじやない。はあ。一人で自問自答しても何も始まらない。薄らオレンジの手探りでドアのノブをかちやキュツキュ。ん？キュツ、キュツ、キュツ。何だよさつきからキュツ、キュツ、つて。床。んぬぬ。暗いリビング。5センチだけ開いたドアの向こう。明かりも点けずに音だけキュツキュツ、はあっはあっはあっ。ぬぬぬ、はあっはあっはあっキュツキュツ、はあっはあっはあっ。何だ息だ声だ誰だ暗闇の中で。わたくしは、5センチにしたまま5センチの世界をそーつとぐるーつと見渡して5センチの音の出所を声と息の出所をはあっはあっはあん、はああん。うわ、有美子の声だ、有美子何やつてるインザ暗闇。はあん、キュツキュツ。はっ、はっ、あんっ、あんっ。ここ、これは、この声は、そっだ、そっだ、喘ぎ声だ、超ネガティブ超常識人超埴輪顔有美子の喘ぎ声だ、まさか有美子、まさか有美子、一人でやつてる一人で、じ、じ、自慰インザダーク、キュツ、はっ、キュツ、はっ、キュツ、はっ、はあん。ぬおう。ダーク。ダーク。むへほ、わたくしいつしか汗ダークで見たい見たいと眼球がロケットパンチ状態で5センチの暗闇を縦横無尽にどこだ、どこだ自慰有美子、くそう、声しか、音しか、暗闇しか、暗闇、うぬ、目が慣れてきた、テールが見える、椅子が見える、床が見える、琴美の薬の紙袋が落ちた

まま、見える、闇の中に浮かんでいる、キュツ、キュツ、あ、待て、闇じゃない場所が、ベランダへの吐き出し窓の前一帯、蒼黒い光がフローリングの床を照らして、明け方の湖面みたいにつつすらと、明るく、月だ、月明かりだ、月明かりが築三十年の床を喘ぎながら照らしているんだ、って喘いでいるのは違う、有美子だ、有美子、自慰有美子、どこ有美子、ちょっとだけドアをあとちょっとキュツ、キュツ、はあ、はあ、はあん、ドア、ドアちょっと、ド、ゆ、くわ、見えた、ずわ、何だ、あわわ、床の上、有美子、の、からだ、足、上下、うつ伏せに寝た状態で片足ずついち、にと上下、キュツ、はっ、いち、につ、つまり自慰でも何でもなくそれはいつもの有美子体操なんだけどもう既にわたくし目が吸い取られ呼吸と鼓動と膀胱が機能停止。だって、だって、それはいつもの有美子体操なんだけどいつもと違うから、そこは圧倒的に違うから、だって有美子、今、月明かりの中で、5センチの中で、ぜ、ぜ、全裸だから。

それはこの世の出来事とは思えない程精美的な粒子で映し出された光景だった。例えば、って何かに例えるのも勿体ないし意味ないしだってどんなこと言ったってその例えは負ける訳だし。でもどうしようもなく例えなくなる例えばそう、月曜日の朝礼。体育館に全校生徒が集まって校長先生の話を聞いているうちに貧血で倒れてしまふ学校一美人の女の子。斜め後ろに並んでいたわたくしはあたふたするばかり。クラスの保健委員がささず歩み寄る。担任の先生も列をするすると摺り抜けてやってくる。心配そうに見守るみんな。そんなことに気付きませず校長は、あれ、校長がいらない。ステージに、あれ、誰もいない。わたくしは周りを見て息を飲む。ステージにだけではない。体育館に誰もいない。みんな消えている。わたくしと床に倒れた彼女だけ。どうしよう。わたくしは横臥した彼女の前に屈む。何かの果実のような香り。どうしよう。わたくしが担いで保健室に連れて行かなくては。彼女、目を閉じている。額がやけに白い。わたくしは彼女の顔をじっと見る。短い眉毛が疲弊した未来に抗うように揃って天井を向いている。そこにだけ脈と熱と味と

力が存在するような気がする。わたくしはポケットから五百円玉を取り出し、彼女の眉毛の上にそつと乗せる。思った通りだ。五百円玉は、沈まない。わたくしは確かめる。床に顔の側面をべちよつと着けて、肌と五百円玉の間に生まれた隙間の存在を確かめる。眉毛の力に押されて数ミリ浮遊した、その世にも美しい間隔を。今こうしてサマーナイトリビングで有美子のからだに注がれた窓いっぱい、蒼黒い月光は、正にそんな間隔で肌を、足を、太腿を包み込んでいる。キュツ、キュツ。上下する足。完全に影だけとなる微妙な角度がある。月が産毛の生えた光を有美子のからだにそつと流し込んでいる。その波紋の強弱が暗い湖底にまで伝播する。揺れている。共振作用で増幅したその振動はやがてわたくしのぬほほな視覚をどもらせる。拘泥させる。そして蒼黒い闇に満ちてくる死のソーダ水。わたくしはここまま死んでしまうのか。キュツ、キュツ。音を立てながら有美子のお尻が、陰毛が、わたくしの死に精子のような汗を搔かせる。有美子の背中にも汗が光っている。こんな熱帯夜に冷房もない部屋で規則正しく生足を反り上げている有美子。いち、に、いち、に。フローリングに裸の胸を直接押し付けて顎を少し上げ、その前で両手を組んで太腿からアキレス腱までを真っ直ぐに伸ばして片足ずつキュツ、キュツ。肩から顎から髪の毛から滴り落ちる汗の滴。フローリングに世界一美しい湖面が広がり、そこに時々謙虚に隆起した黒い影が幻のように映っては消える。その光景をほぼ真横から見ているわたくしの角膜。限りなく黒に近い青の放射。その美しさは校長先生の話よりも回りくどいスピードでわたくしの妻を、わたくしの結婚を、わたくしの生命と存在と尿意をフリーズドライした。有美子。わたくしの妻。キミのからだは今、啓示的に美しい。五百円玉を眉毛に乗せる必要もなく美しい。わたくしは思い出していた。有美子のぷりぷり動くジーンズのお尻。粗挽きソーセージを炒めるＴシャツの横から見た小振りな胸の膨らみ。いや、もつと言うなら有美子に限らず外で見掛ける様々なぶるるんシーン。ぶるるん電車。ぶるるん街道。爪楊枝でちゃんと突けばたちまち勃起花が

咲いてしまう基本アーチ型の肉パーツ。それがただでさえ神秘的な満月の光を浴びて、セックス中のやつかコンビニの店員しか起きていないような時間帯に一糸まとわぬ汗みどろ姿で見た目かなりきつそうな運動を繰り返して。ぬぬ。ここでわたくしある重大なことに気付く。あれ。咲いていない。勃起花。あれれ。どうしたものかわたくし及びわたくしのちんちん、全く堅固化してない。無反応。無拳動。無感覚。そうか。余りに美しすぎる女の裸は、花を貫通してしまうのか。花卉を穿孔して花びらを飛散させ、茎を掠めてそのまま地面に突き刺さるのだ。そこで大地の温もりに触れ、骨とか生命とか愛情とかがありがとうとかよし明日も頑張つて生きようなどといったもの、つまりぬほほんの反対側にまで先つちよが届いてしまふのだ。そうなるともういつも無軌道に充血させるあの忌わしくも愛おしい堰は完全に開くことを忘れ、わたくしはただ口を開けたまま脳味噌が堅固化していくのを見届けるしかないのだ。正直相当シヨックだ。女の裸を見て勃起しないなんて、わたくしはとうとう真の異常者になってしまったのか。こんな有美子を見て。こんな綺麗な裸を見て。綺麗。そうだ。綺麗に撮つて欲しいだけ、と言った。あの時有美子、確かにそう言った。そうか。そうか有美子、分かったぞ。あれは切実な願いだったんだ。有美子にとつての見返り。死ぬ程恥ずかしい思いをする代わりに自分のからだの綺麗さを認識したいのだ。いや、作り上げたいのだ。顔ではなくからだだったら充分勝負できる、そう思つて有美子ったらこの数日間で必死に。わあ。わたくしが散々言つちやつたから。有美子のからだは美しい、なんて確かにデブじゃないからそれなりだけど冷静に考えれば悲しいくらい平均的と言うか、いかにも日本人体型それも気持ち太目で部分的にはやや控え目な、って感じなのに。きえー。どうしょ。今更そんなこと言えたモンじゃない。よし。応えようじゃないか。有美子の勝負にわたくしも加勢しようじゃないか。有美子を、有美子が認識する綺麗さを撮つてあげようじゃないか。それが愛つてもんじやないか。そう言えば、とわたくしに記憶の断片が突き刺さる。そうだ

よそつだよ思い出したよ、わたくしが初めてアウトドアの館で見た写真。高速道路の上で、そう、水色のパンツを半分までズリ下げてあの写真を見た時確かに感じたのだ。このカメラの前で尻を出す女は何かを猛烈に愛している、と。その猛烈さが羞恥心と罪悪感を凌駕している、と感じたことを。ではどうやったらその猛烈さを手に入れることができるか。簡単だ。カメラを構えた人間がその対象になれば良いのだ。それだけで猛烈愛一丁上がり、だ。よし、愛そう。わたくしが愛せば有美子もきつと現場で猛烈になる筈。わたくしのことを猛烈に愛してくれる筈。ぬおう。よっしや。燃えてきたぜ。あれ。わたくしが思い描いていたすいちゃんドバ撮影つてぬほほんか青春ドラマ。しかも悪行)だった筈なのに。あれ、なんか健全。なんか青春ドラマ。しかもなんか哲学的。んー。んー。んー。まあいいのだ。わたくしのぬほほんは、健全で哲学的な青春なのだ。きつと。うん。うん。っっておしっこ。

## 第四十章

じわじわと尻餅をつくように目覚めるとそこには既に猛暑の朝が広がっていた。8月30日、全国的に日曜日。わたくしは便所で長い長い放尿を済ませた後、台所で有美子が淹れたコーヒーを飲んだ。琴美は食卓でスクランブルエッグを頬張っている。その額に有美子は心配そうな顔で何度も掌を当てている。どうだ？わたくしが聞くとも有美子はうーん、と首を少しひねってからまあ大丈夫そうですね食欲もあるみたいだし、と言った。どれ。やだトイレから出て来た手で触らないでよ。大丈夫だよちゃんと洗ったから。洗ったってお父さんの手何だかキモいし。おい琴美そりゃないよ、お父さんが言った通り汗を掻いたから治ったんだろ、少しは感謝しろ。はいはい、と有美子がわたくしの迷懷を遮って薬の袋とコップをテーブルに置く。食べ終わったらお薬ね。えー、もう下がったんだからいいじゃん飲まなくて。琴美っ。はぁーい。琴美、渋々従う。それにしても有美子の一喝、こわ。

お弁当入れた？入れたよ。タオルは？持った。調子悪くなったらすぐ先生に言うのよ。分かってる、じゃ行って来まーす。気を付けてね。琴美、いっぱい釣ってこいよ。任しといて。がちゃん。琴美が出て行った。熱が下がったのはきつとわたくしのお陰でもなく、神様のお陰でもなく、有美子の献身的な看病のお陰だ。窓からは朝の陽射しが鋭角に入り込んで床を這っている。梁の影が洗い物をしている有美子の踵近くにまで伸びている。この床は数時間前、湖面のように濡れていた。汗で。わたくしは白いTシャツを着た有美子の背中に言葉を投げ掛けた。良かったなあいつの熱下がって。うん、でも完全じゃないけどね、ほらあの子平熱低いから。でも下がって良かった。そうね。有美子の看病のお陰だな。そんなことないよ私ずっと隣で寝てただけだもん。嘘だ、とわたくしは声が零れそうになった。梁の影が徐々に台所から遠のいてゆく。太陽が空の中で急

激に角度を変えている証拠だ。せつかちな奴め。太陽は決して昇つてなんかいない。東の空からゆつくりと沈み始めているだけだ。付けっ放しのテレビがどこかの国の内乱を報じている。この争いにより290人も一般市民が命を落としています。そうか。凄い状況だな。でもこつちの状況はもつと凄いぞ。なんせ琴美が出て行つたのだ。予定通り出掛けて行つたのだ。しかるに二人きりだ。わたくしと有美子、朝から二人きりだ。むふふ。よし、ここは分かっている。でも慎重に。わたくしは窓の外を見て言った。

「今日は絶好の天気だな」

「そうね」

「ハゼ釣りに、すいちゃんの撮影にも」

「…」

「有美子。俺、綺麗に撮るから。絶対綺麗に、が、頑張るから」

「…」

「勿論、アードになれとか言わないから」

「当たり前でしょ」

「あは、はは。そうだよ、当たり前だよ。いや、もしかしたらまだ気にしてるんじゃないかと思って。でも大丈夫。俺絶対に言わないよ。約束する。あの時は本当、どうかしてたんだ。だからさ、だから有美子、行こーね。すいちゃん履いて、ひーちゃん履いて、あと、あと何だっけ、えーと」

「何時に出るの」

「え？あ、えーとね、えーと、琴美帰って来るの何時の予定だった」

「夕方5時って書いてあった」

「じゃ、それまでに帰ってなきゃまずいから、逆算して…おお、そんなにのんびりしてられないぞ。9時には出よう。出られる？」

「…」

有美子、蛇口を捻って水を止める。そしてなぜか唾を飲み込み、流し台の淵を二本の指でぼんぼんと弾いてそのまま寝室へ消える。何じゃい人が聞いてるのに答えもせず。まさか、何かまたわたくし

怒らせた？いやいやそれはない筈。もう女は訳分からん。いいからドバツとやってクネツとなつてパシャツて収まればいいんだよこのアマ。と、もうわたくしさすがにヤケ気味になり絶対に口にできない台詞を頭の中で大炸裂。あーすつきりした。ってそうか、カメラの準備だ。やべ、マジでのんびりしてられない。わたくし慌てて自室に入り、入念にチエツク。むひょう。カメラは今年購入した最新型だぜベイベ、キャノンEXYデジタル3000IS。1470万画素だぜ。買った時はまさかそんなものを撮ることになるとは思つてもいなかった。ぐほほ。そんなものとはどんなものかつて？それはお前、ここじゃ言えないよ。シャッターを押してからのお楽しみだよ。あ、お前にも名前付けてやろうか。やつぱ止めた。カメラはカメラだよ。名前がいつぱいあつても覚えきれないし。実際あのワンピース、なんて名前付けたんだっけ。まあいいや。カメラの電池は昨日充電したばっか。よし完璧。それからわたくしはパソコンを立ち上げ、乗換案内のページを開いた。目的地、えーと何だっけ、あそうそう、上総鶴舞、到着時刻、んー、11時45分、と。ぎえ、9時8分発の電車に乗らないとまずい。ひえー。急げ有美子。入念に化粧などしている暇はない、どうせ顔は写さない訳だしそもそも増輪…カチャ。んがっ。突然開くわたくしの部屋のドア。例によつて何の予告もなく入つて来るワンピース有美子。わたくしが一昨日丸井で買った、有美子がラビットさんに変身するための衣装。を着て有美子、イン。イン、イン。わお。化粧完璧真つ赤なルージユ。

「うわー、すっごい似合つてるよ有美子」

「そう？」

「っーかそんな真つ赤な口紅、持ってたんだ」

「だって、どこかにアクセントを付けないとまるでワンピースが歩いてるみたいでしょ」

「そうかな。そんなに派手かな」

「派手よ」

言いながら有美子、窓に映つた自分の姿を恨めしそうに見る。そ



の唇の方が派手に見えるよ、とはさすがに言えない。彩りがそのまま違和感に繋がる造りの顔。たはは。まあいい。今日は何でも許す。「どうよどうよ、そのボタン。外しやすい？いや、留めやすい？」

「どっち」

「どっちもだよお、そこが一番気になる」

「あのね、ちよっと見てくれる。これさ、穴塞いじゃった。ね？」

「本当だ、でもあれ、ボタンが」

「上から縫い付けたのよ」

「ええーっ、じ、じゃ、どうやって広げ…じゃない、着たの？」

「だからここ見てよ」

「う、うわ、何これ、マジックテープ？」

「そう」

「うわ、すご、すご」

「これなら簡単でしょ」

「うん。すご。いつの間に。有美子すご。っーか有美子、行く気満

々だったんじゃない」

「そんなことないもん」

「ええー、だつてさ、有美子ったら…、あ、いーや、何でもない」

「何よ」

「何でもないって」

「なあに。なーんか気に入らないなあ。(着ているワンピースに向かって)ねー、やらしいわよねーレモン君。このおじさん自分で付けておきながらキミの名前すっかり忘れちゃってるのよ。本当最低でしょ」

「そつだ、レモン君だ」

「思い出した？」

「思い出したよ、レモン君ごめんな。あ、ねね、せつかくだからさ、そのリニューアルしたレモン君、ドバツと広げてみてよ」

「えー、やだよ」

「どうして。リハーサルって大切じゃん。ほら、一回でいいから」

「やです」

「お願いだよ。いいじゃん、へ、減るもんじゃないし」

「減っちゃうかも知らないもん」

「何が減るんだよ。減ったら困るよ。じゃあさ、すいちゃんを履いてるかどうかだけちよつと確認させて」

「何よ疑ってるの？ちゃんと履いてるわよ」

「疑ってないよ。ないけどさ、あーんもう見せるーっ」

「きゃああ、何すんのよー」  
「待てえ」

「誰か助けてえ、この人ヘンタイですう」

「ヘンタイだぞうわっはっは。ってそうだ、こんなことしてる場合じゃなかった。急ごう有美子。9時8分の電車に乗らなきゃまずいみたいなんだ。だ、だから出発時間30分繰り上げ」

「えー、早く言つてよもう信じらんない。もうもっつ」

「隙あり！」

「きゃっ」

死んで下さいな290人。世界のバランスはこうして保たれていく訳ですから。

## 第四十一章

幾つかの路線を乗り継ぎ、幾つかの川を渡つて最後は田圃の真ん中を走る単線の電車で我々はその駅に到着した。よし、ここからはバスだ。一時間に1本しか来ないバス。逃したらアウトだ。勿論、時刻は事前に調べておいた。あと10分足らずで来る筈だ。うわあどうしよう。ワクワクし過ぎてうまく呼吸ができない。さっきから苦しくて苦しくて堪らない。まるで遠足の前の日にお菓子を買いに行こうとドアノブに手を掛けた瞬間が束になつて心臓を締め付けているみたいだ。有美子。うう。苦しいよ。暑いよ。ひっきりなしに汗が垂れるよ。有美子疲れてないかい。お腹すいてないかい。大丈夫。そうか。あ、バッグ持つてあげるよ。自分で持てるよ。そうかじゃ歌でも歌おうか、おお牧場はみどり。ちよつと静かにして。あはい。名ばかりの駅前ロータリー。夥しい数の鳩がアスファルトの上を堂々と占拠している。隅っこに売店が見える。そうだ有美子アイスでも買ってやろうか。要らない。何で、喉乾いてない？大丈夫。鼓動がじわじわとからだの外から歩み寄ってくるような胸騒ぎ。目の前にいるのが有美子であつて有美子じゃないような気がする。見慣れないワンピース姿。見慣れない唇の色。そうだよ。リップクリームに毛の生えたような物しか持つてなかつたくせに。いつ買ったんだあんな真つ赤な口紅。バスが来る。小さなロータリーにバスが入つて来る。億劫そうに飛び立つ鳩の群れ。オレンジと白の錆びた車体。銀縁眼鏡の痩せた運転手。大きなハンドルを懸命に回して停留所到着。乗り込む。我々の他に乗客は3人。いずれもお婆さんいずれも鳩顔。整理券を引き抜いて後ろから二番目の列に座る。オイルの匂いが充満している。有美子が窓側。出発。バスが揺れる。わたくしの肩から下げた鞆の中でカメラがゴロンと移動する。くそう。意味もなくそこらじゅうを跳ね回りたい。カラカラに乾燥した昆布が何かのはずみで喋り出したような声の車内アナウンス。毎度

ご乗車ありがとうございます。このバスは高滝ダム記念館経由養老  
霊園行きです。お降りの方はお手元のブザーを押して下さい。次は  
八坂公民館前、八坂公民館前。うお。久々だ、この風景。田圃、山  
小さな川と橋。倉田くんと来た時もこんな濡れた泥の匂いに空気が  
包まれていた。あぜ道や4車線のアスファルト道路、錆びて読めな  
い胃薬の立看板やトマトの沿道販売所などを遣り過ぎ、やがて目  
的地の停留所がコールされる。ブザーを押す。次停まります。キキ  
ーとブレーキが軋む。座席を立つて前の降車口へと向かう。3人の  
鳩老婆どもが一斉にちらつと我々の顔を覗き込む。何だよ。我々は  
何もやつちやいないぞ。まだ。ぬひひ。運転席の脇にある料金ボツ  
クスに小銭と整理券を流し込む。銀縁眼鏡の奥で運転手の細い目が  
それを確認する。道路に降りてバスが行き過ぎると、そこには田圃  
と林に囲まれた気怠くてヤバそうな光景だけが残った。蝉の鳴き声  
が隣の祭囃子みたいな距離感で低空を漂っている。太陽が照り付  
けるバス通りをしばらく歩く。小さな子供を乗せたワンボックスカ  
ーが我々を追い抜いてゆく。中から楽しそうな嬌声が一瞬漏れてす  
ぐ消える。十字路。交差している幅広の道路はまだ工事中。あ。点  
灯していない信号機。あつたあつた。こんなのあつた。さらに進む  
道幅が狭くなり、沿道の林の緑がぐつと濃くなる。上りの傾斜が次  
第にきつくなる。時々大型のダンパーが坂を下りて来る。我々を  
見つけると慌てて徐行する。有美子危ないよ、ほらもつとこつちに  
寄つて。林がちよつとだけ途絶え、大量の縦長パネル鋼板で周囲を  
覆った何かの処理施設が現れた。腐朽したゲートには嚴重に鎖が掛  
けられている。中から男のダミ声でガルネクの歌。パネルの隙間か  
ら見える半裸の金髪男。極端に車高の低い外車を大声で歌いながら  
洗っている。有美子ひーちゃんスピードアップ。そそくさと通り過  
ぎて溜息。不安そうな横顔。殺すぞ金髪。わたくしの有美子を不安  
がらせおつて。わたくしの大事な被写体を。敷地境界辺り。右に小  
道が伸びている。小さな木製の標識が立っている。音森山林道入口。  
音森山の上に平仮名でおとずれやま、とルビが振ってある。ここだ。

つーか、おとずれやま？おんしんやま、じゃなかったのね。有美子、この林道に入るよ。うん。アスファルトに別れを告げて我々は土の道へ。傾斜がさらに激しくなる。大音量のダミ声ガルネクが遠ざかりパネル鋼鈹はあつと言う間に見えなくなった。もう辺りは鬱蒼と茂る木々。背の高い雑草。砂利も車輪の轍もないノーマルな土の道。きやつ。有美子の小さく短い悲鳴。どした？今、その草の下でガサゴソって。どれ、あ、蛙だよ。蛇じゃない？うん。良かった、私蛇だめなの知ってるでしょ。勿論さ、安心しろ、蛇がいたら俺がすぐ追っ払ってやるから。本当？信じていい？信じて。分かった、あ、待って、先に行かないで。よし。わたくしの脳裏に明るい展望が一閃する。有美子の理想は守ってくれる人、だ。世界中の全ての物から。守ってやるうじやないか。それによってわたくしは立場上有利になる。シャッターを押す人間は少しでも上に立つことが大事なのだ。わたくしはプリンちゃんの写真を見てそのことを学んだ。今ではつるつるになったプリンちゃんからはいつも立場上の劣勢さが沸々と湧出している。しかも彼女はそれを望んでいる。楽しんでる。プリンちゃんだけじゃない。大抵の女はそうなんだ。望んでいるのだ。きつと。よし、このままわたくしは上へ上へと立場をスライドさせる。サディストで眼鏡男で役所勤めでA B型の吃音者。うわあ、何だかハードボイルド。そして真夏の山中で妻を守る休日の四十歳。てか有美子、蛇がだめだったのか。初耳だ。

## 第四十二章

葉っぱの裏に集音マイクが付いてんじゃねえの、つてくらいに降  
つてくる蝉の鳴き声。木々の隙間から時折隣の山の稜線が見える。  
人の気配が全くしない。樹木の匂い。樹液の匂い。昆虫っぽい匂い。  
二人の汗の匂い。傾斜。少しずつ息が荒くなる。ゴーグルで調べた  
時はもう少し小振りな山に見えた。有美子、大丈夫？うん。足とか  
痛くない？大丈夫。結構登った。足の裏に土の層が付着しているの  
が分かる。蝉の声は幾分減った気がする。暑さもバス通りを歩いて  
いた時に比べるとあまり気にならなくなった。しかし相変わらず汗  
は落ちる。有美子の顎から落ちる汗にはファンデーションの色が混  
成している。あーあ、せつかくの化粧が。っーか顔はフレームアウ  
トするから別にいつか。風は、ない。羽虫が飛来して頬に当たる。  
ねえ待つて。有美子の声。ん？刺された。あ、本当だ。有美子の肩  
蚊に刺された跡。大変だ。わたくしは鞆から携帯用ムヒを取り出し、  
患部に塗ってあげる。どう、まだ痒い？うん、ちよつと。あ、掻い  
ちやだめだよ。だつて。そうだ、虫除けしゅしゅつてしてあげる。  
ああ、してして。わたくし今度は虫除けスプレーを取り出す。有美  
子の肩。しゅしゅ。首。しゅしゅ。ちよつとだけ露出している背中。  
しゅしゅ。静かだね。うん。誰もいないね。うん。しゅしゅ。有美  
子、バッグから口紅を取り出し汗で薄まった部分を補修。だから顔  
はいいって彩らなくても。その分からだを。からだを。ぬふふ。わ  
たくし屈んで有美子の足首にしゅしゅ。脛にしゅしゅ。ワンピース  
の裾から中に入れる。しゅ。あ、もういいよ自分でやるから。  
有美子が両手で制する。右手に持っていた口紅の先端がわたくしの  
手の甲に触れる。遠慮するなつて、蛇以外からも有美子を守るのが  
俺の使命だろ。しゅしゅ。でも、あ。膝。しゅしゅ。スプレー管、  
レモン色の布一枚隔てた目に見えぬ空間をじわじわと上昇。ぬふ。  
太腿の外側。しゅしゅ。ねえ、そこはいいつてば。よくない。しゅ

しゅ。内側。しゅ。あ。さらに上の方。あーん手が届かないよ。だからといって、貸して自分でやるから。だめ。あ、何よちよつと何すんの。こうやって手で伸ばした方がいいんだよ、一箇所に集中しないように。ちよつと、やだそんなにもち上げないでよ。なんか熱いよ有美子の腿、熱あんじゃやない？そんな訳ないでしょ。あー琴美のがうつったんじゃないだろうな。まさか、あん、ねえ本当止めて、もう大丈夫だから。だめだよ、こうやってさ、満遍なく隅々に行き渡らせとけば絶対に刺されないからね。うんありがとう、分かったから。うー蚊よー、俺の有美子を刺したらただじゃ済まないぞお。わたくしの右手の指、上へ、奥へ、太腿の、肌の、有美子の肌の、あ、布の感触、ピタつとした薄手の、この手触り、すいちゃんだ。すいちゃんだ。あ、ちよつと止めて、誰かに見られたらどうすんの。誰もいないよ、そのためにここまで来たんじゃない。さっきの、車洗った人が着いて来てたりしない？来てる訳ないよどう考えたつても…あん。ねえ有美子見せて、すいちゃん。だめよ、頂上まで行くんでしょ。行くけど、だから、見るだけにするから。だめ、ちよつとやーだ、頂上行ってから、ね、ね、はい、行こ。そう言っただくしの手を振り払い、歩き出す有美子。宇宙の鼻息でパンパンに膨張した二酸化炭素を蹴散らして。レモン色が新緑の中に溶け込む。それを眺めながらわたくし、先程手の甲に付着した口紅をそつと自分の唇へ擦り付けてみる。虫除けスプレーの匂いがする。遠ざかる有美子の尻。あーん待ってよ有美子。早歩きの有美子。いつか一緒に歩いた丸井のデパートを思い出す。あの時もこんな感じで有美子の後姿を見ていた。兎みたいにぴよんぴよこ跳ねていた。有美子の後姿、本当かわい。でも、後ろ姿に名前はない。

## 第四十三章

なかなかどうして音森山。音森山と書いておとずれやま。気付けば辺りは高木ばかり。見上げても空は枝葉の狭間に申し訳程度に貼り付いているだけ。時間の代わりに汗が流れ、風の代わりに鼻息と溜息が吹き荒れる。誰もいない。疑わしいくらい存在しない。どっかに隠れてんじやなかるうか。あるいは全員が透明人間で我々が気付いてないだけとか。わたくしは歩きながら目を凝らす。葉っぱ一つ揺れない。透明蝉が時折思い出したように鳴き出して中途半端にその声をフェイドアウトさせる。最高じゃん。もしかしたらそのためにだけあるような絶好の場所だったのかも。凄いぞおとずれやま。凄いぞグーグルマップ。またちよつとだけ勾配がきつくなつた。有美子。うん？遠足みたいだね。そうね。有美子。なあに。じしし。何よ気持ち悪い。有美子、楽しい？ええっ？道は蛇行を繰り返すようになり、土から露出した木の根にわたくしは三回連続で躓いた。楽しい？千枚通しで氷を割るように時折木漏れ日が乱暴な光線を大地に突き刺す。ねえ有美子ってば。楽しいわよ。本当？本当？本当だよね楽しいよね、なんか遠足みたいだね。それさつき聞いた。何度目かのカーブを曲がった時、その光が一箇所に集中して思い出し笑いを堪える図書館員みたいに揺らいでいるのが見えた。小さな池だった。周囲に高木はない。山がそこだけ秃げている。課長の頭を思い出した。有美子が無言で池に近付く。水面に映った青い空が仄かに波打っている。風もないのに不思議だ。陽光が乱反射しながら黄粉のように水中を舞っている。静かだ。本当に静かだ。足元の雑草が無数に生えた人間の細い指に見える。我々は並んで淵に腰を下ろし池の底を覗き込んだ。水は思ったより透き通っている。その表層。油膜のように映る有美子の顔。目。鼻。口。眉毛。相変わらず各パーツの動きが極めて乏しい。笑っても怒っても同じ表情に見える。でも大笑いした時は唇の厚さ以上の幅でピンク色の歯茎が見



える。わたくしは知っている。そういや大笑いする有美子を最後に見たのはいつだ。それは余りにも特殊な顔立ちとなるので有美子は滅多なことで大笑いはしない。笑い方も、そして生き方も謙虚な有美子。黄色い前開きワンピース。踵の高いサンダル。ショートカットの髪の先端に汗の滴が並んでいる。あ、うなじの下。U字型にちよっぴり深く抉れた背中。堅甲骨の中央に平仮名の「く」の形で皺が二つ寄っている。有美子の白い肌。生肌。く。何だか怖いわ……。立ち上がった有美子の口から突然そんな言葉が垂れた。レモン君を広げることが怖くなってやっぱ帰ろ、と言い出したかと思いわたくしは藪の中に頭から突進したくなる程焦った。でも有美子は一瞬に怖い物を発見してそう言ったのだった。有美子の視線を追ってみる。何だあれ。それは苔の生えた小さな地蔵だった。池の畔。少しだけ窪んだ岩陰にそいつは立っていた。わたくしは近寄ってその地蔵の台座に刻まれた文字を読む。子育て地蔵……だつてさ。こんな所に？ うん、ほら書いてある。どこ？ここ。本当だ。有美子台座を凝視。顔のパーツだけではなく視線もそこでフリーズ。ん、どした？何これ。有美子の小さな声。箸で掬い上げた麻婆春雨のように震えている。どれ、あ。地蔵の足元。石に入った短い亀裂にピンク色の細い棒が突き刺さっている。花火だ。花火の残骸だ。わあ、見てよ。有美子、地蔵の中途半端に広げた掌の中に4本の煙草の吸い殻を発見。さらに台座背面の大きく陥没した部分に大量のティッシュペーパーが詰め込まれているのも確認。ねえねえ、新しいよ、これみんなついさつきって感じだよ。有美子の麻婆春雨声が一段と震える。朝から花火はやらないだろう。じゃ昨日の夜だ、だつて一昨日の夜は大量の雨が降ったもん。そうか。やっぱここ人来るよ、しかも来たばっかだよ。今は誰も来ないよ安心しろ。だつてえ、来てるのは確かじゃん。大丈夫だよ有美子、昼間は大丈夫、クソ暑い中こんな所に来る人は絶対にいないって。わたくしは有美子の目を見て言った。何も根拠はなかったが。有美子の目。眼球が忙しなく何かを訴えている。そう言えば結婚して間もない頃、ゆっくりと開閉する有美子

の臉を斜め下から見て（あ、セックスの直後か。そんな機会じゃないと女の臉の開閉をあの角度からは見ることはそうそうない）わたくしがへえ、よく見ると奥二重なんだね、と言ったら、何を脱いだ瞬間よりも猛烈に赤面して慌てて両目を掌で覆い隠したことがあった。わたくしは何だか物凄くいけないものを見てしまった気がした。有美子の目。細くて腫れぼったくて、でも中心はクリクリツとした黒目。そうだよ。有美子の目は意外とクリクリツとしているんだ。見合い写真で見た時はあー可哀相な目しちゃって、でも仕方ないかわたくしも人のこと言えないし、と思ったものだが、うん、今は可哀相って思わない。時折可愛いとさえ思う。錯覚だろうが。その瞳の向きが訝し気にわたくしから離れ、古地蔵を見つめる。石の掌を見つめる。そしてポツリと呟く。酷いよ。声に反応したかのように池の水面が幽かに揺らぐ。そうか、子育て…。有美子、おもむろにバッグから携帯を取り出す。液晶を見て小さく舌打ち。溜息と同時に声を洩らす。圏外なんだ、ここ…。しばらくその二つの漢字を見てから力なく携帯を折る。かちゃ。液晶の裏面に貼られたプリクラ。有美子と琴美のツーショット。心配ないよ、あんな元気に出て行っただじゃん。有美子は俯いたまま答えない。隣の座席に座った柔らかくて肌触りの良い恐怖にぐいぐいと太腿を押されているみたいな表情で。急ごう有美子。わたくしが言う和有美子は小さく溜息をついて、顎の尖端が欠けるように頷いた。

再び歩き出す。空が開けてくる。頂上は近い。さらに進むと道は緩やかな傾斜の石段に変わった。見上げてみる。20メートルくらい先に空と地面の境目が見える。おそらく最後の難所だ。もうちょっとだよ有美子、頑張ろうね、ほら俺が引っ張ってあげるよ。サンダル履きで辛そうな有美子の手を取る。無言で握り返す有美子。むう。鼻先にある未来をこれ程までに愛おしく感じたことがあっただろうか。もうちょっとで頂上。もうちょっとでレモン君ドバツ。ああ、期待から汁が出ちゃってる。からだ中の骨という骨が全部ペースト状になったみたいだ。二人の汗が掌の中でぬかるみの旋律を奏

でる。登る。登る。それにしてもくそう、というのが二つ。くそう、何であるのプリクラわたくしが写っていないのだ。二人はどこで撮ったのだ。わたくしをハブにして二人でどこへ行ったのだ。くそう、あの地蔵の掌で揉み消された吸い殻。4本のうち2本はフィルター部分が赤く染まっていたぞ。一体何をした。真っ赤な口紅を着けた女と。夜に花火をしただけであんな大量のティッシュスーパーを消耗するか普通。ぬぬぬ。誰も来ないのを良いことに唇で舌で口紅がちゅるちゅると溶けてぬちゃぬちゃとあんな所でそれから地蔵に片足掛けて大きく開いてほらもつと大きくいやん暗闇の肌色。暗闇。月明かり。わあ。わたくしは昨夜の見事な月明かりを思い出した。有美子の蒼黒い肢体と汗の湖面と静かに蠢く踵とふくらはぎと太腿とお尻と陰毛を思い出した。くそう。わたくし勃ちそうになっっている。今頃になつて。地蔵に片足掛けて汗にまみれた月明かりの下でお尻がくいつとぶるるんつと、ぐおう、有美子花火で照らしてあげるよ、下から照らしてあげるよ、熱くないかい、照らされて、照らされて、おっぱいは月明かり、お尻は花火、パチパチ燃える炎、揺れる影の膨らみ、蒼いおっぱいオレンジお尻パチパチパチうおつ。はあ、という有美子の声。息を洩らす声。はあ。はあ。あ？妄想遮断やるせない高さの木柱が眼前に現れる。石段はそこで終了。着いた？と有美子。みたいね、とわたくし。音森山頂上、と木柱の文字。天空に広がる青空。着いた。ついに到着。眺望。うーん微妙。枝葉の陰から遠くの田畑が僅かに見渡せる。あ、例の真新しい国道も見える。その上を跨ぐように凡庸な入道雲が空を占拠している。日差しが痛い。おまけに無風。歩いて来た林道に比べ頂上はかなり気温が高そうだ。暑い。確かにここが隆起した土地の最頂部であることはなんとなく分かる。地盤はもうどの方向を見ても下降している。特に木柱の背後は断崖のような急斜面。階段状の岩肌の周りに太い松の木が引力に逆らった角度で乱立している。まあ、とまれかくまれ頂上だ。頂上だ頂上だ頂上だ。もうわたくし、はち切れる。前開きワンピースを着た女、中にピンクのミニミニパンツ、最新型デジ

タルカメラ。うー。この三つの言葉を並べただけでもう全ての毛細血管がグミみたいにはち切れる。頭の中を欲望の大江戸線が時速四百キロで暴走する。熱く。暑い。暑いぞおい。日影が欲しい。どこぞに日影が、おわっ。周囲を見渡していたわたくしは思わず叫喚してしまった。木柱の右側、もう道も消えて単なる叢となっている奥に巨大な石碑。何だあれ。さあ…。小首を傾げる有美子の背中に再び「く」の文字が浮かび上がる。

## 第四十四章

地種類の雑草を踏み付けながら我々はその巨大石碑の前まで歩いた。見上げる。本当にでかい。幅は1メートル以上、高さは4メートルくらいありそう。アーチ型で縦に一行、西条寺本堂跡地、と大きな文字が刻まれている。へえ、昔はここにお寺があったんだ。わたくしが言つと有美子は文字を興味なさそうに一瞥して辺りを小刻みに見回した。よし、咄嗟の時はこの裏に隠れよう。二人の間を地味な色彩の蝶が舞う。有美子の首筋にムカデのような汗が這う。わたくしはとりあえず鞆を石碑のコンクリート基礎の上に置き、携帯電話で時間を確認。概ね予定通りの時刻だ。よし。登って来た道を振り返る。ここへ辿り着く唯一の道も石段の登り口まで悠々と見降ろせる。それ以外の方角も一応チェック。鬱蒼と茂る森と下へ向かう道なき斜面。木柱の後ろは断崖。よし。四方全てを見渡せる。正に理想的。絶対的に誰もいない。よし。よしよし。ドバツとできる。ドバツと広げてプリンちゃんのような状況をカメラに収められる。いよいよだ。いよいよその時が来るのだ。考えただけでも、いや、先走る欲望に思考力が追いつかない。言った通り最高の場所だ。有美子、答えずに俯いたままお腹の前で指の先端をぼんぼん当てている。わざわざダウンロードした不安を心にコピペしているみたい。サンダルひーちゃん半分草に埋まっている。そこから伸びる有美子の二本の生足。太いと本人は言うけど確かに細くはないけれどそれは長さに対して太目ってだけでそこを何とか細くしようとして少し前から改造に取り組み最後は死ぬ気で床に月光が反射する湖面を作るまで頑張った有美子の三十五年もの足。綺麗に撮って欲しいだけ。綺麗に。よし有美子、行くよ。綺麗に撮るよ。わたくしは鞆を開けてカメラを取り出した。電源ON。電池マークマックス。青空の下でモジモジしながら石碑の前に立つ有美子基いラビットさん。狂おしい程に渴望した状況。わたくしの心臓が唸りを上げている。

左心室と右心室の間を順番前の林家パー子が何度も往復しているみたいだ。うつつう。もう後へは引けない。後へは、ひ、引けない。「じゃ、ひゃじめようか」

くそう。口が回らない。わたくしは有美子に向けて首から下げたカメラを構える。じつと地面を見つめていた有美子の手が、ゆっくりとレモン君の閉じ目を掴む。両手で掴む。行くぞ。

「はい、広げて、有美子っ」

有美子、わたくしを見る。カメラではなくわたくしの目を見る。奥歯を噛み締めて。何だか今にも泣きそうな表情。指が、十本の指が、マジックテープで留めた両端を掴んだまま震えている。

「有美子、早く」

「…」

「どした？」

「待つて。ねえ、誰も来ない？」

「来ないよ」

「来たらすぐ教えてよ」

「分かってる。すぐ教えるから」

「ねえ」

「ん？」

「ねえ」

「何だよ」

「お外でさ、服を脱いじゃいけないんだよね」

「本当はね。でも平気平気。誰にも見られなきゃOKなんだ」

「見つかったら、捕まっちゃうよね」

「大丈夫。俺が守るから。有美子は捕まらない」

「ほんと？」

「本当だよ。だから早く広げて。大丈夫だから」

「うつつ」

「頑張れ有美子。ほら、すいちゃん、出ておいでえ。オープンザレモン君」

「うっ。なんか怖いよう」

「大丈夫だつて。ここには俺しかいない。怖いことなんてこれっぽちもないよ」

「だけど、なんて言うか私、足太いし、その、ブスだし」

「今更何言つてんだよ。そんなの関係ないじゃん。どうせ顔なんか写さないんだから」

「そつよね」

「そつだよ」

「どうせ顔なんか、よね」

「え？あいや、別にそういつつもりで」

「いいの。分かつてる」

「ああ有美子ごめん俺の言い方がまずかった。有美子の足は太くないし、顔もその、ブスじゃない」

「いいんだつてば。ふうー」そうやって有美子、大きく息を吐いてからパンパン、と自分の頬を手の平で叩く。「はい。ごめんね」

「いや、俺の方こそごめん」

「うっん」

「……大丈夫？行ける？」

「なんとか」

「よし、行くぞ」

「うん」

「スリー、トゥー、ワン……」

「待つて、あーん待つてよ」

有美子、右を見る。左を見る。後ろを見る。

「いい？」

「うっん」

「よし。では改めて。スリー、トゥー、ワン……」

わたくし、必死。有美子も、必死。太陽が有美子に舞い降りる。

「ゴー！」

有美子、小刻みに両足をバタつかせながら、胸の部分のマジック

テープを2箇所だけ外す。開く。白いブラジャーが見える。しかしあつと言つ間に閉じてしまう。

「あーんごめん」

「ちよつとお、何で閉じちゃうの」

「だってさ、ごめん、なんか…できない」

「ええーっ、何だよ、できないじゃないよ有美子」

「だって」

「やるって言ったじゃん」

「言った」

「じゃあやるつよ。ほら、綺麗に撮るから。早く。誰もいないから」

「うん…でもさ、なんか、おかしいよどう考えても。こんな、お外でさ、わざと服をはだけるなんて、そんなこと普通しないし」

「待ってよ。それ今言うことじゃないよね」

「そうだけど」

「分かった。踏ん切りが付かないんだ。じゃ俺が外してあげるよ」  
レモン君の胸元をしっかりと閉じる有美子の両手。わたくし、そこに手を伸ばす。後ずさりしながらからだを丸めてしまう有美子。

「ちよつと、止めて」

「大丈夫だから」

「全然大丈夫じゃないから私」

「いいから、行くよ」

「だ…め、うっ」

「有美子…ほら、この手、離して」

「いや…」

「離…せ…約束…しただろ」

「いやだ…い…ちよつと爪が…何すんの…うっ」

「ほら有美子」

「い…や…だっ…もう止めて!」

痛っ。有美子の小さいからだのどこにそんな力が潜んでいたのだ。わたくし突き飛ばされて尻餅。後頭部が石碑の基礎にゴン。



「あつ、大丈夫？」

「…いつてえ…」

「ごめん」

「何すんだよ」

「だから、ごめん」

「お詫びのしるしに、それ、開いてくれる？」

「それは…」

「できない、か」

「ごめん」

「…ふう。……」

「…」

「あのさ」

「うん」

「意味ないじゃん」

「え？」

「何のためにこんな所まで来たんだよ」

「…」

「何のために俺、場所調べて、ワンピースまで買って」

「分かってる。私もそのつもりで、マジックテープにして」

「そうだよ。それが何だよできないって」

「だって、やっぱ、よくよく考えるとその、やっぱおかしいし」

「おかしいのは最初から分かってんだよ。でも敢えてそれをやりに来たんだろ。俺たちいつも真面目に生きててさ、有美子なんか特にさ、だから一回くらいって、そんで俺張り切ってさ、あとちょっとじゃん。あとちょっとのところをよくよく考えてどうすんだよ。これじゃ本物のバカだよ。俺さ、何かさ、すっごい気を遣ってさ、つか土下座までして。意味ないじゃん。何のためにワクワクしたんだよ。俺、何のために結婚したんだよ。全然意味ないじゃん」

「結婚…って、それはちょっと」

「言い過ぎてないよ。あーん、もう言っちゃうけどさ、有美子って





「帰る」  
「#105546」

## 第四十五章

笑顔を作る神経にわっさわさと衝が生えてからだじゅうの液体が詰まりまくってパイプフィニッシュを3リットルくらい一気飲みしてもその流路は塞がれたままで要するにもう全てが駄目で最低な肉の塊でしかなくなったと自覚している分まだいいだろ。許せるだろ。あーあ最低。もう終わりだよ最低。何か凄まじく深い所まで終わつたよ最低。頭が、後頭部が酷く痛い。うっ。あーコブができてる。畜生。畜生だ最低。わたくし、諦める技術を集結して頭を押さえないから立ち上がる。直射日光。眩暈。鞆を拾って肩から下げる。カメラを首から外し、その中に押し込む。歩き出す。一步。一步。ザツ、ザツ。草の上に有美子が買ってくれた運動靴の跡が刻まれる。聞こえない。有美子のザツ、ザツが聞こえない。その方がいい。帰りは別々の方がいい。凄まじく深い所まで別々になりそうだから。あーあ、死のう。風が出てきた。爽やかだ。しゃんしゃんしゃんしゃん。いい音色だ。死んじゃおう。つーか死にたい。人間は不完全な死体で生まれて一生かかって完全な死体になる、と言った作家がいたよ。うな気がする。違う。それは微妙に違う。不完全な死にたいで生まれて一生かかって完全な死にたいになるんだ。物証論じゃなくて精神論だよ。からだじゃなく、心だよ。希望だよ。希望だってさしゃんしゃんしゃん。たはは。もうわたくし形而上。もう。もうもう。もう有美子は変だよ。正直ブスだし。からだはそんなに悪くないけど。つーか良くなったけど。からだだけは。しゃんしゃん。でも変だよ。よく分からないけど型に嵌り過ぎだよ。ラインに乗っかり過ぎだよ。そこから食み出るのを怖がり過ぎてるよ。要するに面白味がないんだよ。退嬰的なんだよ。当たりくじのないガリガリ君とか、無料サンプル動画のないエロサイトとか、そんな感じだよ。あーつまんね。何の特典もない結婚。何の特典もない妻。あ。トンボだ。トンボが飛んでる。しゃんしゃん。帰ろう。結局下のバス停で一緒

になるんだらうけど、せめてそれまでは別々に帰ろう。くそう。何で一時間に1本しかないんだよ。くそバス。しゃんしゃん。あーあ、トンボ。飛んで。舞って。頂上と書かれた木柱の上にしゃんしゃんと。って何だよ、しゃんしゃんうるさいよ。んあ？ザルだ。ザルが逆さまになって木柱の後ろの崖を斜めに移動している。わあ。わたくし遂に崩壊。モラルハザード。違う。帽子だ。ザルのような帽子を頭に乗せた人間だ。嘘お。あの下は断崖だったじゃん。うわ。ザル頭。一人じゃない。二人、三人、四人：次から次へと。ズチャツ。何だ。誰だ。ズチャツて何だ。何の音だ。しゃんしゃんしゃん。これは鈴だ。揃いの白い服。何だっけ。作務衣。そうだ作務衣ってやつだ。んげ。あれだ。あつまり修行僧だ。あの恰好。間違いない。そろそろ上がってくる。崖から浮上してくる。五人、六人、つーかあの急斜面に道なんてあったんだ。有美子の言う通りやつぱ人来るんじゃない。ほえー。ドバツってやんなくて正解だったか。たはは。所詮無理だったか。てか逆に命拾いしたのか。何だよ。有美子良かったな止めといて。見られずに済んだじゃん。あのまま続けたら偉いことになってたな。先頭の僧、登り切ってこちらへ歩いて来る。二番目三番目もそれに続く。あ。作務衣の胸に西条寺と書いてある。そうか。そういうことか。ザル帽子で顔が半分隠れている。その頭上をトンボどもが騒ぎ飛んでいる。しゃんしゃん、しゃんしゃん、しゃん。あれ。僧どもの足が一齐に止まる。わたくしを確認して。何だよ。びっくりするなよ。お前らの寺の本堂跡地に人がいたって全然おかしくないだろ。今じゃここは単なる小山の頂上でしかない訳だし。誰でも来れる普通の場所な訳だし。普通のお外、な訳だし。なあ有美子。ゆ。あ。振り返りたくないと思いつつ振り返ったわたくしの中で林家パー子が凍り付く。僧どもが立ち止ったのは、わたくしを確認したからではなかった。わたくしの後方。石碑の前にすくつと立った女の後ろ姿を見たからであった。下着だけしか着けていない女の後ろ姿を。どええつ。ゆ、有美子、あわわ。そうだよさっきのズチャツて音。あれはマジックテープを一気に外し

た音。有美子の足元にすりと落ちたばかりのレモン君。ぬわあ、何で？どゆこと？有美子やばい人だ人が来ている着るすぐ着るつーかもつ見られたけどいいから恥ずかしいから早く着る着てそして逃げろつわあもうわたくし逃げちゃおうか一人で逃げちゃおうかだつて関係ないもん勝手に脱いじやつたんだもんでもそれもかえつて怪しまれるよああどうすりゃいいんだわたくしとにかく妻の痴態を隠せ葬れもうモロバレだけどいいからなかったことにするんだ走れ。叢を走るわたくし。どけトンボ。わたくしの右手、五本の指でこの形。クローズ。有美子クローズ。つーかクローズできないじゃん、レモン君もう完全に脱いで下に落ちちゃつてる訳だしああ、何で今頃になって脱ぐかなあ、有美子、後ろ姿、気付いてくれない、わたくしレモン君を拾つて有美子の背中を覆う。着ろ、人が来た。有美子の後頭部に小声でまくし立てる。ところが払いのける。わたくしを、レモン君を払いのける有美子の肩。えつ。落下するレモン君。何で？どうした有美子。再度拾つて肩に掛ける。またそれを払いのける。バカッ、人が来たつて言つてるだろつ。そんなわたくしの押し殺した怒号を有美子完全無視。そんで足元に落ちたレモン君を踏み付け、コンクリートの台座に乗つかる。タツ、タツ。ひーちゃん。の踵から快哉な音が響く。巨大石碑の真横に白い背中。横一文字にブラジャーの線。お尻にピンク色のちっちゃな三角。あわわ。ゆ。く。わ。こ。見ている。僧ども。全員立ち止まってこつちを見ている。十人以上いる。あわわ。全員で。有美子の後姿を。わたくしの妻の下着姿を微動だにせず凝視している。ちよつと待つてよ、そんな、だつて、だつて有美子、嘘だろ、さっきあれ程拒否つたくせに、それに人が見てるつーのに、おい、おい、あああわたくし恥ずかしい死ぬ程恥ずかしい頼むよ有美子頼むから服着てくれよ隠してくれよ分かつたよわたくしが悪かつたよもうわたくしに恥をかかせないでくれよ非常識だよ変態だと思われるよ外でそんな恰好しないでくれよ。またレモン君を拾おうとしたわたくしの耳に幽かに聞こえるチーン。え？ずわあ。僧ども両手を胸の前で合わせて何か言っ

てる。みんなで何か言ってる。お経だ。マジかよ。こりゃ完全にお経だ。こっち見たまま全員で合掌してお経読み始めた。有美子大変だよ、何やってんだよバカな真似はよして早く降りてそこから降りて。と有美子を見上げて改めて。

うっ。

うっ。



## 第四十六章

わたくしのからだ、林家パー子以外の部分も凍り付いて。だってよく見たらそれは呪術的なまでに凄い光景で。合掌するに値する後姿で。だって、だって、何だよこれ。有美子、後ろを向いたままピョンと背筋を伸ばして立って両腕は腰。踵の高いひーちゃんを履いているモンだからもう膝の裏側が反り返るくらい真っ直ぐ伸びて、有美子の足、こんなに細かった、こんなに長かった、うわ、腰のくびれと曲げた肘でからだの両サイドに見事な菱形を作って、そこから青空が覗けてうわあ、ポーズだけならまるでそこら辺のグラビア。いやそれ以上。青空を包み込む見事なダイヤの形。凄いよ有美子。正にブルーダイヤだよ。金銀パールプレゼント状態だよ。陽光を浴びた眩しい背中。その下に美し過ぎる隆起。美し過ぎる膨張。それを空へ突き出して、高く突き上げて、ああ、柔らかそうなものがピンク色の小さな繊維に窮屈そうに収まって、下に食み出た白い肉は新品の歯ブラシの上にとっぷり乗せた歯磨き粉のような危うい清潔感に包まれて、これは圧倒的に、尻だ。人間の、女の尻だ。尻ってどうしてこんな形状をしているのだろう。肉が一箇所に集結して。倒れてもぶつけても痛くないように？保護緩衝材？その形にどうして個人差が生まれるのだろう。すいみつとう。餃子。本当は差なんてないのかもしれない。見る者があるという幻想を抱いているだけなのかもしれない。このすいみつとうは、幻想なのかもしれない。相手が幻想ならば、そうだよ、もう手を合わせるしかないよ。そして真夏の日差しと合掌とお経を浴びながら有美子の腰に添えられていた手がゆっくりと上昇する。背中を這う。あ。ホック。嘘お。カチツ。嘘お。外した。外した。ブラジャー。外しやがった。嘘お。それは有美子絶対NGだって言ってたじゃん。ちよつとマジかよ。わたくしフリーズパー子になったまま息と唾を同時に飲み込む。何人かの僧が震えている。鈴の音でそれが分かる。するする。肩から

外れるストラップ。そのまま魂が抜けたように有美子の足元へ落下する白いブラジャー。ああもう誰も何も制止できない。これは儀式だ。これは洗礼だ。世界に対するバプテスマだ。デブじゃないけど顔にコンプレックスを抱えている人間全てのレジスタンスだ。その後頭部が、上半身が、緩やかなスピードで回転を始める。この何週間で急激に収縮した脇腹の肉が雑巾を絞るみたいに擦じれて、向くこっちを向く、おっぱいが、ブラジャーを自分で外しちゃったおっぱいが、白いおっぱいが、ずわわっ、側面、にゅわぁ、正面、正面を向いた、現れた、二つのおっぱい。決して大きくはないけれど、その代わり垂れてもいない、ちよつと乳首が黒ずんだ柔らかそうなおっぱい。ああ、合掌だよ音森山。合掌だよ西条寺本堂跡地。今ここは世界一の景勝地だよ。有美子のおっぱい、地図帳に掲載したいよ。グーグルマップの航空写真で探し当てたいよ。ってげげ。げげげっ。お経と同時に地球が一瞬止まる。有美子、何なんだその顔。真っ赤。真っ赤。紅潮しているのではない。塗りたくってある。真っ赤過ぎる口紅で。顔全体を真っ赤に。頬も、額も、顎も鼻も口も瞼もこめかみも全部真っ赤に。いつやったんだそんなこと。わたくしの足の先に砂のような震えが浸み込む。何で？何で？何で？わたくしはバッターボックスにいた、さぁ来い、とバットを構えピッチャーを睨んだ、ところがボールを投げてきたのはファーストの奴だった、そんな心境。おいちよつとそりゃないだろ。だったら最初からマウンドを切り取ってファーストベースの近くへ移しとけよ。切り取って？そうか。赤に意味はないんだ。ただ有美子は切り取ったんだ。自分の顔を自ら塗り潰してこの世界から排斥したのだ。これはわたくしの理想を叶えるための行為ではない。すいみつとうや露出投稿写真などといったわたくしのむほほ計画に従った訳ではない。わたくしの結婚の定義に従った訳ではない。そして勿論幻想でもない。これが、有美子が出したわたくしへの答えなのだ。世界への答えなのだ。ああ有美子の顔が消えてゆく。目が、鼻が、口が消えてゆく。表情と意味と涙と愛が赤い影の中に消えてゆく。その影

は独立した闇となり有美子のからだを支配する。わたくしはこれから行き摺りの暗闇を感じることで惑溺の灰汁を昇華させていくのだ。いつか有美子は言った。この世の全てから守って欲しい。この赤い暗闇こそが、この世の全てだったのだ。わたくしは台座の下に落ちているレモン君を拾い上げる。有美子に着せる。有美子もう動かない。6か所のマジックテープをしっかり留めた後、わたくしは修行僧たちの前に走る。膝を折る。両手と額を地面に付ける。申し訳ありません、今日のところはここをわたくしたちに使わせて下さい、どうかひとつ、お願いしますっ。言い終えて再び額を地面へ擦り付ける。強く、強く擦り付ける。遠い地底を這うような蝉の声。それ以外は無音。静寂。それがしばらく続いた後、しゃん、しゃん。鈴の音。顔を上げる。あの夜、デミグラスな傷を負ってやっとかさぶたが取れた位置から再び流血。しゃんしゃん。僧たち無言で移動。ちよつとずつ立ち位置移動。あら。わたくしの前に横一列。そんで一斉に、合掌。うわぁ。莊嚴。それから並んでぞろぞろとあの石段の道へ。親切にもトンボたちまで引き連れて。しゃんしゃんしゃんしゃん。風が吹く。木の葉が翻る。雲が流れる。わたくしの額、ずつとオンザ地面。僧及びトンボ群が石段を降りて小さく小さくなるまですつと。

## 第四十七章

赤い有美子は石碑の前に立つたままだった。コンクリート基礎の上に赤い汗の滴が幾つも弾けていた。ブラジャーはもう足元に落ちていない。相変わらず日差しは痛く、気紛れな蝉の声に交じって時折カラスの声も聞こえる。音森山の頂上には有美子とわたくしだけ来た時みたいに。それ以外誰もいない。陽光の角度も殆ど変わっていない。違うのは有美子の顔の色のみ。赤い瞼。瞬きをした跡。汗が流れた跡。見ているのではなくとりあえず視界に何かを詰め込んでいるだけ、といった赤い眼差し。放埒の限りを尽くした後のような半開きの唇。そこだけは正解の場所。正解の色。それにしても随分と乱暴に塗ったモンだ。鼻の下やもみあげ周辺は汗にやられて凄うたことになっている。シークリームにケチャップを塗りたくったみたいだ。赤い有美子。一瞬の気の緩みが笑いに繋がりそうなのでわたくしこれ以上見るのを断念。足元に置いてあったバッグを肩に掛ける。

「帰ろ、有美子」

「写真は」

わあ。赤い有美子が喋った。わたくしは驚いて振り返り、慌てて眼を逸らし込み上げてくる笑いに蓋をした。だめ。

「ああ。いいんだ」

「私がブスだから？」

「違うよ」

「赤いから？」

「違…ふっ」

だめだ笑っちゃう耐えられない。わたくし有美子の右手を握る。歩き出す。南臭い風がわたくしの四十歳臭い頬を吹き逃げて行く。こういうのを虚脱感と言うのだろうか。写真。前開きワンピース。あれ程渴望した状況。でも有美子のすいみつとうを見た時、どうい

う訳かわたくし写真のことは完全に頭から外れていた。修行僧たちが合掌した時点で、もしかしたらわたくしの中の全てのシャッターが押されちゃったのかも知れない。プリンちゃん。キミを画面の中で見てちんちんに手を合わせるヤツは世界にゴマンといるだろう。でも、申し訳ないが手と手を合わせようという気にはなれないよ。そうだ。きつとそういうことだ

## 第四十八章

あの小さな池。子育て地藏。良かった、池の水が綺麗で。有美子、バシャバシャと顔を洗う。洗顔フォームの泡が飛散して水面に謙虚な波紋を散在させる。あ。アメンボだ。先程は気付かなかつたな。結構いる。すーいすい。アメンボ赤いなあいうえお。変な呪文を思い出した。上野の吃音矯正クリニック。わたくしは半年間その言葉を言わされ続けた。アメンボ赤いなあいうえお。赤い？赤くないじやん。これが赤かつたら先程までの有美子はどうなるんだ。やべ。また笑いのマグマが地底でグツグツ唸り始めた。っておや、わたくしいつしか黴が除去されている。あの時笑顔を作る神経にわっさわさと生えた黴が。

「ねえ。約束して」

洗い流した顔をフェイスタオルで拭き取りながら、有美子がわたくしを見ずに言う。

「うん？」

「見ないで」

「何を」

「私の、顔」

「どうして」

「どうしても」

「分かった」

わたくし、地藏の前に腰を下ろす。台座に寄り掛かる。はあ。ここへきて疲れがどつと。四十男にとってはきついコースだったか音森山。っかこの台座、結構高さがあるんだな。これじゃ片足を掛けて股を広げて、って無理だよ有美子の足の長さじゃ。いくらひーちゃん履いてても。それにたとえ届いたとしても今度はわたくしが届かない。くそう。何か台になるものは。あ。あの大きな石なんかぬおっ。でもあれをここまで運ぶのが難儀だな。うーむ困ったぞ。

アメンボ赤いな困ったぞ。困ったけど有美子は見ないぞ見ない約束。  
「バスの時間、大丈夫？」

「あ、うん。余裕で間に合うよ」  
「構造的にね」

「へ？」

「だから、構造的に整っていない顔立ちの人は、どんな風に着飾っても無駄で意味のないことなのに、どうして服を選んだり化粧をしたり口紅を着けたり痩せようと思ったりするのかしら」

「はあ？」

「つてあなた、思ってるんでしょ」

「あいや、俺は別に」

「いいの。私もそう思ってるから」

「そう、なんだ」

「土台で既に差があるんだもん。どう頑張ったって太刀打ちできないわよ。なのにどうして、それでも着飾った方が何かいいことがあるかも、なんて思っちゃうのかしら。そもそも思っていることなのかな、そんなこと。いいことがあるとか。思っているの？」

「…」

「これが私の顔です、って言うていいの？笑われないの？」

「笑われはしないんじゃない？余程のことがない限り」

赤くなる、とか。うくく。やべ。

「何かさ」

「うん」

「世界じゅうの服がなくなっちゃえばいいのに」

「…」

「世界じゅうの肉もなくなっちゃえばいいのに」

「…」

「世界じゅうの人間が全部、骨だけになっちゃえばいいのに」

池の畔に腰を下ろしたままの有美子。ショートカットの後頭部。

それが一瞬、骸骨になった気がした。有美子の頭。その中には当然

頭蓋骨がある。どんなんだろう。有美子の髑髏。

「人間さ、肉の量とか表面の形とかを気にする必要がなかったら、きつと犯罪も戦争もなーんにも起こらないと思うよ」

有美子の後姿が言う。わたくし、台座に突き刺さった花火の棒を抜き取る。短くポキッと折って池の中に投げ込む。アメンボたちがさあつと散る。

「どうだろう」

「え？」

「骨だけになっただらなっただ、そこにやっぱ差は生まれるんじゃない？」

「差が？」

「私の方が綺麗な鎖骨だ、とか、俺の肩甲骨は遅しいぜ、とか」

「肋骨を豊満に見せる技術を開発、とか？」

「そうそう。白い骨っていいな、ホワイトアンドホワイト、とか」

「ふふ」

「あはは」

「あなたってさ」

「最低ね」

「げっ。」

「私、琴美の熱、下がって欲しかった」

「ああ。そりゃそうだよ」

「違うの。どうしても、絶対に、強く、どうしてもうもなく」

ポキッ。再びピンクの棒を折って投げるわたくし。散るアメンボ。

「来たかったの」

「…」

「信じてくれないだろうけど」

「この山に？」

「うん」

「てか、そんな感じもしたけど」

「そう」



「だから俺」

「うん。ごめん」

「いや、うん」

「なんか、そればっか考えちゃって。先週くらいから」

「ポキッ。ひよいつ。ぼちや。すすーつと散るアメンボども。」

「本当なの」

「…」

「いいことがあるって思った。って言うか、ううん、何かが変わるような気がした、みたいな。あー分かんないけど」

「うん。俺もそう思った」

「あなたも、変わるって？」

「うん。まあでも俺の場合は難しいか」

「変わったじゃん」

「え？どこが」

「正直に言ってくれた。私のこと、ブスでデブだって」

「いやそんなこと言っていないよ俺」

「責めてる訳じゃないの。だって本当のことだもん。いいの。そうじゃなくて、あのね、よく分からないけど最近私のことをちゃんと見てくれるようになった。それと…」

「待てよ。俺は前から有美子のことを見てたよ」

「ちゃんとは見ていなかったよ。でも、写真を撮る話を始めた頃から、少しずつあなたの視線が、視線の濃さが、変わってきたの」「視線に濃いだの薄いだのあるのか。まいーや。それと、何」

「え？」

「言い掛けたじゃん、今。俺の変わったところ」

「ああ、変わったところね。あるじゃない。自分で分からない？」

「うん。分からないよ」

「治ったじゃん」

「え？」

「今日殆ど、どもってないよ」

「え？本当？」

「うん」

ポキッ。また投げる。そうか。治ったのかな。なあんだそんなことか。まあいいやどうだって。所詮わたくしなんか。あ、そうだ。

「ねえ有美子」

「何」

「女ってさ、男の容姿とか、やっぱり気にする？」

「しない」

答え早っ。

「それより、お願いがあるの」

「何だよ今度は」

「うちに帰ったらさ、写真、撮って」

「有美子の？」

「うん」

「え？…それって、もしかして」

「…そう」

有美子の背中にまた「く」の字が浮かび上がる。

「撮ってくれる？」

「ああ、いいけど」

「良かった」

## 第四十九章

何だか涼しくなってきた。汗が引いてきたのか。レモン君の背中に時折突き刺さる木漏れ日。見上げるとそこは空を隠蔽した枝葉の世界で、季節のおしっこみたいな蝉の声を顔面に浴びた。視界から何かの汁が湧出しているような環境の中を、考えてみたら有美子は実に馴染まないコスチュームで存在していたんだな。ははは。そんな俯瞰視線が織りなす喜劇を更に下から冗漫に見上げている蛇が。つて蛇だ。台座の角にニヨロニヨロと顔を出して、う…う…。

「うわーっ、蛇だ」

飛び上った拍子にわたくし、池に落ちそうになる。

「え？どこ」

「ここ、ここ！」

「あ、ホントだ。えいつ」

「嘘お」

有美子踏ん付けた。ひーちゃんの踵で、深緑色の蛇を。ぐえっ。

そんな声を出して、蛇、叢へ一目散。嘘お。

「有美子、蛇、あ、あれ？」

「変わったみたい、やっぱ私。つてああーっ、約束破ったあ」

「あーそうだ。いや見てない。っーか見た。見たけど、有美子赤くなくなつてたからもう大丈夫」

「何が大丈夫なの」

「いや、何でも」

笑わない。嘔き出さない。なんて言えない。そもそも赤くなくとも何だか嘔き出しそうだ。でも、きつとそれが答えなのだろう。有美子。君の出した答えは正しいよ。表面形状が構造的に整っていないかったら、そこだけを闇に葬り去るしかないんだ。世界から切り取って笑いの近くに置いてやるのが最も効果的な使い道だ。ブスの。有美子ごめん。やっぱわたくし、笑っちゃう。ちゃんと見るように

なつたからかな。でもそれが自然の摂理であることを有美子は分かっていたんだね。赤い闇の中へコンプレックスを遺棄するなんて、ブス歴が長い人間にしか出せない答えだよ。さすがブスのベテラン。略してBB。あ、ベテランはVか。BV。わあ、なんかカッコいい。要するにブスはもう、笑うしかないのである。いいじゃん。笑顔は愛だよ。わたくしは笑顔を持って有美子の灰汁を昇華させていくよ。いつか有美子が言っていたループだよ。愛のループ。自慢じゃないがわたくしだって整っちゃいないぞ。構造的にも意匠的にも。有美子はそれを気にしない、と言った。いいじゃん。有美子の言う不美人ループに巻き込まれた男たちは、顎から下を愛しながら、触つて、摘まんで、撫でて、舐めて、軽く叩いて指先をつつーと滑らせてちよつと蛇行させて唇で挟んで舌で円を描いて前歯と舌の隙間に挟んで小刻みに引つ張つて右手で激しく揉んで左手で激しく揉んで両手で突き上げるように掴んで揺すつて時折爪を立てて、噛んで、噛んで、噛んで、そして笑えばいいのだ。最後に顔をちゃんと見て。「何よ、見ないって約束したくせに。それよか蛇が出たら俺が守るって約束したくせに」

「ああ。守る。守った」

「守ってないじゃん」

「だって」

「あなたってさ」

「うん」

「つくづく最低ね。もう信じられない」

ぷい、と後ろを向くすっぴん有美子。あ。プチ。わあ。今くるっところからだが半回転した時、レモン君の胸の先っぽにプチって二つ。同時に周りの空気もふわっと回転して、甘酸っぱい夏の匂いがわたくしの伸びた鼻の下を攪った。なあんで、よくよく考えたらこれ、虫除けスプレートの匂いじゃん。

「ねえ。バスの時間、本当に大丈夫なの？」

「あ、えーと今何時だ」

わたくし、携帯電話をポケットから出す。

「んー、そうだな。そろそろ降りた方がいいかも。つーか有美子、電波立ってるよ、ここ」

「えっ、本当？」

有美子、バッグから自分の携帯電話を取り出しカチャ。

「あー、でも一本だよ。その一本もピコピコしてる」

「マジ？俺の三本立ってるよ。おんなじauなのに。あほら、ここここに立ってみ」

わたくし、有美子の手を引っ張って池の近くまで。その時、風がざあつと吹いて地面に穴が開いたような太陽の光が降りてきた。太陽の光。太陽の有美子。太陽の顔。太陽の手の平。あ、繋がってる手の平。太陽のわたくし。太陽とわたくし。太陽とすいみつとう。

繋がっている、わたくしと有美子。目が合う。有美子の眉間に皺が寄ったのは、わたくしが再び約束を破ったからではない。きつとわたくし、汗で滑る人差し指の第二関節を曲げてみる。有美子の手の平の中に、ぬちゃつと沈む。どこまでもどこまでも沈んでゆくわたくしの指。有美子の中へ沈んでゆく、わたくしの濡れた指。太陽から、殊更白い顔が消える。恥じらって。弾けて。埴輪で。

「あ、本当だ。三本になった」

有美子、わたくしを引き抜いて携帯電話のアドレスボタンをピッ。カチャカチャカチャ、ピッ、ピッ。

「……あ、もしもし、ああ、そうです戸村です、今日はどうもお世話になりました、大丈夫ですか今、え？ああ乗るところ、丁度良かった、はい、はい琴美に、はい代われます？はい、すいませーん」  
ふっ。

やって来そうな眩暈に舌打ちしながらわたくしも。ピッ。クルクルクル。ピッ。

「……ああ、島本さんですか。恐れ入りますが、ご主人は御在宅でしょうか……あ、はい……」

と、そんなところである。

わたくしが語りたいわたくしの妻、有美子三十五歳のこと。

まあ要するにわたくしの妻は悲観的で暗くて怖くて腹立たしくてくしゃみを我慢し続ける華やかさの欠片もない地味な埴輪である、ってことかな。そしてわたくしは暇さえあればそんな妻の裸を想像している。それでいいのだ。きっと。最も大切な妻の任務は、家ことや子育てやごみ捨てでは決してない。ずっとずっと旦那のオナニーの対象であり続けることなんだ。きっと。ん？待てよ。あら。今夜はわたくしだけではなく確実にあと十人はいる筈だ。有美子をネタにちんちんを。くそう。あの修行僧どもめ。ティッシュ片手に何の修行をしてやがる。くそう、何なんだ、悔しいけどちよっぴり嬉しくもあるこの複雑な気持ちは。うーむ。人生とは実に不測な…。

「…あつ、島本理事長さんですか。すいませんわたくし、田端グラウンドハイツの補償の件を担当しております東京都の…」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8541f/>

---

すいみつとう

2010年10月8日14時13分発行